



東京大学

大学院農学生命 科学研究科・農学部

Graduate School of Agricultural and
Life Sciences / Faculty of Agriculture, The University of Tokyo

概要

2024 | Highlights



目次

CONTENTS

1. 沿 革	2
2. 歴代研究科長・学部長一覧	7
3. 組 織	8
4. 土地・建物	13
5. 附属施設等	14
6. 教職員	18
7. 学 生	19
8. 学部卒業生・大学院修了者	21
9. 教育活動	23
(1) 学部教育	23
(2) 大学院教育	33
10. 社会的活動	43
11. 研究活動	46
12. 国際交流	50
13. 環境安全管理室の活動状況	55
14. 領域横断型教育プログラム	56
15. その他の活動	57
16. 自己点検・評価及び外部評価の実施について	58
17. 予 算	59
18. 出版・印刷物・データベース	60
付 農学生命科学研究科・農学部配置図	
附属施設等分布図	

ご 挨 拶



農学生命科学研究科・農学部は、2024年度に創立150周年を迎えます。この150年の間、私たち人類が自然の恵みを利用して生きていくための基盤を開発し発展させる科学として、農学の発展に尽力してきました。

国連によれば、人口は20世紀初頭に16.5億だったのが、2022年11月にその数が80億を超えたとされています。この人口成長には、食料の大増産と栄養面の改善が大きく貢献しています。食料供給の拡大は、社会の安定と平和、産業の振興と経済の成長の必要条件となっています。

近代農学は、20世紀において地球規模でみた無尽蔵な生物資源、天然資源を前提にする増産パラダイム型研究を発展させて、それが驚異的な食料増産を可能にしました。しかしその結果、窒素やリンの世界的な利用を促して過剰に環境中へ蓄積させることになり、温室効果ガスも増やすことになりました。生物資源とは他の生物の生命です。その利用や開発を通じて、都合の

よい植物や動物だけを増やすことになり、生物多様性を脅かしてきたことも明らかになっています。人類が生き延びるための活動とは言え、このように農学は過去に傲慢な一面を有していました。

ところで食料問題は解決した訳でなく、今も人口と食料需要は増え続け、いまだに世界には多くの栄養不良の人々が存在していて楽観できる状況にはありません。しかも20世紀における産業活動の膨張と市民生活の都市化の拡大によって、地球環境の変容が進んでいることから、これら食料問題解決のためにさらなる生物資源の減少、気候変動、生態系悪化につながるような単純な食料増産策は採用できなくなっています。農学における各分野では、このことを認識し持続可能な生産を研究するためのパラダイムシフトに着手しています。

持続可能な生産にとどまらず、せっかく生産された食料をいかに大事に利用するかも問われています。それに答えるため、効果的に栄養摂取を可能とし、食品ロスを削減し、そしておいしさを高めて食事を大いに楽しむことを目指す研究がおこなわれています。最新の農学は食の世界をさらに豊かにしていきます。

人類は生物資源の利活用のために、森林や海洋へ進出し自然界を改変して、農地や牧草地の開拓や漁撈の拡大、養殖場の開発を進めてきました。過度な開発は、もとある自然界に悪影響を与えて感染症の拡大等を引き起こすことになり、その対策が求められています。一方で都市と自然界との境界に存在する農地や森林は、自然の脅威から人々を守る防波堤になっています。そのようなことから、人類はいったん手を加えて創り上げた二次自然としての農地や森林などを適切に管理し続ける責任があります。

生物資源は衣生活や住生活などに係わる食料以外の資材にも利用されてきましたが、20世紀にはそれらの資材の原料は石油を中心とした鉱物資源へとシフトしていきました。その結果、生活の利便性も生産性も大いに向上し、さらには都市社会を発展させる原動力になって、働き方や生活様式のあり方そのものを変革することになりました。それは不可逆的な変化だと思われてきました。しかしここにきてそこには持続可能性の面で深刻な課題のあることが認識され始めていて、その解決のためにバイオマスシフト、生物資源をもとにした社会を新たに構築することが期待されています。

農学では、生物資源のポテンシャルを最大限活用した生産・利用技術の開発に取り組んでいます。この技術開発を通じて、産業と生活のモードチェンジを促し、新しい産業を創出するとともに、農村や田園を通じて自然の恵みを享受する豊かな社会づくりに貢献することも目指しています。これらの教育研究活動は、最先端の生命科学、情報科学に裏打ちされた観測技術、計測技術、解析技術を利用し日々進化しています。

農学生命科学研究科・農学部は、自然科学から社会科学まで、直接、間接あらゆる立場から生物に係わる様々な分野の専門家が集って、植物、動物、微生物そしてヒトに至るまで、生き物を徹底的に調べ上げ、それらの相互のネットワーク関係を解明し、人類社会の発展に役立つための基礎研究と応用研究を推進する教育研究拠点が形成されています。実験室とフィールドとが連携した研究が行われることも農学の特徴です。演習林や生態調和農学機構、牧場、水産実験所、動物医療センターなど附属施設が最大限に活用されています。

地球上の生物の共生と持続可能な世界の再構築は人類共通の目標です。われわれ農学生命科学研究科・農学部はその課題に取り組み、すべての人々の幸福を実現するため、社会システムの変革を目指していきます。人類にとって最重要課題である食料と環境をめぐる難問を解決して、次世代に明るい未来を手渡していくこと。それが私たちの使命です。

農学生命科学研究科長・農学部長
中嶋 康博

年 次		摘 要
1874. 4	明治 7. 4	現在の新宿御苑内に内務省農事修学場創設
1877.10	10.10	農事修学場を農学校と改称
1877.12	10.12	現在の北区西ヶ原に内務省樹木試験場創設
1878. 1	11. 1	農学校、現在の駒場に移転
1880.11	13.11	1月24日農学校開校式、農場開設
1881. 4	14. 4	家畜病院開設
1882. 1	15. 1	農学校、樹木試験場を農商務省へ移管
1882. 5	15. 5	下総種畜場内の変則獣医生徒が農学校に所属
1882.12	15.12	農学校を駒場農学校と改称
1886. 7	19. 7	樹木試験場を東京山林学校と改称
1890. 6	23. 6	駒場農学校と東京山林学校を合併し、東京農林学校となる
1893.11	26.11	東京農林学校を帝国大学に合併し、分科大学として農科大学設置（農学科、林学科及び獣医学科を置き、実施農業に従事する者を養成するためそれぞれの学科に乙科を設ける）
1894.11	27.11	農場設置
1897. 6	30. 6	農芸化学科設置
1898. 5	31. 5	千葉演習林設置
1898. 9	31. 9	勅令第208号により帝国大学を東京帝国大学と改称
1899. 4	32. 4	乙科を廃し、実科を設置
1899.10	32.10	演習林本部設置
1902. 4	35. 4	農業教員養成所開設
1902. 9	35. 9	北海道演習林設置
1909. 3	42. 3	農業教員養成所が農科大学の附属となる
1910. 4	43. 4	台湾演習林、代々木演習林及び府中演習林設置
1912.12	大正 元.12	植物実験圃場設置
1914. 6	3. 6	水産学科設置
1916.12	5.12	朝鮮演習林設置
1919. 2	8. 2	樺太演習林設置
1922. 9	11. 9	秩父演習林設置
1925. 3	14. 3	勅令第13号により東京帝国大学農学部となる
1925. 5	14. 5	愛知演習林設置
1925.11	14.11	農業経済学科及び農学科農業土木学専修設置
1926. 3	15. 3	箱根演習林設置
1929.10	昭和 4.10	富士演習林設置
1935. 4	10. 4	二宮果樹園設置
1935. 5	10. 5	林学科田無苗圃設置
1935. 7	10. 7	農学科農業土木学専修を廃し、農業土木学科を設置
1935. 8	10. 8	実科が独立し、東京高等農林学校となる
1936. 7	11. 7	箱根演習林廃止
1937. 4	12. 4	農学部、本郷区向ヶ丘弥生町に移転
1940. 8	15. 8	農場、北多摩郡田無町に移転
1941. 3	16. 3	水産実験所設置（愛知県知多市新舞子）
1943. 1	18. 1	農業教育養成所が独立し、東京農業教育専門学校となる
1943. 4	18. 4	熱帯林業研究所設置
1943. 9	18. 9	林学科に林業学専修と林産学専修を設ける
1944. 3	19. 3	樹芸研究所設置
1945.10	20.10	植物実験圃場を林学科樹木実験圃場と改称
1946. 4	21. 4	二宮果樹園を二宮農場と改称
1947.10	22.10	農学科畜産学専修設置
		台湾、樺太及び朝鮮演習林、熱帯林業研究所を終戦により廃止
		農学科畜産学専修及び獣医学科を廃し、畜産学科（甲類、乙類）設置
		東京帝国大学を東京大学と改称

年 次		摘 要
1948. 4	昭和23. 4	農業土木学科を農業工学科と改称
1949. 4	24. 4	牧場設置
1950. 1	25. 1	獣医学科再設置
1951.10	26.10	農学部規則制定
1953. 3	28. 3	東京大学大学院に人文科学・社会科学・数物系・化学系・生物系の5研究科設置
1953. 7	28. 7	牧場および家畜病院官制化
1954. 9	29. 9	園芸実験所開設
1955. 6	30. 6	放射性同位元素施設開設
1956. 1	31. 1	二宮農場を二宮果樹園と改称
1956. 4	31. 4	林学科林業学専修を林学科とし、林学科林産学専修を林産学科としてそれぞれ設置
1957. 4	32. 4	バイオトロン設置
1963. 4	38. 4	田無苗圃を田無試験地と改称
1964. 4	39. 4	農学科を農業生物学科と改称
		畜産学科と獣医学科を統合し畜産獣医学科と改称
		農業工学科に農業土木学専修と農業機械学専修を設ける
1965. 4	40. 4	東京大学大学院数物系・化学系・生物系の3研究科を医学系・工学系・理学系・農学系・薬学系の5研究科に改組（東京大学大学院農学系研究科設置）
		園芸実験所、放射線育種共同利用施設設置
1965. 5	40. 5	大学院農学系研究科規則制定
		農学部図書館開館
1970. 3	45. 3	水産実験所が静岡県浜名郡舞阪町に移転
1975. 4	50. 4	園芸実験所を緑地植物実験所と改称
1976. 5	51. 5	生物環境制御システムセンター設置
1977. 4	52. 4	農業生物学科に農業生物学専修と緑地学専修を設ける
1977.10	52.10	農学部図書館は外国雑誌センター館（農学系）に指定
1981. 4	56. 4	大学院農学系研究科畜産学専門課程と獣医学専門課程を統合し畜産獣医学専門課程を設置（修士課程）
1982. 4	57. 4	放射性同位元素施設設置
1983. 4	58. 4	畜産獣医学専門課程（博士課程）を設置
1984. 4	59. 4	獣医学学部教育6年制実施
		生物生産工学研究施設設置
1987. 4	62. 4	大学院農学系研究科専門課程制から専攻制へ
		大学院農学系研究科に応用生命工学専攻（独立専攻）を設置
1987. 5	62. 5	生物環境制御システムセンター廃止
1988. 4	63. 4	畜産獣医学科を獣医学科と改称
1988. 8	63. 8	600MHz超伝導フーリエ変換核磁気共鳴装置（NMR）設置
1990. 4	平成 2. 4	大学院農学系研究科畜産獣医学専攻を獣医学専攻と改称し、4年制博士課程となる
		農業工学科の2専修（農業土木学専修・農業機械学専修）制度を廃止し、農業工学科となる
1990.10	2.10	林産学科に材料科学・住工学専修と森林バイオマス化学専修を設ける
1991. 4	3. 4	大学院農学系研究科に応用動物科学専攻（独立専攻）を設置
1993. 4	5. 4	生物生産工学研究施設を廃し、生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1994. 4	6. 4	大学院農学系研究科を大学院農学生命科学研究科に改称
		学科を廃止し、課程制へ移行（5課程制）
		応用生命化学（農芸化学が改称）、応用生命工学、応用動物科学、獣医学の4専攻の整備
1995. 4	7. 4	生産・環境生物学（農業生物学が改称）、森林科学（林学が改称）、水圏生物科学（水産学が改称）の3専攻の整備
		アジア生物資源環境研究センター（学内共同教育研究施設）設置（10年時限）
1996. 4	8. 4	農業・資源経済学（農業経済学が改称）、生物・環境工学（農業工学が改称）、生物材料科学（林産学が改称）の3専攻の整備
1997. 4	9. 4	大学院農学生命科学研究科に農学国際専攻（独立専攻）設置
1998. 6	10. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（設置期間5年間）
1999. 4	11. 4	農場、演習林、牧場、農学部の事務が合同し、農学系事務部が発足
2000. 3	12. 3	東京大学弥生講堂竣工
		創立125周年記念式典を挙行
		公用車車庫を農学資料館に改修

年 次		摘 要
2000. 4	平成12. 4	生圏システム学専攻設置 附属施設を学部附属から研究科附属に移行 学系事務室を4総務事務室（8掛）に再編
2001. 1	13. 1	農学部図書館を農学生命科学図書館と改称
2002.10	14.10	寄付研究ユニット「荏原バイオマスリファイナリー（荏原製作所）」設置（設置期間5年間）
2003. 4	15. 4	生物生産工学研究センター（学内共同教育研究施設）設置（時限による転換）
2003. 6	15. 6	寄付講座「食シグナル・生体統御系間相互作用（明治乳業）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2003. 7	15. 7	21世紀COEプログラムに「生物多様性・生態系再生研究拠点」が採択される
2003.10	15.10	生命科学総合研究棟竣工
2003.12	15.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（設置期間5年間）
2004. 4	16. 4	国立大学法人法の規定により「国立大学法人 東京大学」となる 森林科学専攻樹木実験圃場を農学生命科学研究科附属施設の1つに加え、小石川樹木園と改称
2004. 7	16. 7	文部科学省科学技術振興調整費により、アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットを設置（設置期間5年間） 国際学術課を教務課に改称し、総務課総務事務室と併せて教務課（4係）に再編
2005. 4	17. 4	放射線育種共同利用施設を放射線育種場共同利用施設と改称 アジア生物資源環境研究センター（学内共同教育研究施設）設置（時限による転換）
2005.12	17.12	魅力ある大学院教育イニシアティブプログラム 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構を設置
2006. 4	18. 4	寄付講座「植物医科学（池田理化）」設置（設置期間5年間） 技術基盤センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた 農学部教育課程5課程22専修を3課程15専修へ移行 連携講座「エコロジカル・セイフティー学（独立行政法人農業環境技術研究所）」設置（設置期間5年間）
2006.11	18.11	食の安全研究センターを農学生命科学研究科附属施設の1つに加えた
2007. 1	19. 1	家畜病院を動物医療センターと改称 寄付講座「共生社会基盤形成を通じた国土の保全管理（前田建設工業・熊谷組）」設置（設置期間3年間）
2007. 4	19. 4	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（設置期間5年間） 事務組織を係制からチーム制に移行（附属施設を除く）
2008. 3	20. 3	二宮果樹園閉園
2008. 8	20. 8	弥生講堂アネックス竣工
2008.12	20.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2009. 4	21. 4	アグリバイオインフォマティクス人材養成ユニットをアグリバイオインフォマティクス教育研究ユニットに改称し、文部科学省特別経費により事業を継続
2009. 7	21. 7	農学生命科学図書館リニューアルオープン
2010. 4	22. 4	生態調和農学機構設置（農場と緑地植物実験所を改組し、演習林田無試験地の教育研究機能を組み入れた） バイオトロンおよび小石川樹木園を技術基盤センターに統合
2010.10	22.10	国際農業開発学コース（IPADS）を設置
2010.12	22.12	フードサイエンス棟竣工
2011. 4	23. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD）」設置（設置期間3年間） 寄付講座「植物医科学（池田理化）」の設置期間を5年間から7年間に期間変更 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間5年）
2011. 6	23. 6	演習林の研究部を企画部と教育研究センターに改組 田無試験地を田無演習林に改称 愛知演習林を生態水文学研究所に改称 富士演習林を富士癒しの森研究所に改称
2012. 2	24. 2	生命科学総合研究棟B竣工
2012. 3	24. 3	緑地植物実験所閉所 研究科ロゴマーク制定（商標登録2016.4.）
2012. 4	24. 4	農学部教育課程3課程15専修を3課程14専修へ移行 寄付講座「植物医科学（イオン1%）」の設置期間を7年間から8年間に期間変更

年 次		摘 要
2012. 4	平成24. 4	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（時限による転換、設置期間5年間） 総務課研究支援チーム国際交流担当を教務課留学生チームに移し、教務課国際学務支援チームに再編
2012.10	24.10	寄付講座「微生物潜在機能探索（公益財団法人発酵研究所）」設置（設置期間5年間）
2013. 4	25. 4	技術部を設置
2013.12	25.12	寄付講座「機能性食品ゲノミクス（ILSI JAPAN）」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2014. 4	26. 4	寄付講座「木質構造学（JKHD）」設置（時限による転換、設置期間2年間） 寄付講座「植物医科学（ニッポンジーン）」設置（時限による転換、設置期間5年間） アグリバイオインフォマティクス教育研究ユニット、研究科運営費にて事業を継続
2015. 3	27. 3	弥生キャンパス内に「上野英三郎博士とハチ公の像」建立
2015. 4	27. 4	アグリバイオインフォマティクス教育研究ユニット、学部教育改革推進補助金にて事業を継続
2015. 5	27. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学（フォーデイズ）」設置（設置期間5年間）
2016. 4	28. 4	社会連携講座「栄養・生命科学（サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社）」設置（設置期間5年間） 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間5年） アグリバイオインフォマティクス教育研究ユニット、研究科運営費で事業を継続
2016. 8	28. 8	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」設置（設置期間3年間）
2016.10	28.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（設置期間5年間）
2016.11	28.11	社会連携講座「育種ゲノミクス」設置（設置期間5年間）
2017. 2	29. 2	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」設置（設置期間5年間）
2017. 3	29. 3	朱舜水記念碑を弥生講堂アネックス前から言問通り陸橋脇に移設
2017. 4	29. 4	放射性同位元素施設をアイソトープ農学教育研究施設に改称 寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」設置（時限による転換、設置期間5年間） 総務課研究支援チームに研究者国際交流担当を配置
2017. 6	29. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（設置期間3年）
2017.10	29.10	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」設置（設置期間5年） 連携研究機構「ワンヘルス連携研究機構」設置（設置期間10年）
2018. 2	30. 2	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」設置（設置期間3年4ヶ月間）
2018. 4	30. 4	寄付講座「バイオマス・ショア（光友ファシリティーズ）」を寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」に名称変更 連携研究機構「地域未来社会連携研究機構」設置（設置期間10年間）
2018. 9	30. 9	One Earth Guardians育成機構を設置
2018.12	30.12	連携研究機構「微生物科学イノベーション連携研究機構」の設置期間を3年4ヶ月間から10年間に期間変更
2019. 3	31. 3	寄付講座「バイオマスショア（三菱ガス化学）」の設置期間を3年間から3年8ヶ月間に期間変更
2019. 4	31. 4	連携研究機構「生命倫理連携研究機構」設置（設置期間10年間） 寄付講座「食品機能学」設置（設置期間5年間） 寄付講座「動物疾患データ解析」設置（設置期間3年間） 寄付講座「植物医科学」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2019. 9	令和元. 9	寄付講座「持続可能な自然再生科学研究」の設置（設置期間5年間）
2020. 1	2. 1	寄付講座「養生訓を科学する医食農連携（共生バンク）」を寄付講座「養生訓を科学する医食農連携寄付講座（メディカルピアール）」に名称変更、設置期間を5年間から5年2ヶ月間に期間変更
2020. 2	2. 2	連携研究機構「知能社会創造研究センター」設置（設置期間10年）
2020. 3	2. 3	寄付講座「食の健康科学（ニッポン）」設置（設置期間3年間） 寄付講座「バイオマス・ショア（三菱ガス化学）」を寄付講座「バイオマス・ショア」に名称変更、設置期間を3年8ヶ月間から4年8ヶ月間に期間変更
2020. 4	2. 4	連携研究機構「海洋アライアンス連携研究機構」設置（設置期間10年） 連携研究機構「高齢社会総合研究機構」設置（設置期間10年）
2020. 5	2. 5	寄付講座「食と生体機能モデル学」設置（時限による転換、設置期間5年間）
2020. 6	2. 6	社会連携講座「健康栄養機能学」設置（時限による転換、設置期間3年間）
2020.12	2.12	連携研究機構「スポーツ先端科学連携研究機構」設置（設置期間9年4ヶ月）
2021. 2	3. 2	連携研究機構「放射線科学連携研究機構」設置（設置期間6年2ヶ月）

年 次		摘 要
2021. 2	令和 3. 2	連携研究機構「災害・復興知連携研究機構」設置（設置期間10年）
2021. 4	3. 4	連携研究機構「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」設置（設置期間10年） 連携研究機構「デジタル空間社会連携研究機構」途中参加（設置期間10年/2020～） 社会連携講座「微生物エコテクノロジー」の設置（設置期間3年間） 社会連携講座「地球規模感染症制御学」の設置（設置期間5年間） 社会連携講座「栄養・生命科学」の設置（時限による転換、設置期間5年間） アジア生物資源環境研究センターが改組し、農学生命科学研究科附属施設となる 生物生産工学研究センターが改組し、アグロバイオテクノロジー研究センターに改称され、農学生命科学研究科附属施設となる
2021. 4	3. 4	演習林の教育研究センターを教育・社会連携センターとフィールドデータ研究センターに改組 寄付講座「微生物膜輸送工学」設置（改組による再編、設置期間5年5ヶ月間／2019～） 寄付講座「微生物代謝工学」設置（改組による再編、設置期間4年間／2020～） 寄付講座「木材利用システム学」設置（改組による再編、設置期間3年6ヶ月／2019～） 連携講座「エコロジカル・セイフティー学」設置（時限による転換、設置期間5年間） 農学系事務部を農学部・農学生命科学研究科事務部に改称 マルチメディア室を情報システム室に改称
2021.10	3.10	寄付講座「醸造微生物学（キッコーマン）」設置（時限による転換、設置期間4年6ヶ月間）
2021.11	3.11	寄付講座「OSG国際防疫獣医学」設置（設置期間5年間） 寄付講座「フィールドフェノミクス」設置（設置期間3年5ヶ月間）
2021.12	3.12	寄付講座「味覚サイエンス（日清食品）」の設置期間を5年間から6年間に期間変更
2022. 3	4. 3	寄付講座「微生物潜在酵素（天野エンザイム）」の設置期間を5年間から5年6ヶ月間に期間変更
2022. 4	4. 4	寄付講座「食と動物のシステム科学」設置（設置期間3年間）
2022.10	4.10	社会連携講座「免疫生体機能研究」の設置（設置期間3年間）
2023. 3	5. 3	寄付講座「食の健康科学（ニッポン）」の設置（時限による転換、設置期間3年間）
2023. 4	5. 4	寄付講座「木材利用システム学」設置（時限による転換、設置期間3年間） 寄付講座「食と動物のシステム科学」の設置期間を3年間から4年間に期間変更 社会連携講座「シグナルペプチドーム研究」設置（設置期間3年間）
2023.10	5.10	社会連携リエゾンオフィス設置
2024. 2	6. 2	寄付講座「フィールドフェノミクス」の設置期間を3年5ヶ月から5年5ヶ月に変更
2024. 3	6. 3	放射線育種場共同利用施設閉所
2024. 4	6. 4	演習林の教育・社会連携センター、フィールドデータ研究センターを廃し、フォレストGX／DX協創センターを新設 寄付講座「包摂型グローバル未来社会」設置（設置期間5年間） 寄付講座「植物医科学」設置（時限による転換、設置期間3年間） 寄付講座「食品機能学（東洋食品研究所）」設置（時限による転換、設置期間5年間） 社会連携講座「バイオマスバリューチェーン実証」設置（設置期間3年間） 社会連携講座「微生物エコテクノロジー」設置（時限による転換、設置期間5年間）

歴代研究科長・学部長一覧

氏 名	任 期
松 井 直 吉 (農科大学長)	1890 (明治23) 6. ~1911 (明治44) 2.
古 在 由 直 (農科大学長)	1911 (// 44) 2. ~1919 (大正 8) 4.
古 在 由 直	1919 (大正 8) 4. ~1920 (// 9) 9.28
川 瀬 善太郎	1920 (// 9) 9.28~1924 (// 13) 10.16
町 田 咲 吉	1924 (// 13) 10.16~1927 (昭和 2) 10.15
鈴 木 梅太郎	1927 (昭和 2) 10.15~1928 (// 3) 10.18
岩 住 良 治	1928 (// 3) 10.19~1931 (// 6) 1. 6
麻 生 慶次郎	1931 (// 6) 1. 6~1933 (// 8) 1. 5
諸 戸 北 郎	1933 (// 8) 1. 6~1934 (// 9) 3.30
高 橋 偵 造	1934 (// 9) 3.31~1936 (// 11) 3.30
佐 藤 寛 次	1936 (// 11) 3.31~1939 (// 14) 3.30
藺 部 一 郎	1939 (// 14) 3.31~1941 (// 16) 3.30
鈴 木 文 助	1941 (// 16) 3.31~1941 (// 16) 11. 7
三 浦 伊八郎	1941 (// 16) 11. 8~1944 (// 19) 11. 7
田 中 丑 雄	1944 (// 19) 11. 8~1948 (// 23) 11. 7
浅 見 興 七	1948 (// 23) 11. 8~1950 (// 25) 11. 7
吉 田 正 男	1950 (// 25) 11. 8~1952 (// 27) 11. 7
坂 口 謹一郎	1952 (// 27) 11. 8~1954 (// 29) 11. 7
磯 邊 秀 俊	1954 (// 29) 11. 8~1957 (// 32) 11. 7
住 木 諭 介	1957 (// 32) 11. 8~1960 (// 35) 11. 7
越 智 勇 一	1960 (// 35) 11. 8~1962 (// 37) 11. 7
神 谷 慶 治	1962 (// 37) 11. 8~1965 (// 40) 11. 7
大 島 泰 雄	1965 (// 40) 11. 8~1967 (// 42) 11. 7
畑 村 又 好	1967 (// 42) 11. 8~1968 (// 43) 11. 4
古 島 敏 雄	1968 (// 43) 11. 5~1969 (// 44) 4. 6
篠 原 泰 三	1969 (// 44) 4. 7~1970 (// 45) 2.19
川 田 信一郎	1970 (// 45) 2.20~1971 (// 46) 3.23
山 田 浩 一	1971 (// 46) 3.24~1971 (// 46) 10.10
松 井 正 直	1971 (// 46) 10.11~1977 (// 52) 10.10
逸 見 謙 三	1977 (// 52) 10.11~1981 (// 56) 3.31
望 月 公 子	1981 (// 56) 4. 1~1984 (// 59) 3.31
鴻 巣 章 二	1984 (// 59) 4. 1~1986 (// 61) 3.31
高 橋 信 孝	1986 (// 61) 4. 1~1989 (平成元) 3.31
和 田 照 男	1989 (平成元) 4. 1~1992 (// 4) 3.31
鈴 木 昭 憲	1992 (// 4) 4. 1~1994 (// 6) 9.30
佐々木 恵 彦	1994 (// 6) 10. 1~1996 (// 8) 3.31
小 林 正 彦	1996 (// 8) 4. 1~1999 (// 11) 3.31
林 良 博	1999 (// 11) 4. 1~2003 (// 15) 3.31
會 田 勝 美	2003 (// 15) 4. 1~2007 (// 19) 3.31
生源寺 眞 一	2007 (// 19) 4. 1~2011 (// 23) 3.31
長 澤 寛 道	2011 (// 23) 4. 1~2013 (// 25) 3.31
古 谷 研	2013 (// 25) 4. 1~2015 (// 27) 3.31
丹 下 健	2015 (// 27) 4. 1~2019 (// 31) 3.31
堤 伸 浩	2019 (// 31) 4. 1~2023 (令和 5) 3.31
中 嶋 康 博	2023 (令和 5) 4. 1~

(1)大学院農学生命科学研究科・農学部

農学部

課 程	専 修
応用生命科学	生命化学・工学 応用生物学 森林生物科学 水圏生物科学 動物生命システム科学 生物素材化学
環境資源科学	緑地環境学 森林環境資源科学 木質構造科学 生物・環境工学 農業・資源経済学 フィールド科学 国際開発農学
獣医学	獣医学

農学生命科学研究科

専 攻	基幹講座／寄付講座／連携講座／協力講座
生産・環境生物学	基幹講座 資源創成生物学、応用生物学領域、基礎生物学領域 寄付講座 植物医科学、フィールドフェノミクス 協力講座 アジア生物資源学、生産生態学
応用生命化学	基幹講座 生物機能化学、生物生産化学、食品科学 寄付講座 食品機能学（東洋食品研究所）、食の健康科学 社会連携講座 栄養・生命科学 協力講座 食品安全化学、放射線農学
応用生命工学	基幹講座 生物分子工学、生物機能工学 寄付講座 醸造微生物学、微生物代謝工学、微生物膜輸送工学 社会連携講座 微生物工コテクノロジー、酵母発酵学 協力講座 生物生産工学、生命情報解析
森林科学	基幹講座 森林生命環境科学、森林資源環境科学 協力講座 アジア生物環境学、森林生態圏管理学
水圏生物科学	基幹講座 水圏生物工学、水圏生命科学、水圏生産環境科学 社会連携講座 シグナルペプチドーム研究 協力講座 海洋生物科学
農業・資源経済学	基幹講座 国際食料システム学、農業構造・経営学、開発政策・経済学 協力講座 生態調和経済学
生物・環境工学	基幹講座 生物環境情報工学、地域環境工学、生物システム工学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生態調和工学
生物材料科学	基幹講座 生物素材科学、材料・住科学、バイオマス化学 社会連携講座 微生物工コテクノロジー、バイオマスバリューチェーン実証
農学国際	基幹講座 国際動物生産学、国際植物生産学、地球生物環境学、国際開発環境学 寄付講座 包摂型グローバル未来社会 社会連携講座 地球規模感染症制御学 協力講座 国際生態系管理
生圏システム学	基幹講座 生物保全学、生圏管理学 連携講座 エコロジカル・セイフティー学 協力講座 生圏相関科学
応用動物科学	基幹講座 高次生体制御学、動物機能科学 連携講座 脳科学 協力講座 実験資源動物科学
獣医学	基幹講座 比較動物医科学、病態動物医科学、臨床獣医学 寄付講座 食と生体機能モデル学、持続可能な自然再生科学研究、OSG 国際防疫獣医学、食と動物のシステム科学 協力講座 疾患モデル学、食品病原微生物学、ウイルス感染症・感染制御学、高度医療科学、応用定量生命科学

領域横断型教育プログラム	アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム、 産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構、One Earth Guardians 育成機構
--------------	--

附属施設

生態調和農学機構 演習林 牧場 動物医療センター 水産実験所 アジア生物資源環境研究センター アグロバイオテクノロジー研究センター アイソトープ農学教育研究施設 農学生命科学図書館 技術基盤センター 食の安全研究センター
--

農学部・農学生命科学研究科事務部

総務課	総務チーム（総務・広報情報担当 勤務時間・旅費担当） 人事チーム（人事・給与担当） 研究支援チーム（附属施設・研究協力担当 研究者国際交流担当 環境安全担当） 附属生態調和農学機構事務局 附属演習林千葉演習林事務局 附属演習林北海道演習林総務チーム 附属演習林北海道演習林経理チーム 附属演習林秩父演習林事務局 附属演習林生態水文学研究所事務局 附属牧場事務局 附属動物医療センター事務局 附属水産実験所事務局 図書チーム（情報管理担当 情報サービス担当 図書情報担当 雑誌情報担当）
経理課	予算・決算チーム（財務・資産管理担当） 施設整備チーム（施設保全管理担当） 経費執行チーム
教務課	学生支援チーム（学部学生担当 大学院学生担当 学生生活担当） 国際学務支援チーム（留学生担当） 専攻支援チーム

(2)寄付講座一覧

寄付講座とは、個人又は団体の寄附による基金をもって大学の教育研究活動を実施するため、学部及び研究科等の大学院組織に置かれる講座をいう。

寄付講座の名称	植物医科学／Clinical Plant Science
設置期間	2006年（平成18年）4月1日～2014年（平成26年）3月31日更新 2014年（平成26年）4月1日～2019年（平成31年）3月31日更新 2019年（平成31年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日更新 2024年（令和6年）4月1日～2027年（令和9年）3月31日3年間
寄付者	日産化学株式会社
担当教員及び職名	特任教授 難波 成任 特任教授 市川 和規 特任教授 渡邊 健 教授（兼務） 山次 康幸 特任助教 鯉沼 宏章
研究目的	地球上で生産可能な食糧の35%（23億人分）が毎年植物病により失われている。これに対して、「植物病理学」をはじめとする植物保護関連のさまざまな分野がこれまで対策を講じてきた。しかし、気候変動、世界経済のグローバル化、農業生産の大規模化、野菜工場など超集約的農業の展開、さらに園芸愛好家の急増（3,000万人以上）などにより病気の診断・治療・防除・予防の需要は増加の一途である。本講座第1～4期は、複合学術領域「植物医科学」の提唱と展開、学部教育実施と教科書発刊、植物病院の本学開設と連携植物病院の展開、植物医師認定事業開始と植物医師会設立、コミュニティ植物医師養成など基礎から社会実装に至る活動を推進した。第5期では、これらの活動を更に充実し、全国展開とネットワーク充実のほか、新規臨床技術開発や国際貢献などを計画している。
寄付講座の名称	食品機能学（東洋食品研究所）／Food Functionality Science (Toyo Institute of Food Technology)
設置期間	2019年（平成31年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日更新 2024年（令和6年）4月1日～2029年（令和11年）3月31日5年間
寄付者	公益財団法人東洋食品研究所
担当教員及び職名	准教授（兼務） 三坂 巧 特任准教授 亀井 飛鳥
研究目的	第1期は“次世代機能性食品”の科学的エビデンスの取得・発信を行った。今期は人々の“well-being”の基盤となる機能性食品の品質設計を目指すフードデザイン研究を実施する。心身の健康状態をもたらす「食品機能学研究」を実施する。具体的には、ストレスや疲労を軽減し、明日の活力を生み出す健康＝未病状態を維持する機能性食品研究を行う。SDGsに呼応し、未病＝健康状態（恒常性）に直結する国際的課題（例えば減塩）の開発研究、飢餓を解決する独創的未病食の基盤研究を行う。食の中枢感覚のデータサイエンスを行う。本講座は食の本質を極め、研究・教育・産業の面で新たな社会貢献を果たす
寄付講座の名称	食と生体機能モデル学／Food and Physiological Models
設置期間	2015年（平成27年）5月1日～2020年（令和2年）4月30日更新 2020年（令和2年）5月1日～2025年（令和7年）4月30日5年間
寄付者	フォーデイズ株式会社
担当教員及び職名	教授（兼務） 堀 正敏 特任准教授 伊藤 公一
研究目的	さまざまな食品添加物あるいは飼料添加物の機能的側面を明らかにするためには、その研究に最適化した動物モデルを用いることが必要である。本講座では、種々の食品、食品添加物あるいは飼料添加物の開発に必要な動物モデルの開発とそれら動物モデルを用いた機能解析を行い、食品あるいは飼料添加物開発の基礎研究を実施する。
寄付講座の名称	醸造微生物学（キッコーマン）／Brewing Microbiology
設置期間	2016年（平成28年）10月1日～2021年（令和3年）9月30日更新 2021年（令和3年）10月1日～2026年（令和8年）3月31日4年6ヶ月間
寄付者	キッコーマン株式会社
担当教員及び職名	特任教授 丸山 潤一 特任助教 片山 琢也
研究目的	日本の伝統である醸造技術・発酵技術に不可欠な「醸造微生物」に関する基礎研究を通じて、技術力の向上、研究成果の社会還元、研究者の育成に貢献することを目的とする。

寄付講座の名称	木材利用システム学／Wood Utilization System
設置期間	2016年（平成28年）10月1日～2019年（令和元年）9月30日更新 2019年（令和元年）10月1日～2023年（令和5年）3月31日更新 2023年（令和5年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日3年間
寄付者	農林中央金庫
担当教員及び職名	教授（兼務） 井上 雅文 特任教授 永田 信 特任講師 長坂 健司 特任助教 知念 良之
研究目的	木質資源の有効利用による地球環境貢献が認識され、地域木材の利用拡大への関心が高まっているとともに、自然科学と社会科学の融合による木材の加工・流通・利用に関する新たな研究領域の確立が期待されている。本寄付講座では、木質資源を有効かつ持続的に利用するためのシステム構築を目指して、木材の利用に関する地球環境、地域経済、社会影響評価、マーケティング、政策等の研究を行う。また、研究者およびステークホルダーネットワークの形成を目指すとともに、成果の社会還元にも努める。
寄付講座の名称	持続可能な自然再生科学研究／Environmental Science for Sustainable Development
設置期間	2019年（令和1年）9月1日～2024年（令和6年）8月31日更新 2024年（令和6年）9月1日～2027年（令和9年）8月31日3年間
寄付者	株式会社サントミネル
担当教員及び職名	教授（兼務） 堀 正敏 特任教授 杉浦 勝明 特任教授 桐澤 力雄
研究目的	第1期はSDGsの改善目標を実現するため、室内実験とフィールドワークを行った。水圏環境生物の特性を明らかにし、その理解の上で地球環境の保全を目指した。地上の植物・微生物についても生活環境におけるヒト・動物との関わりを明らかにし、微生物の環境分布制御を通じより良い生活環境の構築、特に環境における人獣共通感染症病原体の制御や樹病の防除を目指した。今期は、保有する技術を実装できるか否かをさらに検証することを目的とし、フィールドでの抗菌作用や脱炭素作用について検証する。具体的には、人工珊瑚など海洋の二酸化炭素吸収効果のある物質の特定などを行う。
寄付講座の名称	食の健康科学（ニッポン）／Food-related health science
設置期間	2020年（令和2年）3月1日～2023年（令和5年）2月28日更新 2023年（令和5年）3月1日～2026年（令和8年）2月28日3年間
寄付者	ニッポン株式会社
担当教員及び職名	特任准教授 小林 彰子
研究目的	少子高齢化に伴い増加する世界規模での社会問題を食の科学の面から解決することを目指す。健康寿命の延伸に繋がる食品および食品成分の新たなシーズを探索し、構造を明らかにすると共に、生体内での動きを正確に捉える。薬による治療ではない、食による疾病予防や健康維持、QOLの向上に繋がる新規素材を提案すると共に科学的エビデンスを構築する。
寄付講座の名称	OSG 国際防疫獣医学／OSG Veterinary Science for Global Disease Management
設置期間	2021年（令和3年）11月1日～2026年（令和8年）10月31日5年間
寄付者	株式会社OSGコーポレーション、創業者 湯川 剛
担当教員及び職名	教授（兼務） 芳賀 猛 教授（兼務） 猪熊 壽 特任助教 前澤 誠希
研究目的	アジアでは、畜産の急速な発展と集約化に伴い、動物感染症がまん延し、安全な畜産物の安定供給、畜産の持続可能性を脅かしている。本寄付講座では、アジア諸国との国際連携や国際貢献を視野に、動物の感染症防疫に関する学術研究の発展と獣医学教育の質の向上を通じた人材育成と畜産業の振興を目的とする。獣医学のあらゆる分野を通じて、学術・教育・産業に幅広く貢献する目的で進める。
寄付講座の名称	フィールドフェノミクス／Field Phenomics
設置期間	2021年（令和3年）11月1日～2027年（令和9年）3月31日5年5ヶ月間
寄付者	北海道更別村 Social Knowledge Bank 合同会社
担当教員及び職名	特任教授 平藤 雅之 教授（兼務） 岩田 洋佳 准教授（兼務） 郭 威 特任助教 BLOK PIETER MARINUS 特任助教 BURRIDGE JAMES DAVID
研究目的	農学研究及びスマート農業において、圃場における作物生育状態や生育環境等の詳細なデータの収集・解析・評価法が重要な基盤技術となる。JST CRESTプロ「農業ビッグデータ」（2015～2021）で、欧米と同様の先進的大規模農業が行われている北海道十勝（更別村）に研究拠点（東サテライトオフィス）を設置し、フィールドフェノミクス、IoT、AI、ビッグデータ等の先端研究を進めてきた。本寄付講座では、そこでの実績を踏まえるとともに、研究教育を行うキャンパスとして活用し、地元農業者、関連企業等との共同研究を進めやすいという現地での大きなメリットを活かしてフィールドフェノミクスや関連技術のさらなる発展を目指す。また、それらの応用の社会実装を加速するための基盤を現場に寄り添う形で構築する。そのために、地元の農業者、行政、学校との連携も強化する。
寄付講座の名称	食と動物のシステム科学／Food and Animal Systemics
設置期間	2022年（令和4年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日4年間

寄 付 者	株式会社リヴァンプ
担当教員及び職名	准教授（兼務） 村田 幸久 特任講師 小林 幸司
研 究 目 的	過去数十年で急増している人と動物の慢性的な疾患や体調不良を21世紀病と呼び、これにはアレルギーや腸炎、肥満、自閉症などが含まれる。これらの疾患の原因として環境や食を含む生活習慣の変化からくる腸内細菌の減少などが考えられているが、慢性かつ緩徐な病態を評価することは難しく不明な点が多い。本講座は、環境や習慣の何がこれらの疾患を増やしているのかを明らかにするとともに、これらの疾患に対する診断と治療方法の提案を行うことを目的に掲げ、腸内細菌や食の機能に注目した研究を推進する。さらに、これらの病態を明らかにする数理モデルや画像解析モデルのプラットフォーム構築と応用を目指す。
寄付講座の名称	包摂型グローバル未来社会寄付講座／Inclusive Glocal Future Society Program
設 置 期 間	2024年（令和6年）4月1日～2029年（令和11年）3月31日5年間
寄 付 者	株式会社クボタ
担当教員及び職名	特任教授 白波瀬 佐和子
研 究 目 的	本研究は、地球規模（グローバル）な持続的発展が、地域（ローカル）レベルでの発展なくして実現しないことに着目し、自然共生（バイオ）と生活基盤の食と水などの資源循環（ループ）が両立する「バイオループ」の創生を目指し、すべての人々が幸せを感じることができる包摂的な社会を実現するための指針を提供する。実際の人々の生活の場は制度・文化が多様であり、目指すべき未来の形も多様である。本講座では、国・地域の実態の違いや幸福度の向上に向けての諸問題を明らかにし、違いを考慮した多様な「望ましい未来」を提示する。さらに、決して一つでない「進むべき未来」に向けての多様な道筋を明らかにすることで、具体的な包摂的未來社会の構築のあり方を提示することを目的とする。

(3)社会連携講座一覧

社会連携講座とは、民間企業又は独立行政法人等から受け入れる共同研究の一環として、学部及び研究科等の教育研究を行う大学院組織等に置かれる講座をいう。

社会連携講座の名称	栄養・生命科学／Nutri・Lifescience
設 置 期 間	2016年（平成28年）4月1日～2021年（令和3年）3月31日更新 2024年（令和6年）9月1日～2027年（令和9年）8月31日3年間
連 携 機 関	サントリーグローバルイノベーションセンター株式会社
教育上の担当分野	応用生命化学専攻：食品生化学
担当教員及び職名	特任教授 佐藤 隆一郎 准教授（兼務） 山内 祥生 特任講師 佐々木 崇
研究及び教育目的	第1期はSDGsの改善目標を実現するため、室内実験とフィールドワークを行った。水圏環境生物の特性を明らかにし、その理解の上で地球環境の保全を目指した。地上の植物・微生物についても生活環境におけるヒト・動物との関わりを明らかにし、微生物の環境分布制御を通じてより良い生活環境の構築、特に環境における人獣共通感染症病原体の制御や樹病の防除を目指した。今期は、保有する技術を実装できるか否かをさらに検証することを目的とし、フィールドでの抗菌作用や脱炭素作用について検証する。具体的には、人工珊瑚など海洋の二酸化炭素吸収効果のある物質の特定などを行う。

社会連携講座の名称	微生物エコテクノロジー／Microbial Ecotechnology
設 置 期 間	2021年（令和3年）4月1日～2024年（令和6年）3月31日更新 2024年（令和6年）4月1日～2029年（令和11年）3月31日5年間
連 携 機 関	ダイキン工業株式会社
教育上の担当分野	応用生命工学専攻、生物材料科学専攻、アグロバイオテクノロジー研究センター
担当教員及び職名	教授（兼務） 大西 康夫 教授（兼務） 野尻 秀昭 教授（兼務） 五十嵐 圭日子 特任教授 原 啓文 講師（兼務） 砂川 直輝 特任講師 手塚 武揚 特任助教 鈴木 研志
研究及び教育目的	環境に負荷をかけない経済活動である「バイオエコノミー」を目指した環境先進技術および材料開発を実現することで、SDGsが目指す社会に貢献する。併せて、社会人教育、大学院教育などにおける当該分野の専門教育にあたる。

社会連携講座の名称	地球規模感染症制御学／Global Infectious Diseases Control Science
設 置 期 間	2021年（令和3年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日5年間
連 携 機 関	カルテック株式会社
教育上の担当分野	農学国際専攻
担当教員及び職名	特任教授 間 陽子 教授（兼務） 松本 安喜 特任准教授 松浦 遼介 特任助教 永田 文宏
研究及び教育目的	現在、新型コロナウイルスの世界的蔓延は「感染症パニック」という言葉に代表されるように、生命と社会・経済に大きな打撃を与え続けており、その対策は急務となっている。地球規模で深刻化する感染症を克服する方法を確立するために、幅広く共通に有効性を示す光触媒の効果を、農学を基盤とする水産業、農業、林業、畜産業等の現場で検証する。

社会連携講座の名称	免疫生体機能研究／Immunobiology and Biofunctional Research
設 置 期 間	2022年（令和4年）10月1日～2025年（令和7年）9月30日3年間
連 携 機 関	明治ホールディングス株式会社
関連する専攻名	
担当教員及び職名	教授（兼務） 八村 敏志 特任准教授 足立はるよ
研究及び教育目的	医・薬・食の融合領域において、免疫分野を中心に研究を推進し、産学の強みを活かし合う事で実用化まで見据えた世界最先端の研究知見を創出することで、感染症や老化の予防、免疫疾患の治療につなげ、「健康」の側面からサステナブルな社会の実現に貢献する。また、基礎研究から実用化研究まで幅広い領域に精通し、且つグローバルに活躍できる人材を育成する。

社会連携講座の名称	シグナルペプチドーム研究／Signal Peptidome Research
設 置 期 間	2023年（令和5年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日3年間
連 携 機 関	東亜合成株式会社
関連する専攻名	水圏生物科学専攻
担当教員及び職名	教授（兼務） 浅川 修一 特任助授 米澤 遼
研究及び教育目的	シグナルペプチドは、タンパク質分子にある短いペプチド配列で、細胞質内で生合成されたタンパク質の輸送および局在化を指示する機能を有する構造である。本講座において、シグナルペプチドには、タンパク質の輸送・局在化機能以外の未知の機能が存在しているという「シグナルペプチド仮説」を基に、細胞分化誘導機能、細胞増殖制御機能、核小体制御機能等の観点から、シグナルペプチドの未知の機能を解明することを目的とする。

社会連携講座の名称	バイオマスバリューチェーン実証社会連携講座／Department of Biomass Value Chain Demonstration
設 置 期 間	2024年（令和6年）4月1日～2027年（令和9年）3月31日3年間
連 携 機 関	株式会社ダイセル
関連する専攻名	生物材料科学専攻、附属演習林
担当教員及び職名	教授（兼務） 岩田 忠久 教授（兼務） 蔵治 光一郎 准教授（兼務） 安村 直樹
研究及び教育目的	森林から建築用資材やパルプのみならず、より高い経済効果を生む高付加価値な化成品を持続的に生産するためには、森林経営から木材成分の化学変換までを一気通貫で行う「バイオマスバリューチェーン」の構築が必要である。本研究では、本学演習林の一部を実証試験の場として用い、持続可能な森林経営と高付加価値化成品生産の実現を目的とする。また、当該分野の社会的要請に応えられ、国際的に研究開発をリードできる若手研究者の育成を目的とする。

(4)連携講座一覧

連携講座とは、高度な研究水準をもつ民間等の研究所や国立の研究機関の施設・設備と人的資源を活用するため、研究機関等との間で協定を結び、それらの研究員に教授等の委嘱を行い大学院教育に従事させ、また、学生にこれらの研究機関等での研究指導を受けさせることができる講座をいう。

連携講座の名称	エコロジカル・セイフティー学／Ecological Safety
設 置 期 間	2006年（平成18年）4月1日～2011年（平成23年）3月31日更新 2011年（平成23年）4月1日～2016年（平成28年）3月31日更新 2016年（平成28年）4月1日～2021年（令和3年）3月31日更新 2021年（令和3年）4月1日～2026年（令和8年）3月31日5年間
連 携 機 関	国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センター
教育上の担当分野	生物・環境工学専攻：大気環境学、土壌環境学、物質循環学、生態系計測学 生圏システム学専攻：農村緑地生態学
担当教員及び職名	教授 山口 紀子 教授 和穎 朗太 教授 山中 武彦 准教授 小野 圭介
連 携 目 的	東京大学大学院農学生命科学研究科における教育研究の実施に関し、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構 農業環境変動研究センターが協力して学生の資質向上とともに学術及び科学の発展に寄与することを目的とする。

(5)連携研究機構

連携研究機構とは、既存の組織の枠を超えた学の融合による新たな学問分野の創造を促進するために設置された、複数の部局等が一定期間連携して研究を行う組織をいう。

本研究科と関連する組織には「感染症連携研究機構」、「微生物科学イノベーション連携研究機構」、「地域未来社会連携研究機構」、「生命倫理連携研究機構」、「知能社会創造研究センター」、「海洋アライアンス連携研究機構」、「高齢社会総合研究機構」、「スポーツ先端科学連携研究機構」、「放射線科学連携研究機構」、「災害・復興知連携研究機構」、「統合ゲノム医科学情報連携研究機構」、「デジタル空間社会連携研究機構」、「エネルギー総合学連携研究機構」、「ワンヘルス・ワンワールド連携研究機構」、「次世代知能科学研究センター」、「構造生命科学連携研究機構」、「VR連携研究機構」、「気候と社会連携研究機構」、「未来戦略LCA連携研究機構」がある。

(1)土地

112,834㎡（弥生キャンパス、地震研究所、定量生命科学研究所、グラウンド等を含む）

(2)建物

（2024.4.1現在）

建物名	建築年度	面積（延㎡）	主な使用専攻等
1号館	1926(大正15)	9,747	生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生圏システム学専攻、演習林（企画部、フォレストGX/DX協創センター）
2号館	1935(昭和10)	9,382	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、水圏生物科学専攻、生物材料科学専攻、アイソトープ農学教育研究施設(RI)
2号館別館	1967(昭和42)	2,810	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、生圏システム学専攻、農学国際専攻、水圏生物科学専攻
3号館	1941(昭和16) 1998(平成10)	12,391	研究科長室、事務局、教授会室、会議室、水圏生物科学専攻、獣医学専攻、生産・環境生物学専攻、森林科学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、電子顕微鏡室、産学官民連携室、アイソトープ農学教育研究施設(RI)、アジア生物資源環境研究センター
5号館	1970(昭和45)	1,960	生物材料科学専攻
6号館	1977(昭和52)	1,344	応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、バイオトロン、生物・環境工学専攻
7号館A棟	1993(平成5) 1994(平成6)	8,512	応用動物科学専攻、獣医学専攻、水圏生物科学専攻、生物・環境工学専攻、生物材料科学専攻、農学国際専攻、森林科学専攻、農業・資源経済学専攻、生産・環境生物学専攻、バイオトロン、アジア生物資源環境研究センター、生圏システム学専攻
7号館B棟	1997(平成9)	3,524	
生命科学総合研究棟A	2003(平成15)	5,176 (4,366) 計9,542	生産・環境生物学専攻、農学国際専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、アイソトープ農学教育研究施設(RI)、バイオトロン、(定量生命科学研究所)
生命科学総合研究棟B	2011(平成23)	3,677 (3,278) 計6,955	生産・環境生物学専攻、応用生命化学専攻、応用生命工学専攻、獣医学専攻（定量生命科学研究所）
9号館	1985(昭和60)	2,799	アグロバイオテクノロジー研究センター、応用生命工学専攻
農学生命科学図書館	1964(昭和39) 1993(平成5)	4,161	閲覧室、書庫、事務室、会議室、ゼミナール室
動物医療センター	1990(平成2)	3,010	大動物診療施設、小動物診療施設、検査室施設、獣医学専攻、ゼミナール室、事務室
フードサイエンス棟	2010(平成22)	3,577	食の安全研究センター、産学連携等研究室
東別館	1953(昭和28)	446	応用生命化学専攻、NMR装置
環境調整工学実験室	1971(昭和46)	138	生物・環境工学専攻
農学資料館	1937(昭和12)	69	
危険物薬品庫	1966(昭和41) 1971(昭和46) 1976(昭和51) 1976(昭和51) 1978(昭和53) 2001(平成13)	91	(全6棟)
核磁気共鳴装置実験室	1988(昭和63)	120	
弥生講堂	1999(平成11)	998	一条ホール、会議室等
弥生講堂アネックス	2008(平成20)	480	セイホクギャラリー、研究棟講義室等
その他		778	物置、ポンプ室、蛋白質研究棟、I-REF棟一部使用、その他（3棟）
計		75,190	
圃場温室		338	ガラス温室等
計		338	
合 計		75,528	

(1)生態調和農学機構

設置目的:

生態調和農学機構は、農場と緑地植物実験所を統合し、演習林田無試験地（現田無演習林）の教育研究機能を組み入れて、2010年4月1日に誕生した。耕地・緑地・林地からなる田無キャンパスを拠点とし、持続的な生態系サービスと調和する農林業と社会のありかたを解明することをめざして、農学教育研究を進めている。

生態調和農学機構では、教育研究を3つの領域で行う。情報・社会領域では、農林業と社会の関係性を、食品安全、環境保全等の観点から究明する。農林生態系領域では、国土と景観の保全に役立つ生態系管理・評価法を追究する。生物・物質循環領域では、農林業と環境をめぐる生物と物質の挙動を究明する。

こうした教育研究を通して、農林業や農村が今後の持続的社會への移行に果たす役割を明らかにしていく。

所在地:

田無キャンパス（旧農場）：東京都西東京市緑町1-1-1

設置年月:

農学校内農場 1878年（明治11年）1月 多摩農場 1935年（昭和10年）8月
園芸実験所 1954年（昭和29年）4月 生態調和農学機構 2010年（平成22年）4月

土地：田無キャンパス（旧農場）184,714㎡

建物：田無キャンパス（旧農場）8,282㎡

(2)演習林

設置目的:

演習林は、森林に関する基礎的なならびに応用的試験研究を行うとともに、学生の実習に供することを目的とした研究教育施設である。

1890年東京農林学校が帝国大学と合併して、農科大学が新設され、1894年その附属施設として我が国初の演習林が房総半島の東南部清澄山林に設置された。これが現在の千葉演習林である。

1898年には官制としての演習林長が置かれ、演習林本部が設置された。その後我が国の森林帯あるいは森林の状況に応じて、北海道演習林以下の各地方演習林が順次設置された。

今日では、演習林は、演習林企画部、フォレストGX/DX協創センターと7つの地方演習林によって構成されている。

① 演習林企画部、フォレストGX/DX協創センター

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1898年（明治31年）9月
建物：農学部1号館内

② 千葉演習林

所在地：千葉県鴨川市天津770

土地：21,686,919㎡（借入3,790㎡）☆

設置年月：1894年（明治27年）11月
建物：3,327㎡

③ 北海道演習林

所在地：北海道富良野市山部東町9番61号

土地：227,055,665㎡（借入30,885㎡）☆

設置年月：1899年（明治32年）10月
建物：5,163㎡

④ 秩父演習林

所在地：埼玉県秩父市日野田町1-1-49

土地：58,117,472㎡（借入7,436㎡）☆

設置年月：1916年（大正5年）12月
建物：2,199㎡

⑤ 田無演習林

所在地：東京都西東京市緑町1-1-1

土地：88,605㎡

設置年月：1929年（昭和4年）10月
建物：500㎡

⑥ 生態水文学研究所

所在地：愛知県瀬戸市五位塚町11-44

土地：12,933,094㎡

設置年月：1922年（大正11年）9月
建物：1,935㎡

⑦ 富士癒しの森研究所

所在地：山梨県南都留郡山中湖村山中341-2

土地：78,645㎡（借入331,106㎡）☆

設置年月：1925年（大正14年）11月
建物：278㎡

⑧ 樹芸研究所

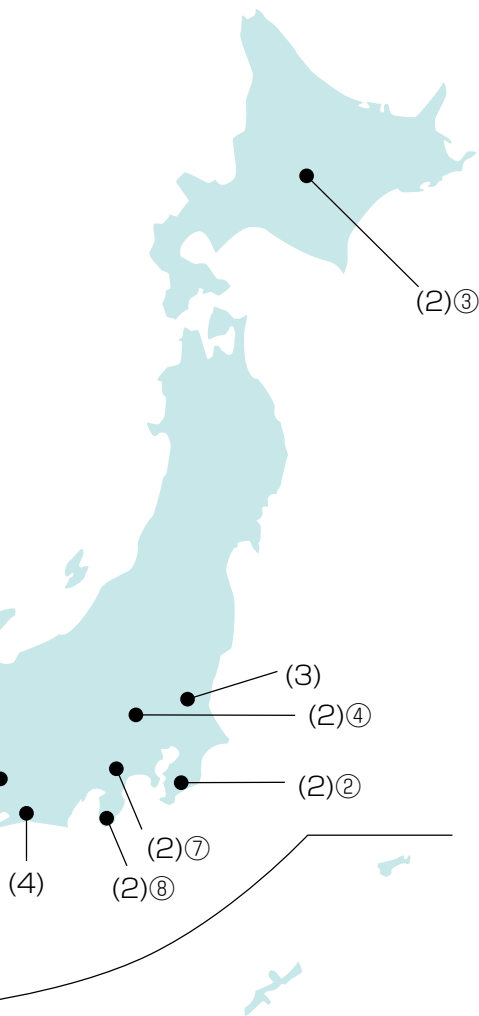
所在地：静岡県賀茂郡南伊豆町加納457

土地：2,470,219㎡（借入7㎡）☆

設置年月：1943年（昭和18年）1月
建物：1,871㎡

☆…（ ）内数字は外数である。





(3) 牧場（高等動物教育研究センター）

設置目的：

多くの大型産業動物を飼養・維持して、獣医学専修、動物生命システム科学専修、国際開発農学専修、応用動物科学専攻などの学部及び大学院生に対して実習研修教育にあたり、かつ畜産物の安心安全を保障する人材の育成教育などを通じて市民への食の安全研修にもあたる。加えて、専任教職員と大学院学生にて産業動物科学分野の研究を遂行し、かつ教員と学生による獣医科学、動物科学、医科学分野、全学向け体験活動などの教育と研究のための施設をも提供する。

所在地：茨城県笠間市安居3145

設置年月：1949年（昭和24年）4月

土地：364,882㎡

建物：7,794㎡

家畜飼育頭数：ウマ8 ウシ17 ヤギ48 ブタ54

(4) 水産実験所（水圏生物教育研究センター）

設置目的：

農学部学生・大学院学生（水圏生命科学専修・国際開発農学専修・生圏システム学専攻）に対する実習施設の提供、実験所専任教員による水産増養殖に関する研究の遂行、教員・大学院学生による水生生物の生理・生態・病理・生物化学・育種・養魚・魚病・水質環境等の研究のための施設の提供。

所在地：

静岡県浜松市西区舞阪町弁天島2971-4

設置年月：

1936年（昭和11年）7月 愛知県知多市新舞子（当時の知多郡旭村大字日長）に新舞子実験所開設

1937年（昭和12年）12月 愛知県渥美郡渥美町伊川津（当時の渥美郡泉村大字伊川津）に伊川津実験所開設

1970年（昭和45年）3月 現所在地に移転統合

土地：

19,795㎡（借入）

建物：2,683㎡

(5) 小石川樹木園

設置目的：

小石川樹木園は、森林植物学に関する教材を植栽、提供するために、1909年に文京区白山の本学大学院理学系研究科附属植物園の北側0.66haに、樹木実験圃場として設置された。2004年には本研究科附属施設となり、樹木に関する生理学、病理学および遺伝・育種学や、森林昆虫の生態学および生理学等の教育研究と実験材料の提供を行っている。

所在地：

東京都文京区白山3-7-1

設置年月：

1909年（明治42年）3月（当時は、植物実験圃場。2004年（平成16年）4月に小石川樹木園と改称）2010年（平成22年）4月に技術基盤センターの施設として統合

土地：

6,600㎡（永久借用）

建物：

65㎡

(6) 弥生地区

・動物医療センター

設置目的：市民に公開している動物診療施設であり、開業獣医師からの紹介症例を診察する二次診療施設として運営している。年間のべ約8,500頭の伴侶動物について、約90名のスタッフ（教職員、研修獣医師、大学院生など）が対応している。これらの診療活動を通じて、学部生に対する臨床獣医学の講義・実習や臨床獣医師の卒後研修を行なっている。さらに、各種疾病についての基礎研究ならびに臨床研究を実施しており、学内外との共同研究も活発に行われている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1880年（明治13年）11月

建物：3,091㎡

・アイソトープ農学教育研究施設

設置目的：放射性同位元素関係の教育研究を目的とし、学部内共同利用施設として設置された。年間の利用者数は、1,000人近くにのぼる全学で最も利用されているアイソトープ施設。
2017年4月1日より放射線生態学（radioecology）の基盤を支えるため「アイソトープ農学教育研究施設」へ改称し、福島を中心としたフィールドに根ざした教育研究を推進している。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1955年（昭和30年）6月

建物：生命科学総合研究棟内 997㎡

・技術基盤センター

設置目的：東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部教育・研究の高度化を専門性の高い技術の面から推進することを目的とする。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）4月1日

主な施設：

・バイオトロン

設置目的：農林生物の実験・研究は季節及び気象要因に左右されるところが大きく、実験の正確さや再現性に欠ける。その欠陥を補い、制御環境下で農林生物の実験を行うための学部内共同利用施設として1957年（昭和32年）に設置された。自然光ガラス温室、人工照明室、小動物飼育室（水棲動植物・昆虫を含む）からなり、温度・湿度・光などを人工的に調節して、四季の環境条件を再現し、また定温度下にて、植物・小動物・昆虫・菌類・水棲動植物の生育・生理・生態・病理・育種学及び分子生物学的実験研究を行うことを目的としている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1957年（昭和32年）4月

建物：農学部6号館・7号館内 約500㎡
生命科学総合研究棟内 75㎡

・小石川樹木園（※東京都文京区白山3-7-1に所在。詳細はP.15（5））

・食の安全研究センター

設置目的：生産段階から製品に至るまでのフードチェーン全体における食の安全の科学的研究と低リスク食品の開発を行う。食品が媒介する感染症や放射性物質汚染などのリスク評価、それらによる健康被害リスクを低減するための研究、食の安全に関する科学的情報の収集と整理、経済的影響の評価などを様々な専門領域の研究者によって実施する。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2006年（平成18年）11月1日

建物：フードサイエンス棟内3,577㎡

・アジア生物資源環境研究センター

設置目的：世界各地で起こっている人為による環境劣化や地球規模環境変動に対し、環境修復や生物生産の頑健性の強化、資源利用システムの協創構築などにより、生物資源利用の持続性を確保するための研究を、様々なステークホルダーとの協働により統合的に推進し、国際連携と現地実践による専門人材育成と地域社会への貢献を担うことを目的とする。1995年（平成7年）4月に全学センターとして設置されたアジア生物資源環境研究センターを改組して2021年（令和3年）4月に発足した。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）、東京都西東京市緑町1-1-1

設置年月：2021年（令和3年）4月1日

建物：農学部3号館・7号館B棟内、田無本館内

・アグロバイオテクノロジー研究センター

設置目的：作物生産、環境浄化、微生物利用等の微生物と植物が関わる重要な生命現象を対象に、先進的な基礎農学研究を推進することを目的とする。そのため、研究科内の分野横断的研究の推進や、所有する資産（共通機器）の維持発展と研究科内共同利用を推進する。3つの研究部門（環境保全工学、細胞機能工学、植物機能工学）、7つの連携部門（分子育種学、細胞遺伝学、応用微生物学、生物情報工学、森林化学、酵母発酵学、微生物エコテクノロジー）から構成される。1984年（昭和59年）4月設置の生物生産工学研究施設を廃止して1993年（平成5年）4月に全学センターとして設置された生物生産工学研究センターを改称・改組して2021年（令和3年）4月に発足した。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：2021年（令和3年）4月1日

建物：農学部9号館内 1,188㎡

・農学生命科学図書館

設置目的：農学生命科学研究科・農学部における教育及び研究活動を支援するため、図書・雑誌を収集・保存し、学生・教職員の利用に供する。1977年度からは農学系外国雑誌センター館に指定され、農学・生命科学分野の外国雑誌の収集と、全国の大学・研究機関ならびに研究者等に対する情報サービスを行っている。

所在地：東京都文京区弥生1-1-1（農学部構内）

設置年月：1965年（昭和40年）5月

2009年（平成21年）3月 耐震改修工事竣工

建物：建築面積1,151㎡ 建築延べ面積4,161㎡

主要設備：ECCS端末（16台）

閲覧席数：156席

蔵書冊数（含演習林）：468,108冊（和書273,525冊、洋書194,583冊）

図書年間増加冊数：10,412冊（和書4,187冊、洋書6,225冊）

雑誌所蔵タイトル数：13,408種（和雑誌8,019種、洋雑誌5,389種）

継続購入雑誌タイトル数：562種（和雑誌219種、洋雑誌343種）



図書館外観



図書館館内



図書館内ラウンジ



9号館外観

（写真提供：アグロバイオテクノロジー研究センター）



「問題土壌の環境修復と持続的利用」フィールドセミナー
（カンボジア）

（写真提供：アジア生物資源環境研究センター）

6

教 職 員

(1)教職員数

(2024.5.1現在)

区分	教 授	准教授	講 師	助 教	計	事務職員	技術職員	計
1研究科・学部	82	79	3	60	224	79		79
2生態調和農学機構	1	3		2	6	4	10	14
3演習林	3	4	6	8	21	19	62	81
4牧場		1			1	2	8	10
5動物医療センター	1				1	4		4
6水産実験所	1			2	3	1	3	4
7技術基盤センター					0		9	9
8アジア生物資源環境研究センター	4	3			7			
9アグロバイオテクノロジー研究センター	3	3		3	9			
合 計	95	93	9	75	272	109	92	201

(2)在職教員の出身校（学部卒）

(2024.5.1現在)

大学名		教 授	准教授	講 師	助 教	総 計
東京大学	農学部	66	54	3	38	161
	理学部	3	2	0	0	5
	工学部	2	0	0	1	3
	文学部	0	1	0	0	1
帯広畜産大学		0	0	1	1	2
北海道大学		2	3	2	3	10
東北大学		3	3	0	1	7
山形大学		0	1	0	0	1
宇都宮大学		0	0	0	1	1
埼玉大学		1	1	0	0	2
千葉大学		1	0	0	0	1
横浜国立大学		1	0	0	0	1
信州大学		0	1	0	0	1
筑波大学		1	1	0	2	4
東京工業大学		1	0	0	0	1
東京農工大学		2	5	0	2	9
東京海洋大学		0	0	0	1	1
岐阜大学		0	1	0	0	1
静岡大学		0	1	0	1	2
名古屋大学		2	0	0	0	2
京都大学		3	4	2	3	12
大阪大学		0	1	0	1	2
神戸大学		1	0	0	2	3
島根大学		0	1	0	0	1
岡山大学		0	0	0	1	1
山口大学		0	1	0	0	1
九州大学		1	0	0	0	1
宮崎大学		1	0	0	0	1
その他		4	12	1	17	34
合 計		95	93	9	75	272

(1) 学部学生定員・在籍者数

(2024.5.1現在)

区 分		定員	後期課程								研究生		合計		特別聴講学生
			3年		4年		5年		6年						
			小計		小計		小計		小計		小計		小計		
			男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
			(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		
応用生命科学課程	生命化学・工学専修	152	52		72								124		
	40 12		51 21								91 33				
	(1)		(4)								(5)				
	応用生物学専修		22		9								31		
	15 7		8 1								23 8				
	(0)		(0)								(0)				
	森林生物科学専修		8		8								16		
7 1		8 0								15 1					
(0)		(1)								(1)					
水圏生物科学専修	18		18								36				
17 1		15 3								32 4					
(0)		(0)								(0)					
動物生命システム科学専修	8		9								17				
6 2		6 3								12 5					
(0)		(0)								(0)					
生物素材化学専修	13		14								27				
9 4		9 5								18 9					
(0)		(0)								(0)					
環境資源科学課程	緑地環境学専修	108	6		6								12		1
	5 1		5 1								10 2				
	(0)		(0)								(0)				
	森林環境資源科学専修		14		15								29		
	13 1		9 6								22 7				
	(0)		(0)								(0)				
	木質構造科学専修		8		10								18		
	7 1		8 2								15 3				
(0)		(0)								(0)					
生物・環境工学専修	23		19								42				
22 1		15 4								37 5					
(0)		(1)								(1)					
農業・資源経済学専修	32		38								70				
27 5		33 5								60 10					
(1)		(1)								(2)					
フィールド科学専修	10		10								20				
6 4		8 2								14 6					
(0)		(0)								(0)					
国際開発農学専修	21		30								51				
10 11		20 10								30 21					
(0)		(0)								(0)					
獣医学課程	獣医学専修	30	28		33		30		32				123		
22 6		21 12		17 13		22 10				82 41					
(0)		(1)		(1)		(0)				(2)					
合計		290	263		291		30		32		0		616		1
			206 57	216 75	17 13	22 10	0 0	461 155							
			(2)		(8)		(1)		(0)		(0)		(11)		

(2)大学院学生定員・在籍者数

(2024.5.1現在)

専攻名	修士					博士								研究生		合計		
	定員	1年		2年		定員	1年		2年		3年		4年					
		小計		小計			小計		小計		小計		小計					
		男性	女性	男性	女性		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
		(内外国人学生)		(内外国人学生)			(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)		(内外国人学生)	
生産・環境生物学	28	26		38		13	5		11		25				5		110	
		19	7	26	12		4	1	10	1	17	8			4	1	80	30
		(8)		(10)			(3)		(5)		(11)				(3)		(40)	
応用生命化学	34	58		59		16	17		16		24				4		178	
		35	23	35	24		11	6	10	6	13	11			1	3	105	73
		(10)		(8)			(5)		(9)		(12)				(4)		(48)	
応用生命工学	43	32		44		20	16		15		13				7		127	
		24	8	33	11		12	4	9	6	8	5			4	3	90	37
		(4)		(6)			(6)		(11)		(6)				(6)		(39)	
森林科学	20	25		16		10	12		7		7				9		76	
		15	10	12	4		8	4	6	1	5	2			6	3	52	24
		(4)		(2)			(4)		(3)		(3)				(4)		(20)	
水圏生物科学	30	39		34		15	21		19		30				3		146	
		28	11	24	10		17	4	8	11	17	13			3		97	49
		(9)		(6)			(9)		(7)		(11)				(2)		(44)	
農業・資源経済学	17	16		22		8	4		8		13				1		64	
		12	4	16	6		4		7	1	9	4			1		49	15
		(5)		(10)					(6)		(10)				(1)		(32)	
生物・環境工学	17	9		15		8	2		1		7				2		36	
		8	1	14	1			2		1	6	1			2		30	6
		(1)		(4)			(1)		(1)		(4)				(2)		(13)	
生物材料科学	17	22		25		8	12		12		6				3		80	
		16	6	19	6		7	5	10	2	5	1			2	1	59	21
				(2)			(5)		(3)		(2)				(2)		(14)	
農学国際	43	29		38		19	18		14		30				5		134	
		17	12	22	16		10	8	10	4	14	16			5		78	56
		(18)		(19)			(15)		(9)		(17)				(5)		(83)	
生圏システム学	25	20		22		18	6		7		10				3		68	
		17	3	14	8		4	2	4	3	5	5			2	1	46	22
		(1)		(4)			(4)		(3)		(3)				(2)		(17)	
応用動物科学	19	17		20		8	5		8		7				5		62	
		5	12	12	8		2	3	1	7	2	5			2	3	24	38
		(5)		(6)			(1)		(4)		(2)				(5)		(23)	
獣医学						13	17		17		12		15		5		66	
							4	13	8	9	9	3	8	7	2	3	31	35
							(5)		(5)		(2)		(3)		(5)		(20)	
合計	293	293		333		156	135		135		184		15		52		1147	
		196	97	227	106		83	52	83	52	110	74	8	7	34	18	741	406
		(65)		(77)			(58)		(66)		(83)		(3)		(41)		(393)	

(1)学部卒業生 25,512人

(2024.5.1現在)

(2)大学院修了者 修士課程 11,780人 博士課程 5,212人

(3)論文提出による学位授与者数 4,727人

(4)卒業・修了後の進路

学部卒業生

区分	卒業生数	就職先等				
		大学院生	官公庁	民間会社	教育機関	その他
2019年度	262	146	9	77	1	29
2020年度	237	130	7	64	2	34
2021年度	263	157	14	63	0	29
2022年度	248	147	7	56	0	38
2023年度	240	157	12	54	1	16

大学院修了者（博士・満期退学者を含む）

区分		修了生数	就職先等				
			博士課程進学	官公庁	民間会社	教育・研究機関	その他
2019年度	修士	291	62	12	183	1	33
	博士	100	1	2	50	2	45
2020年度	修士	278	53	17	156	3	49
	博士	99	1	1	20	32	45
2021年度	修士	296	54	14	124	0	104
	博士	127	2	1	21	26	77
2022年度	修士	293	35	6	89	2	161
	博士	114	3	1	38	20	52
2023年度	修士	295	65	11	155	0	64
	博士	111	2	7	29	40	33

(5)主な就職先（2023年度）

学部卒業生

応用生命科学課程

環境省、株式会社 RCS、株式会社エッグフォワード、株式会社大塚商会、株式会社極洋、株式会社コナミデジタルエンタテインメント、スカイマーク株式会社、生和コーポレーション株式会社、デロイトトーマツコンサルティング合同会社、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、株式会社マテリアル、他

環境資源科学課程

農林水産省、環境省、経済産業省、総務省、東京都、長崎県、アクセンチュア株式会社、アビームコンサルティング株式会社、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、伊藤忠丸紅鉄鋼株式会社、大分銀行、株式会社グローピング、静岡銀行、株式会社商工組合中央金庫、昭和アステックホールディングス株式会社、株式会社スターティア、住友商事株式会社、株式会社セガ、デロイトトーマツコンサルティング合同会社、株式会社電通、東海旅客鉄道株式会社、SMBC 日興証券株式会社、株式会社日本総合研究所、株式会社 FIELD MANAGEMENT STRATEGY、マーン株式会社、丸紅株式会社、株式会社みずほフィナンシャルグループ、明治安田生命保険相互会社、楽天グループ株式会社、国立研究開発法人理化学研究所、株式会社 Regrit Partners、他

獣医学課程

農林水産省、デジタル庁、東京大学動物医療センター、アクセンチュア株式会社、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、いなば食品株式会社、協和キリン株式会社、沖縄県農業共済組合、さいとう動物病院、株式会社サンリツセルコバ検査センター、千葉 seaside 動物医療センター、株式会社ドーコン、PwC コンサルティング合同会社、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社、森永乳業株式会社、他

大学院修了者 修士

生産・環境生物学専攻

農林水産省、科学警察研究所、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、伊藤忠商事株式会社、AGC 株式会社、株式会社エスネットワークス、株式会社 NTT データ経営研究所、エムシー・ファースティコム株式会社、霧島酒造株式会社、株式会社ゲームフリーク、株式会社サカタのタネ、株式会社 JR 東日本情報システム、スカイマーク株式会社、全国農業協同組合中央会、デロイトトーマツコンサルティング合同会社、ヌヴォトンテクノロジー・ジャパン株式会社、野村證券株式会社、株式会社日立ハイテク、株式会社日比谷アメニス、ペイン・アンド・カンパニー・ジャパン・インコーポレイテッド、他

応用生命化学専攻

アサヒ飲料株式会社、味の素株式会社、アッヴィ合同会社、アビームコンサルティング株式会社、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、株式会社伊藤園、株式会社キユーピー、協友アグリ株式会社、グローピング株式会社、コスモエネルギーホールディングス株式会社、サントリーホールディングス株式会社、JFE スチール株式会社、シンプレクス株式会社、全日本空輸株式会社、太陽化学株式会社、中外製薬株式会社、テルモ株式会社、東京電力ホールディングス株式会社、株式会社虎屋、日清食品株式会社、日清製粉株式会社、日本アイ・ビー・エム株式会社、日本軽金属株式会社、パナソニックホールディングス株式会社、ピアス株式会社、株式会社三井住友銀行、三井物産株式会社、森永製薬株式会社、楽天グループ株式会社、株式会社ロッテ、他

応用生命工学専攻

アーサー・ディ・リトル・ジャパン株式会社、アクセンチュア株式会社、アサヒ飲料株式会社、味の素株式会社、アステラス製薬株式会社、伊那食品工業株式会社、キッコーマン株式会社、株式会社ケアリッツ・テクノロジーズ、住友ファーマ株式会社、石油資源開発株式会社、WDB エウレカ株式会社、中外製薬株式会社、日世株式会社、日本郵船株式会社、野村證券株式会社、P&G ジャパン合同会社、三菱ガス化学株式会社、三菱重工業株式会社、ZS Associates International, Inc.、他

森林科学専攻

株式会社アテック、株式会社石勝エクスティア、株式会社キャリアヴェイル、株式会社ザイマックス、東京パワーテクノロジー株式会社、日本エンヂニア株式会社、日本製紙株式会社、日本たばこ産業株式会社、株式会社野村総合研究所、他

水圏生物科学専攻

アステラス製薬株式会社、EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社、株式会社オオスミ、KDDI 株式会社、株式会社ゼンショーホールディングス、デロイトトーマツアクト株式会社、農林中央金庫、パナソニックホールディングス株式会社、株式会社プライム・ブレインズ、他

農業・資源経済学専攻

農林水産省、アクセンチュア株式会社、セガサミーホールディングス株式会社、デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザリー合同会社、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、他

生物・環境工学専攻

農林水産省、いであ株式会社、伊藤忠商事株式会社、ウォーターポイント株式会社、鹿島建設株式会社、住友商事株式会社、高砂熱学工業株式会社、株式会社ディーエヌエー、東京ガス株式会社、東京電力ホールディングス株式会社、株式会社野村総合研究所、株式会社日立製作所、他

生物材料科学専攻

伊藤忠商事株式会社、株式会社 NTT ドコモ、住友林業株式会社、東京ガス株式会社、TOPPAN ホールディングス株式会社、株式会社日建設計、日本アイ・ビー・エム株式会社、パナソニックエコシステムズ株式会社、PwC コンサルティング合同会社、フューチャー株式会社、レンゴー株式会社、他

農学国際専攻

財務省、アクセンチュア株式会社、アビームコンサルティング株式会社、旭化成株式会社、株式会社エスネットワークス、株式会社果実堂テクノロジー、株式会社光陽社、双日株式会社、株式会社大和総研、デロイトトーマツファイナンシャルアドバイザリー合同会社、PwC コンサルティング合同会社、BIPROGY 株式会社、三菱商事株式会社、ユニリーバ・ジャパン・ホールディングス株式会社、株式会社リクルート、他

生圏システム学専攻

林野庁、環境省、総務省、アクセンチュア株式会社、いであ株式会社、株式会社 KADOKAWA、株式会社日立製作所、他

応用動物科学専攻

アサヒグループ食品株式会社、江崎グリコ株式会社、第一三共株式会社、中外製薬株式会社、日本ハム株式会社、富士通株式会社、フロンティア・マネジメント株式会社、他

大学院修了者 博士（満期退学者を含む）

生産・環境生物学専攻

京都府、国立遺伝学研究所、国立大学法人東京大学、国立大学法人千葉大学、国立大学法人名古屋大学、住友化学株式会社、他

応用生命化学専攻

国立大学法人東京大学、大塚製薬株式会社、株式会社オロ、中外製薬株式会社、森下仁丹株式会社、UT Southwestern Medical Center、他

応用生命工学専攻

国立大学法人東京大学、武田薬品工業株式会社、中外製薬株式会社、万田発酵株式会社、Airlangga University、University of California Berkeley、他

森林科学専攻

国立大学法人東京大学、国立大学法人三重大、福建農林大学、他

水圏生物科学専攻

国立大学法人東京大学、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、株式会社 HUMEDIT、Uva Wellassa University、Chattogram Veterinary and Animal Sciences University、他

農業・資源経済学専攻

農林水産省、東京都、University of Jaffna、他

生物材料科学専攻

国土交通省、国立大学法人東京大学、国立研究開発法人海洋研究開発機構、株式会社 i- 木構、アウェア株式会社、シネジック株式会社、株式会社日立製作所、株式会社村田龍馬設計所、他

農学国際専攻

国立大学法人東京大学、Bandung Institute of Technology、他

生圏システム学専攻

国立大学法人東京大学、自然環境保全センター、他

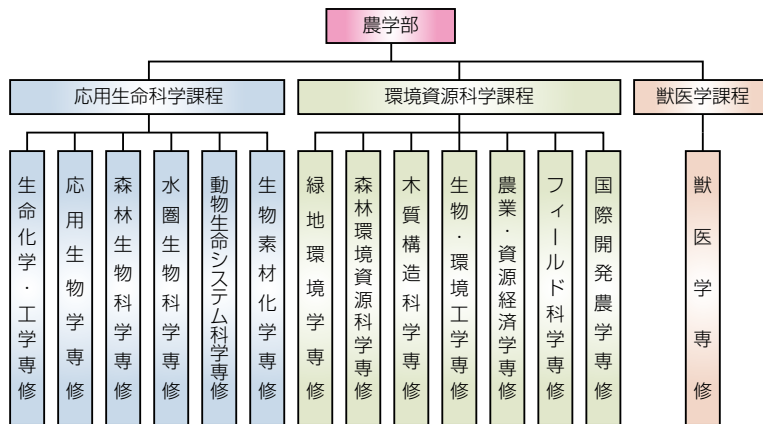
応用動物科学専攻

大鵬薬品工業株式会社、株式会社リヴァンプ、他

獣医学専攻

国立大学法人東京大学、公益財団法人日本小動物医療センター、アイデックスラボトリーズ株式会社、旭化成ファーマ株式会社、SBI バイオテック株式会社、日本たばこ産業株式会社、Burke Neurological Institute、マッキンゼー・アンド・カンパニー・インコーポレイテッド・ジャパン、Mahasarakham University、他

(1) 学部教育



① 農学部をめざす教育

人類は人口の増加の一方でエネルギー・食糧資源供給に限界の見える時代を迎え、特に食糧と環境をめぐるさまざまな問題に直面している。農学部は、農学を構成する応用諸科学に関する専門教育を段階的・体系的に行い、食糧・資源・環境等の問題の解決に必要な高度の専門知識と幅広い視野を有し、社会・文化・産業活動を通じて地球社会の要請に応えることのできる洞察力・実践力・指導力を備えた人材を育成する。

② 課程・専修制

農学部では平成6年度にそれまでの学科制を廃止し、5課程19専修からなる課程・専修制を導入した。この制度は学生のカリキュラム選択に自由度を確保するとともに、段階的・体系的に専門性を高めていく方式によって、高度化する農学教育の要請に応えることをねらいとしている。現代の農学は専門領域への分化が進み、新しい専門領域も生まれているが、理想的な学部教育を実現するため、過度な細分化はせずに、現在は3課程14専修で運営されている。

課程・専修制では、学生は学部・課程・専修という三層の構造のもとで学習し、進学内定後の2A1、2A2には全ての農学部生に開かれた農学総合科目と、農学分野の基礎を学ぶ農学基礎科目を中心に履修することになる。農学総合科目は広い視野から問題関心の醸成をはかるオムニバス形式の講義であり、農学部独特のカリキュラムとなっている。本郷に進学後は課程専門科目、農学共通科目および専修専門科目を学ぶことになる。課程専門科目は専門性が格段に高まる点で農学基礎科目とは異なっている。農学共通科目では専門家としての倫理と安全管理を学ぶ。専修専門科目は実験・実習・演習科目で、基本的に必修となっている。4年次には、研究室に所属して卒業研究に取り組むことになる。

カリキュラムの内容は、平成27年度から4ターム制への移行に併せて、様々な見直しを行った。農学の基礎から応用までを段階的に広く深く学べるように科目区分の改訂を行った。平成28年度進学者から適用された新カリキュラムにおいては卒業に要する単位数を、6年制の獣医学専修（144単位）を除き84単位から76単位に削減したことにより、予習復習を行う時間を確保させて、自発的な学びの深化を促すこととした。農学部では、SPタームやWタームでのカリキュラムに独自の工夫を凝らしている。これによって、専門的な実験・実習に一定期間集中的に取り組めたり、海外のサマープログラムへの積極的な参加が可能になったりするなど、学生に効果的な学修の機会を提供できるようになった。また、すべての専修の学生が必修科目として農学リテラシーを学ぶことになっており、それに加えて専門分野にあわせた安全・倫理面の講義を受講している。これらカリキュラム変更や教員の授業の改善では、学生による授業評価を積極的に活用している。

③ フィールド科学の教育

農学部では授業に占める演習、実験、実習等の割合がもともと高いが、特にフィールドワーク（野外実習）を重視しており、これが他学部にはみられない特色となっている。生態調和農学機構、演習林、水産実験所、牧場などの附属施設のみならず、学外の様々な施設と提携して、実践的な演習の充実を図っている。一部の専修では海外における実習も行っており、グローバルな視野に立つ人材育成をめざしている。

(a)農学部での授業科目名

農学総合科目			
人口と食糧	生態系の中の人類	土壌圏の科学	水の環境科学
環境と景観の生物学	生物の多様性と進化	環境と生物の情報科学	化合物の多様性と生理機能Ⅰ
化合物の多様性と生理機能Ⅱ	バイオマス利用学概論	森林資源と木材利用	食の安全科学
放射線環境学			
農学基礎科目			
基礎有機化学	基礎分析化学	基礎微生物学	分子生物学
基礎生物化学	生物統計学	植物生理学	細胞生物学
遺伝学	植物分類・形態学	昆虫学	動物生態学
森林環境科学汎論	集団遺伝学	動物分類学	植物生態学
木質構造科学概論	流れ学	情報工学	基礎高分子化学
基礎物理化学	農業資源経済学汎論	農業史概論	ミクロ経済学
動物生理学	応用動物科学概論		
農学共通科目			
農学リテラシー	環境倫理	生命倫理	技術倫理
農学展開科目			
食と人間	食と健康システム演習	バイオマス利用研究特論	生物配列解析基礎
ゲノム情報解析基礎	バイオスタティスティクス基礎論	構造バイオインフォマティクス基礎	フードクリエーションサイエンス
フロンティアライフサイエンス	生態統計学	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習
自然再生事業モニタリング実習	農学現象の数理科学的理解	ワン・アースロジーⅠ	ワン・アースロジーⅡ
ワン・アースロジーⅢ	Basics for Science Communication in English	共生型新産業創出コロキウム	
課程専門科目		応用生命科学課程専門科目	
農芸化学概論Ⅰ	農芸化学概論Ⅱ	分析化学	生物無機化学
環境土壌学	土壌生態学	植物栄養学	植物分子生理学
有機化学	生物制御化学	生物有機化学	微生物生理学
細胞微生物学	微生物遺伝学	応用微生物学	微生物生態学
生物情報科学Ⅰ	生物情報科学Ⅱ	タンパク質・酵素学Ⅰ	タンパク質・酵素学Ⅱ
生物化学	動物細胞生物学	栄養化学	食品化学
食品生化学	食品・生物機能化学	環境科学	天然物有機化学
発酵工学	食品微生物学	食品生物構造学	植物機能制御学
食品免疫・腸管機能学	栽培植物学	植物病理学	耕地生態学
作物学Ⅰ	昆虫遺伝学	植物育種学	バイオメトリックス
園芸学Ⅰ	持続的植物生産学	雑草学	園芸学Ⅱ
植物分子育種学	作物学Ⅱ	昆虫生理学	昆虫系統分類学
環境微生物学	植物分子遺伝学	ストレス生物学	保全生態学
昆虫病理学	栽培学	昆虫利用学	植物ウイルス学
菌類学	植物細菌学	昆虫生態学	農業気象学
造林学	森林植物学	森林動物学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林生態生理学	森林生態学	樹木学
樹木医学	野生動物管理論	森林水文学	自然保護論
アジア生物環境学	森林生態圏管理学	自然環境学汎論	生物環境物理学
森林風景計画学	森林経理学	森林政策学	森林利用学
水生動物学	水圏環境科学	水生生物化学	水生動物生理学
水圏生物工学	水圏天然物化学	魚類発生学	魚類遺伝育種学
浮遊生物学	水産食品科学	水生植物学	水生動物栄養学

漁業学	生物海洋学	水産資源学	水産増養殖学
海洋生態学	魚病学概論	応用遺伝学	応用免疫学
動物細胞制御学	動物細胞生化学Ⅰ	動物細胞生化学Ⅱ	動物行動学
動物生命システム科学Ⅰ	動物生命システム科学Ⅱ	組織学	発生学
神経生理学	内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学
薬理学総論	実験動物学	臨床栄養学	生物多様性科学
生殖生物学	動物生命科学基礎	放射線動物科学	生物素材化学概論
森林生物化学	植物バイオマス化学	バイオマス生物工学	木材化学
高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ	生体物理工学	生物材料組織学
セルロース科学	有機反応機構	バイオマスエネルギー工学	界面科学
木材物理学	材料強度学	木質材料学Ⅰ	

課程専門科目

課程専門科目	環境資源科学課程専門科目		
ランドスケープエコロジー	自然共生社会論	園芸学Ⅰ	耕地生態学
森林風景計画学	森林植物学	樹木学	森園管理学
保全生態学	緑地計画学	生態工学	都市農村計画学
ストレス生物学	森林生態学	自然環境学汎論	自然保護論
森林リモートセンシング	農村計画学	生物多様性科学	リモートセンシング情報解析学
森林生態圏管理学	アジア生物環境学	景観解析	沿岸環境動態論
昆虫生態学	農業気象学	持続的植物生産学	雑草学
レクリエーション計画論	森林社会学	国際農業プロジェクト論	生物環境物理学
森林経理学	森林政策学	森林利用学	森林土壌学
森林遺伝育種学	森林水文学	砂防工学	森林資源経済学
国際森林学	森林土壌学	森林生産工学	森林計測学
造林学	森林動物学	森林環境経済学	生物海洋学
水産資源学	構造力学	木材物理学	材料強度学
生物材料組織学	木質材料学Ⅰ	木質材料学Ⅱ	木質構造学
住宅計画論	高分子材料学Ⅰ	高分子材料学Ⅱ	建築住環境学
バイオメトリックス	木材化学	建築設計製図Ⅰ	建築設計製図Ⅱ
建築法規	建築生産施工	生物素材化学概論	生体物理工学
土壌物理学	ポストハーベスト工学	制御工学	農地環境工学
水利環境工学	環境地水学	生物環境工学	生物機械工学
測量学	水理学	水文学	水工システム学
土質力学	農業基盤計画学	生体計測情報学	生物環境情報工学
水処理工学	植物環境システム学	バイオマスエネルギー工学	材料力学
農業IoT概論	生物プロセス工学	生物環境要素学	生物・環境熱力学
農業経営概論	ゲーム理論基礎	農業経済学	マクロ経済学
農政学	農業史	農業経営学	政治経済学
数量経済分析	比較農業政策論	開発経済学	フードシステム論
農村開発経済学	応用数量経済分析	国際農業経済論	比較農業法
農村社会学	地域農業マネジメント	協同組合論	地域社会概論
海外農業研究	国際農業生態学	国際森林環境学	国際植物利用学
国際水産開発学	国際農業工学	国際動物資源科学	環境経済学
環境生物化学	国際地域農業開発と生産者組織	国際開発実践論	

課程専門科目	獣医学課程		
組織学	発生学	獣医解剖学	神経生理学
内分泌・代謝生理学	体液生理学	環境衛生学	薬理学総論
細胞情報薬理学	薬理学各論	動物細胞生化学Ⅰ	動物細胞生化学Ⅱ
細菌学	ウイルス学	実験動物学	応用遺伝学
応用免疫学	動物行動学	臨床栄養学	食品衛生学
寄生虫学	動物感染症学	病理学総論	毒性学
人獣共通感染症学	公衆衛生学総論	獣医衛生学	生殖生物学
獣医魚病学	内科学総論	呼吸器病学	循環器病学
消化器病学	肝臓病・膵臓病学	泌尿器病学	内分泌病学
臨床病理学	獣医事法規	外科学・手術学総論	眼科学
麻酔・鎮痛学	画像診断学	臨床繁殖学	家禽疾病学
病理学各論	外科消化器病学	外科泌尿生殖器病学	外科呼吸器循環器病学
臨床腫瘍学	獣医疫学	神経内科学	血液病学
皮膚病学	運動器病学	神経外科学	馬臨床学
産業動物臨床学Ⅰ	産業動物臨床学Ⅱ	産業動物臨床学Ⅲ	臨床薬理学
臨床行動学	野生動物学	科学プレゼンテーション	獣医倫理・動物福祉学
放射線生物学			
専修専門科目	応用生命科学課程		
生命化学・工学専修			
応用物理工学実験	応用環境科学実験	応用微生物学実験	応用生物化学実験
生命化学・工学実習			
応用生物学専修			
応用生物学基礎実験Ⅰ	応用生物学基礎実験Ⅱ	フィールド農学基礎実習	フィールド農学応用実習
フィールド農学集中実習	応用生物学専門実験	応用生物科学研究演習	
森林生物科学専修			
森林科学基礎実習Ⅰ	森林科学基礎実習Ⅱ	森林科学基礎実習Ⅲ	森林科学基礎実習Ⅳ
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経理学実習	森林土壌学実験	
水圏生物科学専修			
水圏生物科学実験Ⅰ	水圏生物科学実験Ⅱ	水圏生物科学実験Ⅲ	水圏生物科学実験Ⅳ
水圏生物科学実習	漁業学実習	水産実習	
動物生命システム科学専修			
動物生命システム科学実習Ⅰ	動物生命システム科学実習Ⅱ	動物生命システム科学実習Ⅲ	動物生命・形態学実習
動物生命・牧場実習	動物生命システム科学実習Ⅳ	動物生命システム科学実習Ⅴ	動物生命システム科学実習Ⅵ
動物生命システム科学演習			
生物素材化学専修			
生物材料生物学実験	生物材料化学実験	生物材料物理学実験	生物素材化学実験Ⅰ
生物素材化学実験Ⅱ	バイオマス科学実習	生物素材化学実習	生物素材化学演習
専修専門科目	環境資源科学課程		
緑地環境学専修			
緑地デザイン実習	ランドスケープエコロジー実習	緑地環境実地実習	保全生態学実習
応用生物学基礎実験Ⅰ	緑地環境学研究演習		

森林環境資源科学専修

森林科学基礎実習Ⅰ	森林科学基礎実習Ⅱ	森林科学基礎実習Ⅲ	森林科学基礎実習Ⅳ
森林生物科学実験	森林風景計画実習	森林政策学演習	森林利用学実習
森林科学総合実習	森林経営学実習	森林土壌学実験	

木質構造科学専修

生物材料生物学実験	木質構造科学実験	生物材料物理学実験	生物材料化学実験
森林科学実習	木質構造科学実習	建築設計製図Ⅲ	建築設計製図演習Ⅰ
建築設計製図演習Ⅱ	木質構造科学演習		

生物・環境工学専修

応用解析および演習Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅰ	生物・環境工学実験Ⅱ	生物・環境工学実験Ⅲ
応用解析および演習Ⅱ	情報処理演習	水理学演習	生物環境工学演習
測量・空間情報解析実習	機械設計及び製図	生物・環境工学フィールドワーク	生物・環境工学実習

農業・資源経済学専修

農村調査概論	農業・資源経済学演習Ⅰ	農業・資源経済学演習Ⅱ	農業・資源経済学演習Ⅲ
農作業実習	地域経済フィールドワーク演習	農業・資源経済学研究演習	

フィールド科学専修

生物多様性科学実習	保全生態学実習	ランドスケープエコロジー実習	森圏管理学実習
沿岸生態学実習	森林科学総合実習	フィールド科学演習	

国際開発農学専修

国際農学情報処理演習	農場実習	森林実習	臨海実習
牧場実習	英語表現法	国際農学実験・実習Ⅰ	国際農学実験・実習Ⅱ
海外実習	ISAD Food Resources	ISAD Economics	ISAD Environmental Science
国際開発農学概論			

専修専門科目

獣医学課程

獣医学専修

組織学実習	解剖学実習	生体機能学実習	細菌学実習
食品衛生学実習	ウイルス学・免疫学実習	実験動物学実習	獣医学基礎実習
獣医公衆衛生学実習	寄生虫学実習	病理学実習	基礎臨床学実習Ⅰ
動物衛生学実習	基礎臨床学実習Ⅱ	毒性学実習	基礎臨床学実習Ⅲ
大動物臨床・臨床繁殖実習	総合臨床学インターンシップ	応用獣医学インターンシップ	小動物内科臨床実習
小動物外科臨床実習			

(b)教養学部での授業科目名 (2024年度開講)

総合科目D (人間・環境)

環境と生物資源～生物多様性と保全～	水と土の環境科学～食を支える水と土の環境科学～
食糧と環境～海洋生物資源の特性と利用～、～農業生産学概論～	放射線環境科学～放射線農業影響学～
森林環境資源学～森の成長、森と癒し、森と水～	住環境の科学～人と木と木造建築～

総合科目E (物質・生命)

微生物の科学～微生物のバイオテクノロジー～、～微生物の世界～	食の科学～食の科学～
アグリバイオロジー～植物の機能とその利用～	海の生命科学～海の生命科学～
植物医科学～植物医科学概論～	天然物の科学～生命を支える生理活性物質～
応用動物科学Ⅰ～動物生命科学へのいざない～	生物素材の科学～バイオマスの科学～
応用動物科学Ⅱ～高等動物の比較生物学：獣医学へのいざない～	森の生物学～共存する森林生物～

全学自由研究ゼミナール

農作物を知る	植物栄養学入門：植物の栄養吸収のしくみと食糧生産	Agric Scientists Studio Interview：地球医のすすめアドバンスト
動物細胞研究法入門	伊豆に学ぶプラス	ワンパクなタンパク質を科学する：実習編
地球医のすすめ：タネ蒔く農学部有志	獣害問題とは何の問題か	
環境浄化・保全の微生物学	日本は林業を放棄してよいのか	

全学体験ゼミナール

房総の常緑樹林で森林動態を学ぶ	伊豆に学ぶ	房総の森と生業（なりわい）を学ぶ
森のフィールドワーク入門	続伊豆に学ぶ	雪の森林に学ぶ～北海道演習林
東大の別荘「癒しの森」で心も体もリフレッシュ	海の生命科学入門	猟師に学ぶ自然とヒト
森に学ぶ	乳牛、馬、豚、山羊達と触れ合おう	都市林の景観を学ぶー武蔵野編

初年次ゼミ

「食の問題」を科学者目線で考えよう
 生物の生き様を支える多様な生体分子
 農林水産資源の持続的利用を考える
 農水産物（植物と魚類）のゲノム編集について考える
 生物資源の持続的利用を考える
 地球環境温故知新
 21世紀の農学：持続可能性への挑戦
 GIS(地理情報システム)/IoT(モノのインターネット)の農業への利活用
 木質バイオマス利用の意義と方法について考える
 自然の恵み＝天然有機資源の有効利用を考える
 気候変動に脆弱なサンゴを飼育する
 私たちの身近にあるワンパクなタンパク質を科学する

(c)キーワードから見た農学部教育・研究の取り組み

(1)持続可能な循環型社会の構築＝農学



私たち人間は、産業革命や技術革新を通して生活の質の向上を目指してきた。実際に生活は便利になり、人類は人口の増加を伴って発展してきたが、それに伴い、資源や食料問題、地球温暖化や異常気象などの環境問題、生活習慣病や感染症など、様々な問題が生じている。これら、個人レベルから地球レベルまで幅広い問題の多くは人類の営みによってつくられているわけだが、これらの負担を未来の世代に背負わせるのか？

農学とは、今後長きにわたり持続可能な循環型社会を構築する学問である。そこには、宇宙船地球号という考えのもと、我々人類だけではなく自然との調和・共生を通して、我々の衣食住に関する問題解決や質の向上を目指すという思いがある。つまり、地球のものを『使う』だけではなく、地球を『育てる』ことが農学の使命だと考える。

ここでは、持続可能な循環型社会を構築する上で直面する諸問題を解決する農学部の取り組みについて、環境、食と健康、そして生物資源という3つの分野を紹介する。同じキーワードの中でも各専修で特色のある取り組みがあり、そしてこれら3つの分野がお互いに強く結びついていることが分かる。

(2) キーワード「環境」

農学部「環境」＝自然や社会との共生を目指す



新たな国際協力・農業開発

- 持続的な農業・環境・資源利用技術を開発する
- 現地の人々の本質的なニーズをとらえる
- 異なる学問分野を学び俯瞰的な考え方を身につける
- 実践と観察から生きた知識を得る
- 学問と政策と実践をつなぐ総合力と創造力を養う



節水灌漑の水田調査 (インドネシア)



サンプリング方法の創意工夫中 (農場実習)



食料生産のための環境を守る

- 70億の人口を養う環境
- 安全・安心の食は環境から
- 環境を救う「植物力」
- 福島を放射能から守る
- 海外に広がる数多くの研究フィールド
- 遺伝子、ゲノムから生態系まで多彩なアプローチ



アルカリ土壌地帯の植生回復 (中国)



水田の放射性セシウム調査 (福島)



森林の環境を知り、森林を守り育てる

- 森林の有する多様な機能
CO₂吸収、水源かん養、土砂災害防止、快適環境の形成、生物多様性の保全など
- 森林の荒廃や消失
人間活動の拡大、自然災害、病虫害害など
- 森林を総合的に理解し、森林の保全、育成、持続的な利用に活かす



高さ90mのクレーンで観測を行い、熱帯林の多様な機能を解明する



太さ50μmの電極を根に挿入して、樹木のストレス耐性を解明する



海洋環境・生態系と人類の共存

- 海洋：生命誕生の場
多種多様な生物と生態系
地球最後のフロンティア
- 水圏における生物生産と物質循環過程の解明
- 水圏生態系の保全と利用
生態系サービスの享受
自然と人間のつき合い方
- 持続可能性の追求
地球の有限性と環境収容力
水産資源管理、生態系管理
- 地球的な視野をもって活躍できる人材の育成



学術研究船「白鳳丸」による調査航海



臨海実習での定置網揚げ



ウナギの卵とレブセファルス幼生



健全でうるおいのある「みどり」を育む

- 地球環境とみどり
グローバルな環境問題によって危機的な状況に瀕している「みどり」の再生と持続的利用が必要
- 成熟社会とみどり
人口減少や高齢化など社会構造の転換に対応した、人と「みどり」の新たな関係づくりが必要
- 持続型社会とみどり
人間活動と自然環境の調和した「みどり」豊かな社会の実現には、グローバル・ローカルの視点が必要



アマゾンの農地開発

砂漠化した土地の緑化



生きがいの場としてのみどり

教育の場としてのみどり



都市に再生した森 海を渡る黄砂

人と自然が調和した緑地環境＝「ランドスケープ」を目指して！



農学と工学を融合し、環境を科学する

- 生物と環境を**はかり解析する**
・ミクロスケール（細胞、土粒子）からマクロスケール（地域、地球規模）まで
- 食と環境を**科学し応用する**
・物質循環、持続可能な農業
・ポストハーベスト、食の安全・安心
・農業ロボット、精密農業、植物工場
- 地域環境を考え地域を**デザインする**
・農業、農地の多面的機能
・グリーンイノベーション



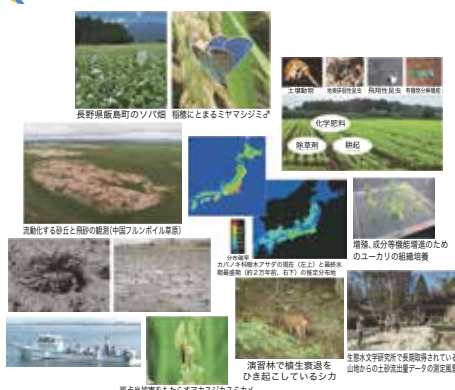
水田圃場へのICT機器の設置



畑地からのCO₂ガス放出に関する調査



生態系・生物多様性の保全と自然共生社会の実現を目指して



自然の中で科学する
フィールド科学への招待
フィールド科学専修



フィールドワークから、農業や地域の課題解決策を描き出す研究室です



(3)キーワード「食・健康」

農学部の「食・健康」＝地球の未来を救う第一歩



農学から見た「食・健康」

- 「生産」から「消費」まで
- 食糧資源の確保
- いかに「作る」か
いかに「食べる」か
- おいしく食べて健康に
「健康寿命延伸」
- 食を通じた「グローバルスタンダード」。



食料生産の新展開

- 食料生産の鍵は、
①作物の収量の向上
②病害虫の最適制御
- ゲノム情報の利用による
生理的機能の改良
- 作物の遺伝的特徴と環境
との関係の解明
- 広がる海外での研究展開



水産資源の利活用

- 動物性タンパク質源と
しての水産物
世界で15%、後発国で
は50%以上
- 食文化「和食」と「だし」
- 豊富な健康機能性



世界文化遺産「和食」と「だし」

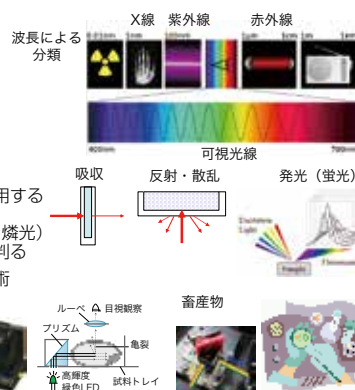


地球と海の恵みの一部を無駄なく最後まで利用する



光で食を科学する

- 食の分析に利用される光
光は波である(波動性)
波の周期的な長さ＝波長
光を波長毎に分ける＝分光法
- 光と物質の相互作用
物質は特定の波長の光と相互作用する
相互作用による現象：
吸収・反射・散乱・発光(蛍光・燐光)
どんな成分がどれだけあるかが判る
- 食の安心・安全を支える光技術



健康・病気と食品

- 人口増加と食料不足
- 栄養不良と栄養過多
- 健康食品とサプリメント
- 食品(遺伝子組換え食品を含む)
の安全と安心
- 生命活動の異常と病気
- 病気の予防と治療薬の開発
- 食品と飼料



世界の多くの地域では未だに食料・栄養不足



ヒトには栄養不足の食品、資源動物には有用な飼料



動物とヒトの健康

- 環境因子の動物への影響
- 昆虫が媒介する病気の制御
- 絶滅危惧動物の遺伝子維持
- 動物の多様性の維持
- 動物の進化
- 環境に応答した育種
- 細胞を取り巻く体内環境



病原体媒介昆虫の野外調査(バングラデシュ)



マウス胚・胎子・胎盤解剖実習(3年次)



産業動物の健康を守る

- 家畜の健康保持
- 繁殖効率の向上
- 生産性の改善
- 安全、安心な畜産食品
- 学問、政策、実践とを
つなぐ総合力



畜産資源の安定供給

- ◀ 育種・繁殖学
- ◀ 栄養学
- ◀ 獣医学
- ◀ 経済学
- ◀ 飼養・管理学
- ◀ 草地学

臨床繁殖学実習

家畜衛生学実習



家畜飼養学実習

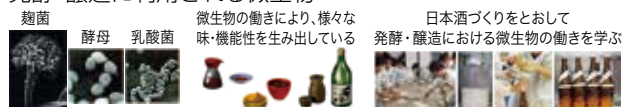
病理診断学実習

大動物臨床学実習



微生物と食・健康

発酵・醸造に利用される微生物

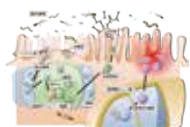


微生物と腸管との相互作用

腸内においては、様々な微生物がすみ、腸管との相互作用によって免疫が制御されている

ビフィズ菌 乳酸菌 大腸菌

腸内フローラ



農業を支える微生物

水田土壌には多くの種類の微生物がすみ、物質循環を司っている



(4)キーワード「生物資源」 農学部「生物資源」＝持続可能な社会を担う

生物資源：動物

自然の恵み⇄育てる

- 自然の恵み
 - ・安全性・安定供給性
 - ・乱獲・生態系への影響
- 育てる
 - ・経済性(高付加価値化、生産性)
 - ・環境への影響(肥料、産業ゴミ)

食料⇄非食料

- 食料
 - ・畜産・漁業
 - ・安定供給性・競争力
- 非食料
 - ・鶏卵→ウイルス培養
 - ・昆虫→生物農薬、紡績
 - ・実験動物→医薬品

写真：美迎詩織(獣医繁殖育種学研究室)
ウシの繁殖率をあげるフェロモンの探索

写真：川本宗孝(昆虫遺伝研究室)
無限の可能性を秘めたカイコによる物質生産

スライド：瀬秀樹(水産化学研究室)
新技術駆使した水産物の出荷時期調節と高付加価値化

使役動物の感染症対策：動物福祉と公衆衛生

生物資源：植物

資源の効率的な利用

- 食料として
 - ・農作物の生産性向上
 - ・過酷な環境でも栽培可能な植物の創出
- 非食料として
 - ・バイオエネルギー
 - ・有用物質生産(医薬品など)

写真提供：植物分子生理学研究室
乾燥ストレス耐性を有する組換えイネ

写真提供：生物機械工学研究室
エネルギー資源作物の栽培

資源の持続的な利用

- 多様な資源
 - ・生態系サービス
 - ・野生植物の持つ遺伝資源
- 自然共生社会
 - ・生物多様性
 - ・里地里山・農村景観

写真提供：生物環境工学研究室
植物を利用したインフルエンザワクチン生産

写真：緑地環境学専修ウェブサイト
http://www.a-sky.co.jp/departments/faculty/ryokuchi.html
農地・農村のデザインと農業生態系の保全

森林の生物資源

森林土壌を調べる
土壌は、森林の持続性の最重要指標

森林植生の生理・生態を調べる
生物資源の生育メカニズムを分析

木を使いながら、森を守る
情報技術の活用

健全な森林のサイクルを検証・実現

森林土壌を調べる

森林植生の生理・生態を調べる

健全な森林のサイクルを検証・実現

情報技術 (ICT) を活用し木材の利用を促進する

水圏（海・河川等）の生物資源

地球上の70%は水圏

- 多様な環境
 - ・生物資源の多様性
 - ・生物資源の莫大な生産性
- 未利用生物資源
 - ・食料としての可能性
 - ・食料以外の利用(医薬品・燃料等)

日本に渡るウナギの量を調べる

モデルで生物資源量を推定

「海の恵み」は誰の物？

- 再生産可能(子孫が増える)資源
 - ・適切な資源管理が必要
 - ・どう増やすか？

生物学、化学、物理学、数学すべてが貢献

生物の中に棲む生物も貴重な生物資源

目に見えない藻も生物資源

Botryococcus braunii

液化炭化水素

バイオ燃料

木質資源の高度利用

化石資源→生物資源

- 化石資源
 - ・生活を快適で便利に
 - ・枯渇的で CO₂ 増加
- 生物資源
 - ・衣・食・住の基本
 - ・持続的で CO₂ 削減

環境にやさしい、植物由来のバイオプラスチック

木材の分析化学により新しい利用に展開

豊富な木質資源で生活を快適で便利に！

- ・グリーンケミストリー
- ・バイオテクノロジー
- ・材料工学

低炭素社会に貢献する基盤的研究

鋼鉄より軽くて強い、木材由来のセルロースナノファイバー

木や草を分解する酵素でバイオエタノール燃料

生物資源の利用法

木材を使って炭素を固定

- 建築構造物
 - ・新しい材料・接合法開発(木材の可能性)
 - ・木造らしい建築物(木を魅せる)
- 家具・内装材
 - ・快適性(木で心地良い空間に)
 - ・環境改善(吸放湿性、断熱性など)
- 土木的利用
 - ・木製ダム・木橋(意外と長持ち)
 - ・ガードレール・遮音壁(見た目も穏やか)
- その他のいろいろ
 - ・楽器(樹種が違うと音色も違う)
 - ・文具(香り・手触りの良さ)
 - ・玩具(子供への安全性) 等々

木を賢く使って、地球環境にも貢献！

木質空間の快適性評価とデッキ表面温度の比較

木質構造による美しい景観と五月祭2016で製作した木造展示物

微生物とその酵素の利用

食飼料を造る

- 真菌類(カビ・酵母)
- 乳酸菌・酢酸菌など

抗生物質(有用物質)を造る

- 放線菌など

健康に役立つ物質を創る

- ビフィズ菌の分解酵素
- オリゴ糖合成酵素など

物質生産をデザインする

- 大腸菌などを用いる

味噌・醤油・酒などを造る麹菌

抗生物質などを造る放線菌

酵素学研究室

Standards in genomic sciences 応用微生物学研究室

ビフィズ菌がヒトの母乳のオリゴ糖を分解する酵素

二酸化炭素を固定する水素細菌

化学を利用した生物資源

生物資源→有用物質

- 天然物質
 - ・植物のホルモン
 - ・動物のタンパク質
 - ・微生物の代謝物

物質の探索と有効利用

- 有機化学
- 分析化学
- 分子生物学
 - ・生命現象の解析
 - ・分子の同定
 - ・分子の構造解析
 - ・分子の大量合成
 - ・生命現象の再現
 - ・産業応用への発展

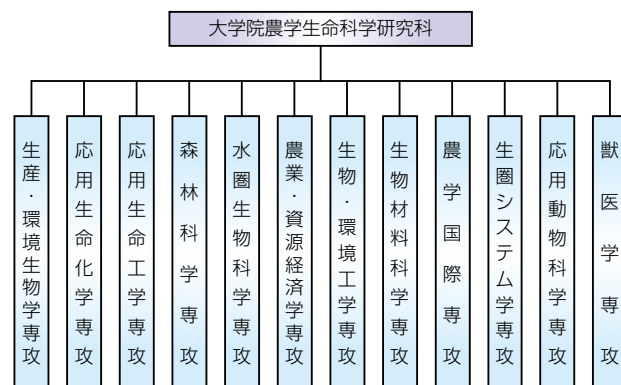
植物ホルモン

微生物による金属ナノ粒子

生体鉱物

動物ホルモン

(2)大学院教育



我々の生活は、生物資源に依存している。農学生命科学は、植物や動物、微生物の生物機能を活用して、人類生存の基盤である生物資源の生産と環境の持続性に貢献するための学問分野である。世界人口の急激な増加が予測されているなか、安全な食料の供給と地球環境の保全が人類にとって最大の課題であり、その解決に向けた技術的基盤や社会的な対策を担う最も重要な研究分野として注目されている。大学院教育では、食料や環境に関する複雑かつ多様な課題に対して専門の立場から取り組める人材を育成することを目標にしている。そのために本研究科は、生産・環境生物学、応用生命化学、応用生命工学、森林科学、水圏生物科学、農業・資源経済学、生物・環境工学、生物材料科学、農学国際、生圏システム学、応用動物科学、獣医学（4年制博士課程）の12専攻を擁し、農林水畜産業の基盤となる生命科学や生態系管理のためのフィールド科学、社会制度や情報に関する人文・社会科学まで非常に幅広い教育研究が行われている。さらに、生態調和農学機構や演習林、牧場、動物医療センター、水産実験所、アジア生物資源環境研究センター、アグロバイオテクノロジー研究センターなどの充実した附属施設が農林水畜産業の現場に即した教育研究を支えている。また、食の安全・安心に対する社会の要請に応える研究の推進を目的に食の安全研究センターが設置され、産学連携による研究が活発に行われている。修士課程では、講義、演習、修士論文研究を、博士課程では、主に演習、博士論文研究を通じて高度な専門性を身につける教育がなされている。その一方で、先端化、細分化した研究成果を統合し活用できる人材の育成を目的とした専攻横断的な教育プログラムも用意されている。たとえば、ゲノムをはじめ多種多様な生命情報の蓄積が急激に進むなか、それらを統合し活用できる人材育成のための教育プログラムとしてアグリバイオインフォマティクス教育研究ユニットが、学際的な研究交流を通して農学に関わる専門領域の相互理解を深めることを目的としたアグリコクーンが、それぞれ設置されている。

本研究科と交流協定のあるアジアを中心とした海外の大学の研究者を受け入れ、英語で博士課程の教育を行う「環境調和農学特別コース」を設置し、この修了者を通じた学術・研究交流の国際ネットワーク形成を目指している。また平成22年10月から、研究科初の英語のみで履修・修了できる修士課程「国際農業開発学コース（IPADS）」を開始し、アジアのみならず中南米、欧米からの留学生を受け入れている。日本人学生も英語で講義、演習を受ける機会が増え、留学生との交流も相まって本研究科における教育の国際化が着実に進展している。平成24年度からは博士課程も開始した。また平成27年度からはドイツ・ボン大学の開発研究センター（ZEF）との本格的な教育交流がはじまった。平成28年2月に全学協定書を締結し、相互の教員の訪問による単位を伴う交換講義、ドイツの学生の訪日による共同実習が展開されている。

令和6年4月の本研究科の入学者は、修士課程271名、博士課程117名で、そのうちアジアを中心とした留学生が108名含まれている。大学院修了者は、大学や研究所等の教育研究機関、官公庁、民間企業等に職を得て、常に社会の中核を担う存在になっている。本研究科は、時代の要請に応えられる人材を社会に輩出していくための努力を続けている。



弥生講堂アネックス



向ヶ岡ファカルティハウス



農正門

弥生キャンパス木質構造建築物（写真提供：生物材料科学専攻）



共同実習のために来日したボン大学グループとIPADS学生の交流



IPADS ボン大学との共同講義風景（写真提供：IPADS）

(a)大学院（修士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

作物学特論	園芸学特論	昆虫遺伝・発生生理学	昆虫ウイルス・細胞工学
育種学特論	栽培学特論	植物病理学特論	植物ウイルス学特論
植物細菌学特論	植物菌類学特論	生物測定学特論	植物分子遺伝学特論
昆虫学特論	総合有害生物管理学	生産生態学特論	Bioresource Sciences for Asia
Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science	Fundamentals of Plant Production and Protection	Fundamentals of Bioresources and Biotechnology	生産・環境生物学特別講義
Introduction to the Agricultural and Environmental Biology	応用生物学特別実験Ⅰ	応用生物学特別実験Ⅱ	応用生物学演習Ⅰ
応用生物学演習Ⅱ	基礎生物学特別実験Ⅰ	基礎生物学特別実験Ⅱ	基礎生物学演習Ⅰ
基礎生物学演習Ⅱ	資源創成生物学特別実験Ⅰ	資源創成生物学特別実験Ⅱ	資源創成生物学演習Ⅰ
資源創成生物学演習Ⅱ	生産生態学特別実験Ⅰ	生産生態学特別実験Ⅱ	生産生態学演習Ⅰ
生産生態学演習Ⅱ			

応用生命化学専攻

Plant Nutrition and Physiology	植物栄養生理学特論（Ⅰ）	植物栄養生理学特論（Ⅱ）	生物機能開発化学
生命化学フロンティアⅠ	生命化学フロンティアⅡ	天然物構造解析法	有機合成化学
天然物生理化学	細胞調節生化学	環境土壌資源論	生物無機化学
動物生理化学	食品応用生化学	食品機能化学	食品物理化学
生理活性化学	ゲノムと生体情報の科学	正常と異常の生命科学	Animal Biological Chemistry and Physiology
Bioactive Molecules: Structures, Functions and Biosyntheses	応用生命化学特別実験Ⅰ	応用生命化学特別実験Ⅱ	応用生命化学演習

応用生命工学専攻

情報生命工学	醗酵微生物学	分子育種学	生命工学フロンティアⅠ
生命工学フロンティアⅡ	生体触媒分子論	細胞遺伝学	微生物機能開発学
環境微生物学	醗酵醸造学	植物機能工学	Applied Utilization of Microbial Function/Metabolism
Microorganisms in Environments	応用生命工学特別実験Ⅰ	応用生命工学特別実験Ⅱ	応用生命工学演習

森林科学専攻

基礎造林学	造林学特論	熱帯森林学	森林土壌学特論
森林植物学特論	環境植物学	樹病学	森林生態学特論
樹木生理学	森林昆虫学	土壌動物学	環境動物・倫理学
森林経理学特論	森林空間計画論	森林計測学特論	森林評価学
林政学特論	外国森林政策学	林業経済論	資源環境経済学
林業史	森林利用学特論	森林基盤整備計画論	森林生産工学特論
森林機械作業論	森林作業システム学	森林水文学特論	土砂水理学
砂防工学特論	森林環境物理学	環境緑化工学	砂防・治山事業論
造園学特論	風致工学	森林レクリエーション論	環境設計特論
国際森林学特論	持続的森林圏経営論	森林生態圏管理学特論	森林圏生態学
森林圏生物動態学	生物多様性科学総論	森林圏管理システム学	森林流域管理学
森林圏水循環機能学	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学	森圏管理学特論
森林共生生物学	森林科学特別実験	森林科学特別演習	森林科学海外実習Ⅰ
森林科学海外実習Ⅱ	森林科学セミナーⅠ	森林科学セミナーⅡ	

水圏生物科学専攻

水圏生物生態解析法	水圏生命科学実験法	海洋科学概論	生物海洋学総論
海洋生物学	海産哺乳動物学	水産資源管理学	水産海洋学
水族遺伝育種学	魚類免疫学	魚病学特論	水族生理学特論
水圏生物システム学	水圏生物化学特論	水圏天然物化学特論	水圏生物工学特論

水圏生物科学専攻（続き）

水圏生命科学特論	海洋生物資源利用論	水産資源学演習	水圏生物環境学演習
魚病学演習	水族生理学演習	水圏生物化学演習	水圏天然物化学演習
水圏生物学演習	水圏生物システム学演習	プランクトン学演習	海洋微生物学演習
海洋資源解析学演習	海洋資源生態学演習	海洋環境動態学演習	海洋行動生態計測演習
海洋問題演習Ⅲ	水圏生物科学演習	水圏生物科学特別講義Ⅰ	水圏生物科学特別実験Ⅰ

農業・資源経済学専攻

農業資源経済学特論 AⅠ (Agricultural and Resource Economics AⅠ)	農業資源経済学特論 AⅡ (Agricultural and Resource Economics AⅡ)	農業資源経済学特論 AⅢ (Agricultural and Resource Economics AⅢ)	農業資源経済学特論 AⅣ (Agricultural and Resource Economics AⅣ)
農業資源経済学特論 BⅠ (Agricultural and Resource Economics BⅠ)	農業資源経済学特論 BⅡ (Agricultural and Resource Economics BⅡ)	農業資源経済学特論 BⅢ (Agricultural and Resource Economics BⅢ)	農業資源経済学特論 BⅣ (Agricultural and Resource Economics BⅣ)
農業資源経済学特論 CⅠ (Agricultural and Resource Economics CⅠ)	農業資源経済学特論 CⅡ (Agricultural and Resource Economics CⅡ)	農業資源経済学特論 CⅢ (Agricultural and Resource Economics CⅢ)	農業資源経済学特論 CⅣ (Agricultural and Resource Economics CⅣ)
農業資源経済学特論 DⅠ (Agricultural and Resource Economics DⅠ)	農業資源経済学特論 DⅡ (Agricultural and Resource Economics DⅡ)	農業資源経済学特論 DⅢ (Agricultural and Resource Economics DⅢ)	農業資源経済学特論 DⅣ (Agricultural and Resource Economics DⅣ)
農業資源経済学特論 EⅠ (Agricultural and Resource Economics EⅠ)	農業資源経済学特論 EⅡ (Agricultural and Resource Economics EⅡ)	農業資源経済学特論 EⅢ (Agricultural and Resource Economics EⅢ)	農業資源経済学特論 EⅣ (Agricultural and Resource Economics EⅣ)
農業・資源経済学特別講義Ⅰ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅠ)	農業・資源経済学特別講義Ⅱ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅡ)	農業・資源経済学特別講義Ⅲ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅢ)	農業・資源経済学特別講義Ⅳ (Special Lectures in Agricultural and Resource EconomicsⅣ)
外国農業特論 (Special Lecture on foreign agriculture)	農業資源経済学論文演習Ⅰ (Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅠ)	農業資源経済学論文演習Ⅱ (Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅡ)	農業資源経済学論文演習Ⅲ (Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅢ)
農業資源経済学論文演習Ⅳ (Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅣ)			

生物・環境工学専攻

生体計測情報学特論	生物環境基礎工学	生物環境情報工学特論Ⅰ	生物環境情報工学特論Ⅱ
農地環境工学特論	農地管理工学特論	水理学特論	水利環境工学特論
土壌物理学特論	環境地水学特論	地域環境工学特論Ⅰ	地域環境工学特論Ⅱ
生物環境調節学	生物環境工学特論	生物機械工学特論	生物物性学特論
生物加工システム工学	生物プロセス工学特論	生物システム工学特論Ⅰ	生物システム工学特論Ⅱ
エコロジカル・セイフティー学特論Ⅰ	エコロジカル・セイフティー学特論Ⅱ	生物・環境工学特別研究Ⅰ	生物・環境工学実験実習
生物・環境工学演習			

生物材料科学専攻

生物素材科学特論	セルロース科学特論Ⅰ	セルロース科学特論Ⅱ	木造建築特論
木材乾燥学特論	木材物理学特論Ⅰ	木材物理学特論Ⅱ	木質構造学特論
木質材料学特論	住環境学特論	材料・住科学特別講義Ⅰ	材料・住科学特別講義Ⅱ
木材保存学特論	森林生物化学特論Ⅰ	森林生物化学特論Ⅱ	木材化学特論Ⅰ (Basic Lignin Chemistry)
木材化学特論Ⅱ (Advanced Carbohydrate Chemistry)	高分子材料科学特論Ⅰ	高分子材料科学特論Ⅱ	バイオマス化学特別講義Ⅰ (Advanced Lignin Chemistry)
バイオマス化学特別講義Ⅱ	バイオマス化学特別講義Ⅲ	バイオマス化学特別講義Ⅳ	生物素材科学特別講義
生物材料科学特別実験Ⅰ	生物材料科学演習		

生物材料科学専攻（木造建築コース）

木質構造学特論	木質材料学特論	木材保存学特論	木材利用システム学特論
木材物理学特論Ⅰ	住環境学特論	資源環境経済学	建築生産特論
建築事例研究	建築設計製図特論	木造建築特論	構造解析特論
建築材料学特論	木質構造設計論	建築関連規格と法規	木造建築設計演習
建築事例研究実習	木造建築実験		

農学国際専攻

国際水産開発学総論 (Global Fisheries Science and Policy)	国際水産開発学特論 (Global Fisheries Science and Economics)	国際水産開発学演習 (Seminar in Global Fisheries Science)	国際動物資源開発学 (Global Animal Resource Development)
国際動物機能開発学 (Functional Animal Sciences)	国際動物資源学演習 (Seminar in Global Animal Resource Science)	国際動物生産学実験 (Research in Global Animal Production Science)	国際植物資源学 (Global Plant Resources)
植物資源管理学 (Cropping System Technology)	国際植物資源学演習 (Seminar in Plant Science for Sustainable Agriculture)	地域資源利用システム学 (Systematic Utilization of Regional Resources)	国際植物材料学 (Global Plant Material Science)
国際植物材料学演習 (Seminar in Global Plant Material Science)	国際植物生産学実験 (Research in Global Plant Production Sciences)	国際森林資源学特論 (Advanced Global Forest Resources)	国際森林環境学特論 (Advanced Global Forest Environmental Science)
国際森林環境学演習 (Seminar in Global Forest Environmental Studies)	植物新機能化学 (Plant Molecular Physiology)	植物機能開発工学 (Plant Biotechnology)	新機能植物開発学演習 (Seminar in Plant Biotechnology)
地球生物環境学実験 (Research in Global Bio-Environmental Studies)	国際農業開発学演習 (Seminar in Agricultural Development Studies)	国際農業開発学実験 (Research in Agricultural Development Studies)	国際農業統計学特論 (Advanced International Agricultural Statistics)
国際計量経済学特論 (Advanced International Econometrics)	国際環境経済学演習 (Seminar in International Environmental Economics)	国際環境経済学研究 (Research in International Environmental Economics)	国際環境資源情報学特論 (Advanced Environmental and Resource Information Systems)
国際情報農学特論 (Advanced International Agro-Informatics)	国際情報農学演習 (Seminar in International Agro-Informatics)	国際情報農学実験 (Research in International Agro-Informatics)	農学国際特論Ⅰ (Advanced Global Agricultural ScienceⅠ)
農学国際特論Ⅱ (Advanced Global Agricultural ScienceⅡ)	農学国際特論Ⅲ (Advanced Global Agricultural ScienceⅢ)	農学国際演習 (Seminar in Global Agricultural Sciences)	農学国際実験・研究 (Research in Global Agricultural Sciences)
農学国際実地研究Ⅰ (On-site Practical Research in Global Agricultural SciencesⅠ)	社会デザインと実践演習A (Case Study: Social Design and Management A)	国際感染症制御学Ⅰ (Advanced Global Infectious Diseases ControlⅠ)	国際感染症制御学Ⅱ (Advanced Global Infectious Diseases ControlⅡ)
国際農学英語Ⅰ (English for Global Agricultural SciencesⅠ)	国際農学英語Ⅱ (English for Global Agricultural SciencesⅡ)	海外における安全管理論 (Overseas Safety and Risk Management)	

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学各論 (IPADS Case Studies)	国際農業開発学特論 (IPADS Development Studies)	国際農業開発学入門 (IPADS Introductory Course)	作物管理学 (IPADS Crop Management)
国際作物科学 (IPADS Crop Science)	国際食料資源学 (IPADS Food Resources)	国際土壌科学 (IPADS Soil Science)	国際食品科学 (IPADS Food Science)
国際植物新機能化学 (IPADS Plant Molecular Physiology)	国際植物機能開発工学 (IPADS Plant Biotechnology)	国際植物改良学 (IPADS Plant Improvement)	国際森林開発論 (International Forest Development)
森林昆虫生態学 (Forest Insect Ecology)	国際動物科学 (IPADS Animal Science)	国際沿岸生態学 (IPADS Coastal Ecology)	IPADS 国際水産：科学と政策 (IPADS Global Fisheries : Science and Policy)
IPADS 国際水産：科学と経済 (IPADS Global Fisheries : Science and Economics)	国際環境科学 (IPADS Environmental Science)	国際環境政策学 (IPADS Environmental Policy)	国際農業開発経済学 (IPADS Development Economics)
国際農業統計学 (IPADS Statistics)	国際農業開発学客員セミナー (IPADS Guest Seminars)	国際農業開発学実習 (Practice in International Agricultural Development)	国際木質材料化学 (IPADS Wood Material Chemistry)
国際計量経済学 (IPADS Econometrics)	サステナビリティと農学 (Sustainability and Agricultural Sciences)	国際農業開発学セミナーⅠ (IPADS Research SeminarsⅠ)	国際農業開発学セミナーⅡ (IPADS Research SeminarsⅡ)
国際農業開発学研究 (IPADS Master's Research)			

生圏システム学専攻

フィールド科学総論	生圏システム学特論	生態統計学	生物多様性科学総論
生物多様性科学特論	生物多様性科学演習	保全生態学総論	保全生態学特論
保全生態学演習	緑地創成学特論	緑地管理学特論	緑地創成学演習
森圏管理学特論	相関森林学	森圏管理学演習	水域生態学
水域保全学	水域保全学演習	耕地生圏生態学	耕地生圏生態学演習
水圏生産システム学総論	水圏生産システム学特論	水圏生産システム学演習	森林圏生態学
森林圏生物動態学	森林圏生態学演習	森林生物機能学	森林遺伝子機能開発学
森林生物機能学演習	森林生態圏管理学特論	森林圏管理システム学	国際森林学特論
森林圏生態社会学演習	持続的森林圏経営論	森林流域管理学	森林圏水循環機能学
森林流域管理学演習	生圏システム学実験・研究		

応用動物科学専攻

動物科学トピックス	ゲノムと生体情報の科学	神経と行動の科学	動物・細胞の構造の科学
動物の一生の生物学	正常と異常の生命科学	外界と生体のインターラクショ	
動物生産テクノロジー概論	生物学における情報科学とプレゼンテーション戦略		動物科学のフロンティアⅠ
動物科学のフロンティアⅡ	高次生体制御学特別実験Ⅰ	高次生体制御学特別実験Ⅱ	高次生体制御学演習
動物機能科学特別実験Ⅰ	動物機能科学特別実験Ⅱ	動物機能科学演習	

(b)大学院（博士課程）での授業科目名

生産・環境生物学専攻

生産・環境生物学特別実験	生産・環境生物学特別演習
--------------	--------------

応用生命化学専攻

応用生命化学特別実験Ⅲ	応用生命化学特別演習
-------------	------------

応用生命工学専攻

応用生命工学特別実験Ⅲ	応用生命工学特別演習
-------------	------------

森林科学専攻

森林生態社会学特別演習	森林生命環境科学特別演習	森林資源環境科学特別演習Ⅰ	森林資源環境科学特別演習Ⅱ
森林生態圏管理学特別演習Ⅰ	森林生態圏管理学特別演習Ⅱ	アジア生物環境学特別演習	森林生態社会学特別実験
森林生命環境科学特別実験	森林資源環境科学特別実験Ⅰ	森林資源環境科学特別実験Ⅱ	森林生態圏管理学特別実験Ⅰ
森林生態圏管理学特別実験Ⅱ	アジア生物環境学特別実験		

水圏生物科学専攻

水圏生物科学特別講義Ⅱ	水圏生物科学特別実験Ⅱ	水圏生物科学特別演習
-------------	-------------	------------

農業・資源経済学専攻

農業資源経済学特別研究 AⅠ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics AⅠ)	農業資源経済学特別研究 AⅡ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics AⅡ)	農業資源経済学特別研究 AⅢ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics AⅢ)	農業資源経済学特別研究 AⅣ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics AⅣ)
農業資源経済学特別研究 BⅠ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics BⅠ)	農業資源経済学特別研究 BⅡ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics BⅡ)	農業資源経済学特別研究 BⅢ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics BⅢ)	農業資源経済学特別研究 BⅣ (Advanced Study in Agricultural and Resource Economics BⅣ)
農業資源経済学特別研究 CⅠ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture CⅠ)	農業資源経済学特別研究 CⅡ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture CⅡ)	農業資源経済学特別研究 CⅢ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture CⅢ)	農業資源経済学特別研究 CⅣ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture CⅣ)
農業資源経済学特別研究 DⅠ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture DⅠ)	農業資源経済学特別研究 DⅡ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture DⅡ)	農業資源経済学特別研究 DⅢ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture DⅢ)	農業資源経済学特別研究 DⅣ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture DⅣ)
農業資源経済学特別研究 EⅠ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture EⅠ)	農業資源経済学特別研究 EⅡ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture EⅡ)	農業資源経済学特別研究 EⅢ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture EⅢ)	農業資源経済学特別研究 EⅣ (Advanced Study in Comparative History of Agriculture EⅣ)
農業資源経済学特別演習Ⅰ (Advanced Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅠ)	農業資源経済学特別演習Ⅱ (Advanced Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅡ)	農業資源経済学特別演習Ⅲ (Advanced Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅢ)	農業資源経済学特別演習Ⅳ (Advanced Seminar in Agricultural and Resource EconomicsⅣ)
農業・資源経済学総合演習 (Special Seminar for Dissertation)			

生物・環境工学専攻

生物環境情報工学特別講義	地域環境工学特別講義	生物システム工学特別講義	生物・環境工学特別研究Ⅱ
生物・環境工学特別実験実習			

生物材料科学専攻

生物材料科学特別実験Ⅱ	生物材料科学特別演習
-------------	------------

農学国際専攻

国際水産開発学特別演習 (Advanced Seminar in Global Fisheries Science)	国際動物資源学特別演習 (Advanced Seminar in Global Animal Resource Science)	国際動物生産学特別実験 (Advanced Research in Global Animal Production Science)	国際植物資源学特別演習 (Advanced Seminar in Global Plant Resource)
国際植物材料学特別演習 (Advanced Seminar in Global Plant Material Science)	国際植物生産学特別実験 (Advanced Research in Global Plant Production Science)	国際森林環境学特別演習 (Advanced Seminar in Global Forest Environmental Studies)	新機能植物開発学特別演習 (Advanced Seminar in Plant Biotechnology)
地球生物環境学特別実験 (Advanced Seminar in Global Bio-Environmental Studies)	国際環境経済学特別演習 (Advanced Seminar in International Environmental Economics)	国際環境経済学特別研究 (Advanced Research in International Environmental Economics)	国際情報農学特別演習 (Advanced Seminar in International Agro-Informatics)
国際情報農学特別実験 (Advanced Research in International Agro-Informatics)	国際農業開発学特別演習 (Advanced Seminar in Agricultural Development Studies)	国際農業開発学特別実験 (Advanced Research in Agricultural Development Studies)	農学国際特別演習 (Advanced Seminar in Global Agricultural Science)
農学国際特別実験・研究 (Advanced Research in Global Agricultural Sciences)	農学国際実地研究Ⅱ (On-site Practical Research in Global Agricultural SciencesⅡ)	環境政策特別講義 (Advanced Environment Policy)	

農学国際専攻（国際農業開発学コース）

International Program in Agricultural Development Studies (IPADS)

国際農業開発学特別セミナー (IPADS Advanced Research Seminars)	国際農業開発学特別研究 (IPADS PhD Research)	国際農業開発学実地研究 (IPADS Field Studies)	IPADS 環境政策特別講義 (IPADS Advanced Environment Policy)
---	-------------------------------------	--------------------------------------	---

生圏システム学専攻

生物多様性科学特別演習	保全生態学特別演習	緑地創成学特別演習	森圏管理学特別演習
水域保全学特別演習	耕地生圏生態学特別演習	水圏生産システム学特別演習	森林圏生態学特別演習
森林生物機能学特別演習	森林圏生態社会学特別演習	森林流域管理学特別演習	生圏システム学特別実験・研究

応用動物科学専攻

動物科学フロンティア 応用動物科学特別演習Ⅱ	応用動物科学特別実験Ⅰ	応用動物科学特別実験Ⅱ	応用動物科学特別演習Ⅰ
---------------------------	-------------	-------------	-------------

獣医学博士課程 獣医学専攻

生体機能形態学特別講義	生体機能形態学特別演習	生体機能形態学特別実験	生体防御学特別講義
生体防御学特別演習	生体防御学特別実験	獣医臨床学特別講義	獣医臨床学特別演習
獣医臨床学特別実験	獣医学特論	ライフサイエンス統計学講義	科学プレゼンテーション論Ⅰ
科学プレゼンテーション論Ⅱ	科学プレゼンテーション論Ⅲ	生体機能形態学特論	生体防御学特論
獣医臨床学特論			

研究科共通科目

農学ライフサイエンス研究倫理 Statistical Analysis	農学ライフサイエンス研究管理演習 Theory and Practice for Advanced Statistics	農林水畜産業と環境負荷 生物配列解析基礎	農林水畜産業と生態系攪乱 ゲノム情報解析基礎
バイオスタティスティクス基礎論	知識情報処理論	生物配列統計学	分子モデリングと分子シミュレーション
オーム情報解析	機能ゲノム学	システム生物学概論	構造バイオインフォマティクス基礎
フィールドインフォマティクス	農学生命情報科学特論Ⅰ	農学生命情報科学特論Ⅱ	農学生命情報科学特論Ⅲ
農学生命情報科学特論Ⅳ	農学生命情報科学実習Ⅰ	農学生命情報科学特別演習	食の科学ゼミナールⅠ
食の科学ゼミナールⅡ	食の科学ゼミナールⅢ	バイオマス利用研究特論Ⅰ	バイオマス利用研究特論Ⅱ
バイオマス利用研究ゼミナールⅠ	バイオマス利用研究ゼミナールⅡ	国際農業と文化ゼミナール	国際農業と文化実習
生物多様性と農業	自然再生事業モニタリング実習	農学における情報利用ゼミナール	Writing a Research Proposal
Writing a Research Article	サイエンスコミュニケーション	サイエンスコミュニケーション演習	農学現象の数理科学的理解
ワン・アーソロジーⅠ	ワン・アーソロジーⅡ	ワン・アーソロジーⅢ	共生型新産業創出コロキウム
環境調和実学研修Ⅰ	環境調和実学研修Ⅱ	環境調和実学研修Ⅲ	インターンシップⅠ
インターンシップⅡ	インターンシップⅢ	地域農業マネジメント	社会デザインと実践演習 (Case Study: Social Design and Management)
地球規模感染症制御学Ⅰ (Global Infectious Diseases Control ScienceⅠ)	地球規模感染症制御学Ⅱ (Global Infectious Diseases Control ScienceⅡ)	大学におけるイノベーションと社会実装	

大学院共通授業科目

微生物科学イノベーション特論Ⅰ 微生物科学イノベーション特論Ⅱ Application of Biometrics and Biostatistics to Agricultural Science 森林植物学特論
 持続的森林圏経営論 森林圏管理システム学 森林流域管理学 外国森林政策学
 森林科学セミナーⅡ 大学におけるイノベーションと社会実装

(c) 博士論文（課程博士）の論文題目 2023 年度

生産・環境生物学専攻
Fertilization controls tiller numbers via transcriptional regulation of a <i>MAX1</i> -like gene in rice (イネの分げつ数の施肥応答制御の分子機構に関する研究)
翻訳開始因子と EXA1 を介したポテックスウイルス劣性抵抗性機構に関する研究
ファイトプラズマの葉化誘導因子の水平伝播機構に関する研究
Studies on transcription factor families and the dehydrin gene family in pearl millet (<i>Pennisetum glaucum</i> (L) R. Br.) (トウジンビエの転写因子ファミリーとデヒドリン遺伝子ファミリーに関する研究)
モウソウチクのゲノム多様性に関する研究
アワノメイガの性決定機構に関する研究
昆虫の行動および形態の定量的解析における深層学習の活用に関する研究
Targeted base editing of organellar genomes in <i>Arabidopsis thaliana</i> and verification of a hypothesis about a DNA repair mechanism in plant mitochondria. (シロイヌナズナのオルガネラゲノムの標的塩基編集と、植物ミトコンドリアにおける DNA 修復機構に関する仮説の検証)
Development of variable selection methods based on machine learning and Bayesian statistics for multi-omics microbiome data analysis (マルチオミクス・マイクロバイオームデータ解析のための機械学習とベイズ統計に基づく変数選択法の開発)
培養細胞を用いたボルバキアアワノメイガ間の相互作用に関する研究

応用生命化学専攻
The Study on the Arabidopsis Carboxylesterase Gene Family that Regulates Plant Hormone Functions (植物ホルモン機能を制御できるシロイヌナズナカルボキシエステラーゼ遺伝子ファミリーに関する研究)
Functional analysis of Arabidopsis ribosomal protein genes and genome-wide analysis of translation in shoot in response to nutrient conditions (シロイヌナズナリボソームタンパク遺伝子の機能解析と地上部の栄養状態に応じた翻訳制御の網羅解析)
Molecular regulatory mechanism of the expression of the self-incompatibility in the Brassicaceae (アブラナ科植物の自家不和合性発現制御の分子機構)
交尾経験によって変化する母マウスの攻撃行動の研究
アコヤガイ真珠層のバイオミネ랄化を制御するキチン分解酵素に関する研究
Molecular mechanism analysis for the inhibition of tooth surface adhesion of <i>Streptococcus mutans</i> by lactoferrin (ラクトフェリンによる虫歯菌の歯面付着阻害の分子機構解析)
二枚貝類のカドミウム結合因子に関する研究
Studies of the skeletal muscle atrophy-responsive factor and regulatory mechanism (筋萎縮シグナル応答性分子の発現制御及び機能解析)
脳機能イメージングを用いたヒトの脳における嗅覚情報処理の時空間ダイナミクスの解明
TGF- β シグナル伝達系の抑制に関わる SMAD2/3-TMEPAI 複合体の研究
ストリゴラクトンの生合成経路解明を志向した有機合成化学的研究
食物アレルギー性小腸炎に併発する骨量減少における制御性 T 細胞の抑制機能に関する研究
Identification and characterization of a factor from human olfactory mucosa involved in olfactory sensitivity (嗅覚感度の上昇に関わるヒトの嗅粘膜液中因子同定と解析)
Study on gibberellin function in germination of root parasitic weed <i>Striga hermonthica</i> (根寄生雑草 <i>Striga hermonthica</i> 種子発芽におけるジベレリン機能の追究)
短鎖脂肪酸によるタンパク質修飾を介した腸管免疫調節機構の解明
食と健康に関連したタンパク質の化学修飾と機能獲得に関する研究

応用生命工学専攻
放線菌が生産するポリケタイド yoropyrazone および iminimycin の生合成酵素に関する研究
Structural and functional studies on enzymes encoded by the <i>amcp</i> -containing biosynthetic gene clusters conserved in a broad range of bacteria (多様なバクテリアに保存された <i>amcp</i> 含有生合成遺伝子クラスターにコードされる酵素の構造と機能に関する研究)
緑膿菌の硝酸イオン及び亜硝酸イオンの膜輸送機構に関する研究
Exploration and functional analysis of enzymes involved in sporangium formation and dehiscence in <i>Actinoplanes missouriensis</i> (希少放線菌 <i>Actinoplanes missouriensis</i> の胞子嚢形成・開裂に関わる酵素の探索と機能解析)
Studies on the regulation of mitochondrial DNA inheritance in <i>Saccharomyces cerevisiae</i> (出芽酵母におけるミトコンドリア DNA の遺伝制御に関する研究)
Studies on the biosynthesis and herbicidal mechanism of phosphonothrixin produced by <i>Saccharothrix</i> sp. ST-888 (<i>Saccharothrix</i> sp. ST-888 が生産する phosphonothrixin の生合成と除草作用機構に関する研究)
Computational Study on the Catalytic Mechanism and Substrate Specificity of Enzymes from the Meroterpenoid Biosynthetic Pathway (メロテルペノイドの生合成経路における酵素の触媒機構と基質特異性の研究)
放線菌由来新規ポリケチド合成酵素の機能と構造に関する研究
分裂酵母においてペンタデカン酸が示す生育抑制作用の分子機構に関する研究
ストレスに応答した新規リボソーム分解制御機構とその応用
ATP hydrolysis-coupled structural dynamics in two oligomeric protein complexes from hydrogen-oxidizing bacteria (水素酸化細胞由来の二種類のオリゴマータンパク質複合体の ATP 加水分解による構造ダイナミクスに関する研究)

森林科学専攻
Screening of <i>Bacillus thuringiensis</i> Cry toxins against pinewood nematode and their nematocidal mechanisms (マツノザイセンチュウに対する <i>Bacillus thuringiensis</i> Cry 毒素のスクリーニングとその殺線虫機構)
ボルネオ熱帯雨林域における天然林とオイルパームの環境応答特性
アカマツ (<i>Pinus densiflora</i>) 初生根における根細胞外トラップの機能と根圏細菌との相互作用
雪腐病菌の多様な種および種内系統が針葉樹の更新に与える影響の解明
Diversity and ecology of arbuscular mycorrhizal fungi communities associated with <i>Cryptomeria japonica</i> and <i>Chamaecyparis obtusa</i> (スギとヒノキに共生するアーバスキュラー菌根菌群集の多様性と生態)

水圏生物科学専攻
Study of neurodegenerative diseases in fish model (魚類モデルを用いた神経変性疾患の研究)
Study on the spatiotemporal distribution and characterization of floating plastic debris of Kuroshio region, western North Pacific (北太平洋黒潮域における浮遊プラスチックごみの時空間分布と特性に関する研究)
熱帯・亜熱帯海域における魚類マイクロネクトン群集の分布とその変動要因に関する研究
Transoceanic distribution of photoprotective compounds in planktonic community in the Pacific tropical and subtropical open waters (太平洋熱帯および亜熱帯貧栄養海域における浮遊生物群集の光防御物質の地理的分布に関する研究)
The Challenges to Coastal Sustainable Development in Small Island Developing States: perceptions from Cabo Verde local stakeholders (小島嶼開発途上国の沿岸開発における課題：カーボ・ベルデ国の地域利害関係者の認識から)
アサリに寄生する原虫 <i>Perkinsus olseni</i> の <i>in vitro</i> 条件下における発育ステージの変化に関する研究
アゴハゼにおける交雑ゲノム構成の共通則
Community dynamics and functional potential of microbiome in captive chum salmon (<i>Oncorhynchus keta</i>) (飼育環境下のサケ (<i>Oncorhynchus keta</i>) における微生物叢の群集動態と機能ポテンシャル)
Polarization signal from sexually dimorphic traits in <i>Sepia andreae</i> (エゾハリイカの性的二型形質に見られる偏光シグナル)
An investigation on the transcriptional landscape of a common fish bacterial pathogen during intracellular infection of host cells (魚類共通病原細菌の宿主細胞内感染時における転写の様相に関する研究)
Studies on the structure and growth characteristics of fish muscles using zebrafish and related species (ゼブラフィッシュとその近縁種を用いた魚類筋肉の構造と成長特性に関する研究)

農業・資源経済学専攻
ECONOMETRIC ANALYSIS OF POVERTY AND VULNERABILITY: EVIDENCE FROM NEPAL (ネパールにおける貧困と脆弱性に関する計量経済分析分解)
Effectiveness and Performance of the Community-based Management of Local Commons: Empirical Evidence from South Asia (コミュニティに基づいた地域共有資源管理の有効性と実績：南アジアにおける実証的証拠)
日本における農業政策金融の経済的意義
都市農業経営における情報管理の実態と発展要因の解明—情報技術導入後の継続的調査による実証分析—

生物・環境工学専攻
ヒートポンプを活用した太陽光型植物工場におけるエネルギー管理指標の提案

生物材料科学専攻
セルロース系素材を含有する複合体の調製と機能解析に関する研究
ヨーロッパ型降伏理論式による木質構造用ねじ接合部のせん断耐力算定法に関する研究
CLT—鉄骨ハイブリッド構造を対象とした接合部の開発研究
斜め嵌合接合部の強度特性に関する研究
Evaluating the Structure-Property Relationship of Sustainable Polymer Blends from Paramylon Ester Derivatives and Biodegradable Polyesters (パラミロンエステル誘導体と生分解性ポリエステルから成る持続可能なポリマーブレンドの構造と特性の相関説明)
Formation of Nanostructured Chitin Materials via Colloidal and Molecular Assembly (コロイド集合および分子会合によるナノ構造化キチン材料の形成)
微生物産生ポリエステルとカードラン誘導体の高次構造と酵素分解様式の可視化
小開口を有する面材張り耐力壁の耐力算定に関する研究
斜めビス留め接合部の引張性能に関する実験的研究
Mechanism of thermotolerance and catalysis in glycoside hydrolase family 6 cellobiohydrolase from the basidiomycete <i>Phanerochaete chrysosporium</i> (担子菌 <i>Phanerochaete chrysosporium</i> 由来 GH6 セロビオヒドロラーゼの耐熱性および触媒メカニズムの解明)

農学国際専攻
A Study on the Linkages of Agriculture and Nutrition: Focusing on the Effects of Production Diversification, Market Access, and Climate Change in Central Madagascar (農業と栄養の連環に関する研究：マダガスカル中央部における農業生産の多様化、市場へのアクセス、気候変動の効果に焦点をあてて)
Studies on 3D-based plant phenotyping by multi-scale data fusion (マルチスケールデータ融合による植物表現型の3次元計測に関する研究)
Fundamental study on the sanitation of fresh produce by nonthermal atmospheric plasma jet (非加熱大気圧プラズマジェットによる青果物のサニテーションに関する基礎的研究)
Combined application of machine learning with multi-model geospatial data for forest type classification and carbon stock estimation (機械学習とマルチモデル地理空間データの森林タイプ分類と炭素蓄積量推定への適用)
Plant phenotyping using remote sensing and machine learning approaches (リモートセンシングや機械学習を用いた植物の形質評価)
A study on the impact of weather and rice project on technology disadoption, farm investment, production capabilities and output commercialization of rainfed farm households in Ghana (ガーナの天水農家の技術不採用、農業投資、生産能力、生産量の商業化に対する天候と米プロジェクトの影響に関する研究)
Molecular and physiological studies on low nitrogen tolerance in wild rice introgression lines (低窒素耐性を示す染色体置換系統イネの分子生物学および生理学的研究)
Climate-Smart Agriculture and Smallholder Farmers Nexus in the Sahelian Region of West Africa (西アフリカ・サヘル地域における気候変動に配慮した農業と小規模農家の連携)
Comparative functional morphology of the limb skeletons in ungulates (有蹄動物における四肢骨格の比較機能形態学的研究)
Dietary transition and its impacts on nutritional intakes and environmental loads in Japan and Indonesia since 2000 (2000年以降の食遷移が日本とインドネシアの栄養摂取量と環境負荷に及ぼす影響)

生圏システム学専攻
Future scenario analysis using multiple landscape ecological approaches on the potential impact of Eco-redline policy in Chongqing capital (重慶市中心部におけるエコ・レッドライン政策の潜在的な影響に関する複数の景観生態学的アプローチを用いた将来シナリオ分析)
農地景観におけるミヤマシジミのメタ個体群の保全に向けた草刈り管理体系の探索
農地景観における草刈り強度管理がミヤマシジミ個体群とそれに関わる生物・非生物要因に及ぼす影響
Distribution patterns of lianas with different climbing types from subtropical to subboreal zones of the Japanese archipelago and the underlying mechanisms (日本列島の亜熱帯から亜寒帯における登攀様式の異なる木本性つる植物の分布パターンとそのメカニズム)
Developing the quantitative evaluation method of relational values of nature using latent structure models (潜在構造モデルを用いた自然の関係的価値の定量的評価手法の開発)

応用動物科学専攻
The role of L-PGDS derived PGD ₂ on anti-tumor drug sensitivity (抗がん剤感受性において L-PGDS 由来の PGD ₂ が果たす役割)
セネッセンスに着目した加齢に伴う哺乳類メスの繁殖能力低下メカニズムに関する研究

獣医学専攻
犬の膝蓋骨内方脱臼における大腿骨滑車形態に関する研究
The Role of Prostaglandin D ₂ in Modulating Gastrointestinal Barrier Function in Food Allergy (食物アレルギーにおいて Prostaglandin D ₂ が消化管のバリア機能に与える影響)
External genitalia phenotypes of a <i>Mab2111</i> -null mouse model for COFG syndrome (COFG 症候群の <i>Mab2111</i> 欠損モデルマウスでの外生殖器の表現型)
Development of a cell therapy using bone marrow peri-adipocyte cells for acute spinal cord injury in dogs (骨髄脂肪細胞周囲細胞を用いた犬の急性期脊髄損傷に対する細胞治療法の開発)
Study on the role of adrenomedullin in the control of luteinizing hormone secretion in mammals (哺乳類の黄体形成ホルモン分泌制御におけるアドレノメデュリンの役割に関する研究)
ウシにおける雌—雌乗駕の行動学的研究
ネコのメルケル細胞癌の臨床挙動と発がんメカニズムに関する病理学的研究
Studies on the molecular abnormalities associated with the response to chemotherapy in canine lymphoma (犬リンパ腫症例における化学療法反応性に関連する分子生物学的異常の解析)
豚の成長成績に寄与する腸内細菌叢の役割の解明とその応用
胆道閉鎖症モデルマウスでの胆汁うっ滞と肝障害
イヌの移行上皮癌における骨髄由来免疫抑制細胞の機能と腫瘍内浸潤機構に関する研究

(1) 農学部公開セミナー

最新の研究成果の社会への還元の一環として春と秋の年2回公開セミナーを企画し、2023年度までに65回実施した（第59回～62回はオンライン公開セミナーとして開催。第63回からオンライン併催）。

第64回 光

2023年6月17日（土）
「参加者330名程度（現地139名/オンライン約190名）」

- | | | | |
|-----------------------------------|------------|-----|---------|
| (1) 植物へのLED光照射と研究用LED光源システム | 生物・環境工学専攻 | 教授 | 富士原 和 宏 |
| (2) 光を操り 食糧難に立ち向かえ! | 附属生態調和農学機構 | 准教授 | 矢 守 航 |
| (3) 光で“石油”を作る植物プランクトン | 水圏生物科学専攻 | 准教授 | 岡 田 茂 |

第65回 GXってなんだろう？

2023年10月21日（土）
「参加者230名程度（現地97名/オンライン約130名）」

- | | | | |
|--|-----------|-----|---------|
| (1) GXの新潮流「ネイチャーポジティブ」 | 生圏システム学専攻 | 准教授 | 橋 本 禪 |
| (2) バイオミネラリゼーションの炭素循環 ～炭酸カルシウムは炭素固定に貢献するのか?～ | 応用生命化学専攻 | 教授 | 鈴 木 道 生 |
| (3) 森林DXから森林GXへ：北海道演習林の挑戦 | 附属演習林 | 准教授 | 尾 張 敏 章 |

(2) その他のシンポジウム等

公開セミナー以外にも、以下のようなシンポジウム等を開催した。

（農学部公開セミナー特別企画・農学部150周年記念企画） ハチ公生誕100周年「ハチ公学～ハチから広がる学の世界～」

2023年11月4日（土）
「参加者373名（現地138名/オンライン235名）」

- | | | | |
|--|------------------|-------------|---------|
| (1) ハチ公は本当に忠犬だったのか? | 東京大学大学院農学生命科学研究科 | 教授 | 溝 口 勝 |
| (2) 『東大ハチ公物語』と「犬と人のつながり」をめぐる哲学断章 | 武蔵野大学人間科学部人間科学科 | 教授/東京大学名誉教授 | 一ノ瀬 正 樹 |
| (3) ハチ公の病気と近年の犬の病気事情 | 東京大学大学院農学生命科学研究科 | 教授 | 内 田 和 幸 |
| (4) ハチ公ってどんな性格だった?!—犬の行動遺伝学— | 東京大学大学院農学生命科学研究科 | 教授 | 武 内 ゆかり |
| (5) イヌと人間の進化史 | 総合研究大学院大学 | 名誉教授 | 長谷川 眞理子 |

特別企画

「シグナチャー～日本を世界の銘醸地に～」上映会 ～醸造家、安蔵光弘氏を迎えて～

2023年7月27日（木）（参加者100名程度）

農学部卒業生・農学生命科学研究科修士の醸造家、安蔵光弘氏の半生を描いた映画「シグナチャー～日本を世界の銘醸地に～」(二ノス国際映画祭『最優秀作品賞』をはじめとして世界の映画祭で数々の賞を受賞し、2022年の11月から全国で公開された。)を上映した。

登壇者..... シャトー・メルシャン ゼネラル・マネージャー／山梨県ワイン酒造組合会長 安 蔵 光 弘
映画監督 柿 崎 ゆうじ

- (1) 安蔵氏、柿崎監督の挨拶
- (2) 上映会
- (3) 安蔵氏、柿崎監督によるトーク

社会連携リエゾンオフィス・シンポジウム ～農学生命科学分野の社会実装に向けて～

本研究科と関連のある企業関係者を招待して、最新の研究紹介等をシンポジウムにて実施した。

第1回 キックオフシンポジウム

2023年10月4日（水）
「参加者242名（現地150名/オンライン92名）」

- | | | |
|--|--------------|---------|
| (1) 社会連携リエゾンオフィス関係教員による紹介
産学連携・知的財産関連紹介 | 副研究科長/産学連携室長 | 岩 田 忠 久 |
|--|--------------|---------|

広報関連紹介（教員カタログ）等 広報室長 岩 田 洋 佳
教育プログラム（アグリコクーン・アグリバイオインフォマティクス）紹介 教育・起業支援室長 溝 口 勝
教育プログラム（One Earth Guardians）紹介 One Earth Guardians育成機構運営委員長 高 橋 伸一郎

- (2) 若手研究者によるリレー研究紹介―第①部（16名）
(3) 若手研究者によるリレー研究紹介―第②部（16名）

第2回	（農学部150周年記念企画） シンポジウム	2024年3月8日（金） 「参加者172名（現地89名/オンライン83名）」
-----	--------------------------	---

- (1) 研究者特別講演
データ駆動の意思決定 ～育種・栽培管理への応用～ 生産・環境生物学専攻 教授 岩 田 洋 佳
(2) 若手研究者によるリレー研究紹介―第①部（10名）
(3) 研究者特別講演
放射性同位体の実験 ～近年のアイソトープ利用例～ アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎
(4) 若手研究者によるリレー研究紹介―第②部（9名）

(3) 附属施設のイベント

日程	イベント名	附属施設名
2023年4月22日	東大教職員向け特別ガイド「春の彩りを訪ねて」	附属演習林富士癒しの森研究所
2023年4月23日	鴨川市・東京大学交流事業「野鳥の巣箱をかけよう！（野鳥観察会）」	附属演習林千葉演習林
2023年4月23日	休日公開	附属演習林田無演習林
2023年4月29日	公開講座「松の世界」第1講	附属演習林田無演習林
2023年5月7日	休日公開	附属演習林田無演習林
2023年5月10日	春の一般公開～新緑の清澄・郷台畑～	附属演習林千葉演習林
2023年5月10日	ぶらり 東大の森さんぽ ～新緑の「カツラの谷」を訪ねる～	附属演習林北海道演習林
2023年5月21日	公開講座「松の世界」第2講	附属演習林田無演習林
2023年5月27日	「東京大学の森」育成資金イベント「秩父演習林見学会」	附属演習林秩父演習林
2023年6月4日	第42回子ども樹木博士認定会	附属演習林田無演習林
2023年6月4日	とよた森林学校「森林入門セミナー」	附属演習林生態水文学研究所
2023年6月10日	ガイドツアー「しおじの会と東大秩父演習林を歩こう」	附属演習林秩父演習林
2023年6月11日	犬山市民総合大学環境学部 第1回講義	附属演習林生態水文学研究所
2023年6月13日～ 2024年3月5日	農と食の体験塾2023 大豆編	附属生態調和農学機構
2023年6月17日	犬山市民総合大学環境学部 第2回講義	附属演習林生態水文学研究所
2023年6月24日	公開講座「松の世界」第3講	附属演習林田無演習林
2023年7月8日	大麓山ハイキング登山会	附属演習林北海道演習林
2023年7月16日	癒しの森の朝もや音楽会	附属演習林富士癒しの森研究所
2023年7月22日	千葉県立中央博物館・千葉演習林連携事業「ナラ枯れのメカニズムと防除の実態」「南房総地域で発生したナラ枯れ被害」	附属演習林千葉演習林
2023年7月22～23日	千葉県立中央博物館・千葉演習林連携事業「夏の山の昆虫」	附属演習林千葉演習林
2023年7月27日	公開講座「東大の森林で昆虫採集」	附属演習林秩父演習林
2023年7月27～29日	高校生のための森と海のゼミナール ～大学の先生と考える環境問題と生物多様性～	附属演習林千葉演習林
2023年8月5日	公開セミナー（親子向け）空知川の水はどこから来るの？ ～森と川の関係を知る～	附属演習林北海道演習林
2023年10月1日	東大教職員向け特別ガイド「きのこに親しむ」	附属演習林富士癒しの森研究所

2023年10月7日	神社山自然観察路一般公開	附属演習林北海道演習林
2023年10月22日	とよた森林学校「森林と災害」講座第1回	附属演習林生態水文学研究所
2023年10月29日	公開講座「松の世界」第4講	附属演習林田無演習林
2023年10月30日	森の文化祭	附属演習林富士癒しの森研究所
2023年11月5日	第43回「子ども樹木博士」認定会	附属演習林田無演習林
2023年11月11日	ガイドツアー「しおじの会と東大秩父演習林を歩こう」	附属演習林秩父演習林
2023年11月12日	公開講座「伐っていかそう 伊豆の竹一竹の間伐とものづくり」	附属演習林樹芸研究所
2023年11月19日	犬山市秋のふれあい自然観察会	附属演習林生態水文学研究所
2023年11月25日	公開講座「松の世界」第5講	附属演習林田無演習林
2023年11月26日	休日公開	附属演習林田無演習林
2023年12月2日	鴨川市・東京大学交流事業「野鳥の巣箱をかけよう！（巣箱作り編）」	附属演習林千葉演習林
2023年12月3日	東大教職員向け「リース作り体験会」（ハイブリッド開催）	附属演習林田無演習林
2023年12月23日	公開講座「松の世界」第6講	附属演習林田無演習林
2024年2月22日	森林博物資料館一般公開	附属演習林千葉演習林
2024年2月22日	一般開放記念公開講座「富士癒しの森研究所の研究2023」	附属演習林富士癒しの森研究所
2024年2月22日	一般開放記念ミニガイドツアー	附属演習林富士癒しの森研究所



千葉県立中央博物館・千葉演習林連携事業「夏の山の昆虫」
(写真提供：千葉演習林)



秋のガイドツアー「きのこに親しむ」
(写真提供：富士癒しの森研究所)



犬山研究林 秋のふれあい観察会 (写真提供：生態水文学研究所)

(1) 研究成果発表 (研究科WEBに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は掲載当時)

掲載タイトル	発表者 (役職は掲載当時)	WEB掲載日
ヒト小腸オルガノイドに要する培養コストの大幅な削減に成功	応用生命化学専攻 助教 高橋 裕	2023年4月6日
富士山の亜高山帯林に広がるコケ林床上では、シアノバクテリアによる窒素固定が行われている	森林科学専攻 教授 福田 健二	2023年4月11日
肥料に変換できるプラスチックの機能化に成功～循環型プラスチック社会を担う高分子材料の設計指針を提案～	応用生命化学専攻 准教授 神谷 岳洋	2023年4月12日
[国際共同研究]世界の森林の文化・精神的な価値に挑む～聖なる森から植林地へ、そしてトトロの森へ～	森林科学専攻 教授 香坂 玲	2023年4月18日
宿主内に保存されたウイルス残骸の役割を解明	特任教授 尾仲 宏康	2023年4月18日
リジン鎖鎖アシル化による新規転写制御機構の発見～転写因子TEADを標的とした新たながん治療法開発に期待～	特別教授 吉田 稔	2023年4月18日
振動工学と農学の融合により、倒れにくい飼料トウモロコシの迅速選抜手法を開発	農学国際専攻 教授 加藤 洋一郎	2023年4月26日
昆虫の力を借りて食品廃棄物の臭気を抑える技術を開発～育てた昆虫はタンパク質資源として利用可能～	生産・環境生物学専攻 教授 霜田 政美	2023年4月28日
マツタケのゲノムを完全解読～希少化するマツタケの保全に向けて～	水圏生物科学専攻 教授 浅川 修一	2023年5月10日
ファイトブラズマの病原性獲得の原動力を解明——病原性遺伝子はトランスポゾンによってシェアされる——	生産・環境生物学専攻 植物病理学研究室 准教授 前島 健作	2023年5月16日
セルロースナノファイバーは乾くときに構造が変わる	生物材料科学専攻 助教 藤澤 秀次	2023年5月19日
地域の限られた林業労働力で持続可能な森林経営を行うには	森林科学専攻 森林利用学研究室 准教授 吉岡 拓如	2023年5月19日
皮膚に侵入してきたハチ毒の吸収を抑える生体防御機構の発見	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2023年5月23日
植物ウイルスに対する劣性抵抗性の中核因子を解明——ゲノム編集を利用したウイルス抵抗性作物の開発につながる成果——	生産・環境生物学専攻 植物病理学研究室 教授 山次 康幸	2023年5月29日
低施肥でも穂数が減らず、収量を確保できるイネを開発——ゲノム編集技術で、SDGs時代の新しいイネ遺伝資源を創成——	生産・環境生物学専攻 教授 井澤 毅	2023年6月8日
100年前の森の姿を復元する——北方針広混交林の広域スケール・個体レベルでの解析——	生圏システム学専攻 森圏管理学研究室 教授 日浦 勉	2023年6月22日
ラットとドブネズミの恐怖を緩和するフェロモンを同定	応用動物科学専攻 准教授 清川 泰志	2023年6月22日
葉緑体のゲノム編集～従来のゲノム編集酵素で置換が難しい塩基が置換可能に～	生産・環境生物学専攻 准教授 有村 慎一	2023年6月26日
日本のモウソウチクは、種子ではなく、株か地下茎（栄養体）で、海を越えて伝播してきた！——ヘテロ接合箇所に着目したゲノム解析による推定——	生産・環境生物学専攻 教授 井澤 毅	2023年6月26日
特殊なデンプンでナトリウムを吸着・無害化するヒナズキナトリウム蓄積の害から葉を守る特殊な耐塩性機構の正体	附属アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎	2023年7月6日
マウス精巣から卵巣への性転換！——胎子精巣内に眠る卵巣前駆細胞の発見——	獣医学専攻 獣医解剖学教室 教授 金井 克晃	2023年7月6日
木々の葉っぱが洪水を防いでいる！？	森林科学専攻 森林生物地球科学研究室 教授 熊谷 朝臣	2023年7月10日
アレルギー性と感染性の結膜炎における脂質産生プロファイルの違い	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2023年7月13日

掲載タイトル	発表者（役職は掲載当時）	WEB掲載日
「稲は地力でとる」を支える鉄還元菌窒素固定—窒素肥料長期施用/無施用水田における窒素固定微生物の解析—	応用生命化学専攻 土壌圏科学研究室 教授 妹尾 啓史	2023年7月21日
ネコの多発性嚢胞腎における新しい遺伝子多型を発見	獣医学専攻 獣医臨床病理学研究室 准教授 前田 真吾	2023年7月26日
人と犬のがんに共通した転移メカニズムを発見した——悪性黒色腫の治療につながる世界初の発見——	獣医学専攻 獣医外科学研究室 教授 西村 亮平	2023年7月27日
犬の特発性てんかんの抑止にドコサヘキサエン酸が効く	獣医学専攻 准教授 米澤 智洋	2023年8月3日
犬の口腔扁平上皮癌の悪性化メカニズムを発見——治療や診断に役立つ可能性のある新たな分子を発見した——	獣医学専攻 獣医外科学研究室 教授 西村 亮平	2023年8月4日
トマトに世界的な流行を引き起こす新興ウイルスの高感度診断技術の開発に成功	生産・環境生物学専攻 植物病理学研究室 教授 山次 康幸	2023年8月8日
シロイヌナズナのリボソームタンパク質の変異が、地上部のカリウム蓄積に影響を及ぼし、根の形態変化も引き起こすことを発見	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 教授 藤原 徹	2023年8月16日
イネの分けつは種子の中の異なる細胞に由来し、変異原処理したイネ個体からは数種の異なる変異群を持つ種子が得られることを発見	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 教授 藤原 徹 特任講師 山崎 清志	2023年8月16日
ゼニゴケは自身の成長制御に植物ホルモン『ジベレリン』を使わず・作らず、ヒメツリガネゴケの制御物質とも構造が異なる『もっとジベレリンに似た分子』を使う	応用生命化学専攻 准教授 中嶋 正敏	2023年8月21日
犬・猫との共生を阻む社会課題の大きな原因、動物アレルギーを克服する新しい一歩——光触媒で溶液と乾燥状態のイヌアレルギーとネコアレルギーの分解に成功——	農学国際専攻 地球規模感染症制御学会連携講座 特任教授 間 陽子	2023年8月28日
紙一重で菌は植物の敵にも味方にもなる——糸状菌の共生と寄生、対照的な戦略を分かち分子機構の発見——	附属アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎	2023年8月30日
無花粉スギの原因遺伝子を新たに特定—花粉症対策を加速—	附属生態調和農学機構 助教 角井 宏行	2023年8月30日
マウスの食物アレルギー症状を画像から自動的に評価する方法の開発	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2023年8月31日
日本列島のつる植物はよじ登り方で分布パターンが異なる——木本性つる植物群集の機能的生物地理学——	生圏システム学専攻 森圏管理学研究室 日浦 勉	2023年8月31日
尿酸降下薬アロプリノールの作用機序の詳細が明らかに——副作用の少ない新たな投与計画の最適化に期待——	応用生命化学専攻 食品生物構造学研究室 教授 永田 宏次	2023年9月1日
糸状菌（カビ）の包括的な生体膜変化の解明——生体膜組成と形態の相関を解明し、糸状菌の利用・防除に新たな知見——	応用生命工学専攻 細胞遺伝学研究室 助教 岩間 亮 教授 堀内 裕之	2023年9月1日
アザセリンの生合成経路の解明：亜硝酸非依型ジアゾ基合成経路の発見	応用生命工学専攻 醗酵学研究室 准教授 勝山 陽平	2023年9月1日
ドローンとAIで規格外野菜を減らす——畑全個体のサイズを自動計測し、最適な収穫日を推定——	附属生態調和農学機構 准教授 郭 威	2023年9月8日
アフリカ豚熱ウイルスのゲノムとトランスクリプトーム解析——新しいワクチンと治療法の探索：強毒株と弱毒株の比較研究——	応用生命化学専攻 食品生物構造学研究室 教授 永田 宏次	2023年9月11日
ゲノム編集を用いたイネの窒素利用効率の向上方法の開発	アグロバイオテクノロジー研究センター 教授 柳澤 修一	2023年9月11日
結核菌の細胞壁の分解酵素の正体を50年ぶりにつきとめた	応用生命工学専攻 酵素学研究室 教授 伏信 進矢	2023年9月20日
カイコは小さなRNAに見守られて成長する——生殖細胞ゲノムを守るpiRNAは体細胞においても重要なはたらきを担う——	生産・環境生物学専攻 昆虫遺伝研究室 准教授 木内 隆史	2023年9月22日
花粉によるアレルギー症状を抑える脂質の成分を発見——EPA代謝物がアレルギー性結膜炎を抑制——	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2023年9月26日
植物の新たな干ばつストレス応答機構を発見—「見えない干ばつ」を克服し、作物の大幅増収への道を切り拓く—	附属アイソトープ農学教育研究施設 教授 田野井 慶太郎	2023年10月3日
塩化物イオンによる味覚受容体感度調節機構の発見	応用生命化学専攻 生物機能開発化学研究室 准教授 三坂 巧	2023年10月5日

掲載タイトル	発表者（役職は掲載当時）	WEB掲載日
「生殖の壁」をつくるマスター因子の発見——種を超えた自在な作物育種へ——	応用生命化学専攻 生物有機化学研究室 准教授 藤井 壮太	2023年10月6日
エル・ニーニョが熱帯雨林の二酸化炭素吸収を決めていた	森林科学専攻 森林生物地球科学研究室 教授 熊谷 朝臣	2023年10月12日
都市の熱さで植物は赤く進化するーヒートアイランドへの急速な適応進化を初めて実証ー	附属生態調和農学機構 准教授 矢守 航	2023年10月23日
腸管バリアを強化する脂質を発見	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2023年10月25日
森林限界と南限地のダケカンバ苗木の生存率・成長率の低下はメカニズムが異なる	附属演習林 准教授 後藤 晋	2023年11月10日
ヒト肝臓オルガノイドの培養、生理機能評価、遺伝子導入に関する基盤技術を確立	応用生命化学専攻 食品生化学研究室 助教 高橋 裕	2023年11月13日
身近な雑草に見える故郷の面影ー日本の春の花はヨーロッパ原産、秋の花は北米原産が多いー	附属生態調和農学機構 准教授 矢守 航	2023年11月28日
牧野富太郎博士が命名した植物を使ってダーウィンの研究した自家受精進化の謎を解明ー新たな植物種の交配など栽培植物の育種の応用へー	附属生態調和農学機構 助教 角井 宏行	2023年11月30日
脊椎動物が極めて多様な味覚を持つことを発見——旨味と甘味の味覚の起源に迫る——	食品機能学寄付講座 特任准教授 岡田 晋二	2023年12月13日
病原性因子の標的選択性を決める新たな仕組みを発見——葉化病の治療薬開発に期待——	生産・環境生物学専攻 植物病理学研究室 准教授 前島 健作	2023年12月18日
細菌胞子の休眠と覚醒の制御に関する新たな知見：放線菌の胞子嚢胞子は完全には休眠していない？	応用生命工学専攻 醗酵学研究室 教授 大西 康夫	2023年12月26日
希少種アカモズと、普通種モズの間での交雑個体と戻し交配を初確認	森林科学専攻 森林動物学研究室 教授 久保田 耕平	2024年1月5日
精巣・精巣上体の老化が精子や受精卵の発育に及ぼす悪影響を発見——加齢男性や畜産動物の不妊治療法の開発に期待——	農学生命科学研究科 応用動物科学専攻 助教 遠藤 壱	2024年1月5日
栄養の吸収・利用効率を改善する遺伝子の発見——低肥料栽培への利用が期待——	アグリバイオインフォマティクス教育研究ユニット 准教授 大森 良弘	2024年1月12日
ラットジストロフィン遺伝子イントロン内に存在する精巣特異的遺伝子の発見	獣医学専攻 獣医生理学教室 教授 山内 啓太郎	2024年1月22日
植物リボソームの栄養濃度の感知機構を解明——栄養条件に応じた生育促進の巧みな仕組み——	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 教授 藤原 徹	2024年1月24日
生分解性プラスチックは深海でも分解されることを実証——プラスチック海洋汚染問題の解決に光明——	生物材料科学専攻 高分子材料学研究室 教授 岩田 忠久	2024年1月26日
農産物茎葉の新たな活用法を創出する常温酸処理GrAASプロセスの開発ー農業を低・脱炭素産業につなぐ新たな技術ー	附属技術基盤センター 技術専門職員 木村 聡	2024年1月26日
植物が共生菌への鉄供給によって窒素を得る仕組みを解明	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 助教 反田 直之	2024年1月29日
平野および中山間地域における農地の転換パターン：過疎化する日本の農村における地理的加重回帰分析を用いた時間的比較による要因の分析	森林科学専攻 森林風致計画学研究室 教授 香坂 玲	2024年1月30日
栄養屈性により曲がる根の内側と外側で見られる植物ホルモン応答	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 教授 藤原 徹	2024年2月2日
DNAと翻訳後修飾タンパク質を認識する二重交差性抗体の分子構造	応用生命化学専攻 食糧化学研究室 教授 内田 浩二	2024年2月14日
アルツハイマー病の発症前に脳の異常を検出する新たな方法を開発ーVRゴーグルを用いて身体に負担を与えず、低コストで実施可能ー	獣医学専攻 獣医病理学研究室 教授 内田 和幸	2024年2月14日
新しい減農薬技術でブランド京野菜を守る！ー防除効果が大幅に向上した新型赤色防虫ネットー	生産・環境生物学専攻 応用昆虫学研究室 教授 霜田 政美	2024年2月15日
牛呼吸器病症候群をひき起こすD型インフルエンザウイルスの抗原構造を解明ーワクチン開発が期待ー	獣医学専攻 獣医微生物学研究室 教授 堀本 泰介	2024年2月15日
森林環境譲与税と都道府県の政策分析：2019年から2021年までの初期段階における都道府県による市町村支援の類型化	森林科学専攻 森林風致計画学研究室 教授 香坂 玲	2024年2月16日

掲載タイトル	発表者（役職は掲載当時）	WEB掲載日
植物に化学工場を作る構造の発見——キュウリブルームレス変異株の解析から——	応用生命化学専攻 植物栄養・肥料学研究室 准教授 神谷 岳洋	2024年2月20日
研究成果を国際誌に公開～伝統的な里山管理は根っこから斜面を安定させる！～	森林科学専攻 森林生物地球科学研究室 准教授 堀田 紀文	2024年2月27日
重炭酸イオンを感知するGタンパク質共役型受容体の発見— 脳梗塞治療への応用の可能性—	応用生命化学専攻 生物化学研究室 教授 東原 和成	2024年2月27日
心的外傷後ストレス障害（PTSD）の分子機構の解明 ——cAMP情報伝達経路の過活性化がPTSDの原因となる——	応用生命化学専攻 栄養化学研究室 教授 喜田 聡	2024年3月1日
ヒグマがセミ幼虫を食べると樹木の成長が低下する：野生動物の行動変化が引き起こす生態的な帰結	生圏システム学専攻 森圏管理学研究室 教授 日浦 勉	2024年3月1日
魚の嗅覚警報物質を発見—傷ついた魚から放出される二つの物質が仲間に危険を知らせる—	応用生命化学専攻 生物化学研究室 教授 東原 和成	2024年3月4日
微生物の酵素が天然ゴムを分解するしくみを水素原子まで可視化して解明	応用生命工学専攻 酵素学研究室 教授 伏信 進矢	2024年3月18日
タンパク質の形成を助ける「空洞」に蓋がつく過程を捉えた	応用生命工学専攻 酵素学研究室 教授 伏信 進矢	2024年3月18日
犬の尿路上皮癌に対する新規治療薬候補を発見！！ ——HER2を標的とする抗体薬の効果が明らかに——	獣医学専攻 獣医外科学研究室 准教授 中川 貴之	2024年3月21日
子宮内の脂質代謝をみることで乳牛の子宮内膜炎を検出する技術の開発に成功	獣医学専攻 獣医薬理学研究室 准教授 村田 幸久	2024年3月28日

(2)受賞等（研究科WEBサイトに掲載したもの。年月日は同サイト掲載日。役職は受賞時当時）

授賞等	専攻等	受賞者（役職は受賞当時）	掲載日
令和5（2023）年度日本森林学会奨励賞	森林科学専攻	助教 芳賀 和樹	2023年5月8日
令和4年度森永賞	OSG国際防疫獣医学 寄附講座	特任助教 前澤 誠希	2023年6月13日
2023年度日本農業経営学会学術賞	農業・資源経済学専攻	准教授 八木 洋憲	2023年9月12日
日本応用糖質科学会学会賞	応用生命工学専攻	教授 伏信 進矢	2023年9月19日
	生物材料科学専攻	教授 五十嵐 圭日子	
2023-2024年度獣医学奨励賞	OSG国際防疫獣医学 寄附講座	特任助教 前澤 誠希	2023年10月25日
令和5年度（第19回）若手農林水産研究者表彰 農林水産技術会議会長賞	農学国際専攻	准教授 阪井 裕太郎	2023年11月7日
第20回（令和5年度）日本学術振興会賞並びに日本学士院学術奨励賞	応用生命化学専攻	准教授 藤井 壮太	2024年1月15日
2024年度日本農学賞受賞	地球規模感染症制御学 社会連携講座	特任教授 間 陽子	2024年2月27日

(1) 国際交流協定

国際交流協定は、下記一覧表のとおり23の国・地域と47の協定が締結されており、関係専門分野を中心に学術交流・学生交流が行われている。南開大学（中国）、ボン大学（ドイツ）との全学協定では担当部局として学内の中心的役割を果たしている。この他に、8の全学協定に関係部局として参画している。

相手国	相手大学（機関）	締結年月日/最終更新日	専門分野	学生交流の覚書 (授業料不徴収)
インド	タミルナードゥ農業大学	2013年 5月27日 2023年 5月27日	農学、生物資源環境学	○
インドネシア	ボゴール農科大学（IPB）	1988年10月21日 2021年12月28日	農学	○
	ムラワルマン大学	2006年 1月27日 2022年 4月28日	農学・生物資源環境学	○
	ランブン大学農学部	2014年 4月16日 2019年 4月16日	農学	○
韓国	ソウル大学校農業生命科学大学	2006年 9月 9日 2021年 9月 9日	農学（獣医学を除く）	○
	ソウル大学校獣医科大学	2016年 5月20日 2021年 5月20日	獣医学、畜産学、応用動物科学	○
	釜慶大学校水産科学大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
	釜慶大学校環境海洋科学大学	2007年 1月24日 2017年 1月24日	水産科学、海洋科学	○
カンボジア	カンボジア農業開発研究所	2009年 7月15日 2019年 7月15日	農学、生物資源環境学	
スリランカ	ルフナ大学	2011年 6月 7日 2016年 6月 7日	農学	○
タイ	カセサート大学獣医学部・農学部・林学部	1998年 6月 8日 2020年 8月27日	農学、生物資源環境学	○
	コンケン大学農学部	2009年 2月 3日 2019年 2月 3日	農学	○
	チェンマイ大学	2016年 6月 8日 2021年 6月 8日	農学	○
	チュラロンコン大学	2018年10月19日 2023年10月19日	農学	○
台湾	国立台湾海洋大学	2006年 4月27日 2021年 4月27日	水産学・海洋科学	○
	国立中興大学獣医学院	2008年 3月26日 2023年 3月26日	獣医学	○
	国立屏東科技大学獣医学院	2015年 6月12日 2020年 6月12日	獣医学	○
	国立台湾大学生物資源農学院	2016年 6月 7日 2021年 6月 7日	農学	○
中国	北京林業大学	1984年 2月25日 2021年 7月11日	農学	○
	東北林業大学	1996年12月23日 2022年 2月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国農業大学	1997年 9月17日 2018年11月28日	農学	○
	南京林業大学	2002年 3月 9日 2022年 3月 9日	農学、生物資源環境学	○
	中国科学院南京土壤研究所	2007年 1月 5日 2022年 1月 5日	環境保全研究分野	
	南京農業大学	2007年 3月21日 2022年 3月21日	農学、生物資源環境学	○
	* 南開大学	2010年12月 6日 2020年12月 6日	農学を含む全分野	○
	西南大学	2014年 1月 8日 2019年 1月 8日	農学、生物資源環境学	○
	海南大学林学院	2017年10月28日 2022年10月28日	農学	○

中国	浙江農林大学	2016年12月14日 2021年12月14日	農学、生物資源環境学	○
	福建農林大学	2018年 4月18日 2023年 4月18日	農学、生物資源環境学	○
ネパール	トリブヴァン大学林業研究所	2019年12月15日	農業経済学、林学、国際農学	
バングラデシュ	バングラデシュ農業大学	2021年11月 2日	農学	○
フィリピン	セントラル・ルソン州立大学	2018年 5月22日 2023年 5月22日	農学、水圏生物科学	
ベトナム	ベトナム国立農業大学	1995年12月25日 2020年12月25日	農学、生物資源環境学	○
	カントー大学	2010年 7月19日 2020年 7月19日	農学	○
マレーシア	マレーシアサバ大学	2017年 6月12日 2022年 6月12日	熱帯森林科学	○
ミャンマー	イエジン農業大学	2017年 7月21日	農学	
モンゴル	モンゴル生命科学大学	2003年10月13日 2023年10月13日	応用生物科学	○
	モンゴル国立大学工学応用科学部	2018年 1月23日 2023年 1月23日	農学	○
トルコ	エーゲ大学医学部	2014年 7月24日 2019年 7月24日	農学、医学	
アルゼンチン	ラ・プラタ大学	1990年12月 6日 2020年12月 6日	獣医学	
アメリカ合衆国	ミネソタ大学バイオテクノロジー研究所	2017年 4月 5日 2022年 4月 5日	農学	
イギリス	ニューカッスル大学農業食料農村振興研究所	2017年 4月 3日 2022年 4月 3日	農学	
オーストリア	ウィーン自然資源生命科学大学	2023年10月11日	農学、森林科学など	○
スウェーデン	スウェーデン農科大学	2004年 8月23日 2019年 8月23日	農学	○
ドイツ	カールスルーエ工科大学	2010年12月 7日 2020年12月 7日	農学	○
	* ボン大学	2016年 2月 3日 2021年 2月 3日	農学、薬学、医学などの自然科学分野	○
フランス	アグロパリテック	1996年 1月30日 2021年 3月18日	農学	○

*印は全学協定

(2)教員の海外渡航

教員の海外渡航は、渡航先も多岐にわたり多数の国々が本研究科教員の研究交流の対象となっている。事業別に分類してみると、文部科学省並びにその他の政府関係機関が22%、科学研究費補助金が38%、その他の国内資金が27%となっている。

教員の海外渡航件数（事業別）

区 分	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
1.文部科学省事業	1	0	0	2	0
2.科学研究費補助金	204	2	10	21	150
3.その他の政府関係の派遣	129	1	3	49	86
(1) 日本学術振興会	(38)	(1)	(0)	(5)	(23)
(2) 国際協力機構	(9)	(0)	(0)	(0)	(17)
(3) その他	(82)	(0)	(3)	(44)	(46)
4.その他の国内資金	148	1	3	86	106
5.外国政府・研究機関等	51	1	4	2	21
6.私費	4	0	0	8	30
合 計	537	5	20	217	393

教員の海外渡航件数（地域別）

地域	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
北 米	88	2	10	42	56
中南米	12	0	0	3	5
ヨーロッパ	112	2	4	60	81
アフリカ	13	0	2	15	16
中近東	3	0	0	3	8
中 国	82	1	3	1	33
韓 国	36	0	0	9	41
その他のアジア	179	0	1	73	141
オセアニア	12	0	0	11	12
合 計	537	5	20	217	393

※複数の地域を同一の事業で渡航した場合、複数の事業として計上。

(3)外国人研究者等の受入れ

海外との学術交流は、外国人研究者等の受入れの面でも活発に行われており、アジアからの研究者が全体の約7割を占めているのが特徴だが、部局協定などに基づいて、世界各国から研究者を受け入れている。このほかに視察などの目的で本研究科を訪れる外国人の数も多数にのぼっている。

外国人研究者等の受入人数（事業別）

区 分	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
1.文部科学省事業	0	0	0	3	0
2.科学研究費補助金	16	7	7	13	16
3.その他の政府関係機関	65	25	17	19	38
(1) 日本学術振興会	(17)	(7)	(3)	(8)	(28)
(2) 国際協力機構	(1)	(0)	(0)	(0)	(4)
(3) その他	(47)	(18)	(14)	(11)	(6)
4.その他の国内資金	89	52	33	60	48
5.外国政府・研究機関等	0	0	7	0	2
6.私費	74	0	20	0	68
合 計	244	84	84	114	172

外国人研究者等の受入人数（地域別）

地域	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度
北 米	11	4	3	9	10
中南米	2	2	3	2	3
ヨーロッパ	26	9	6	4	27
中近東	6	3	5	3	9
中 国	98	40	44	55	55
韓 国	11	6	7	6	9
その他のアジア	81	15	12	30	48
オセアニア	1	1	1	2	8
アフリカ	8	4	3	3	3
合 計	244	84	84	114	172

(4)留学生の受入れ

本研究科では大学院生を中心に多数の留学生を受入れており、2024年5月1日現在の大学院留学生は371名である。全大学院生に占める留学生の割合は、30%以上であり、これは本学でも高い比率である。

出身国・地域別に見ると、アジアを中心に多様な40ヶ国・地域から留学生を受け入れている。

課程別の在籍者数は、博士課程55.8%、修士課程36.9%、研究生7.3%であり、博士課程在籍者数の割合が非常に高い。

専修別留学生数（2024.5.1現在）

学部：応用生命科学課程2名

獣医学課程1名

専攻別留学生数

（各年度5.1現在）

年	専攻名	環境生物・生産生物学	応用生命化学	応用生命工学	森林科学	水圏生物科学	資源・環境・農業・経済学	環境工学	生物・生物材料科学	農学国際	生圏システム学	応用動物科学	獣医学	合計
2020	修士課程	10	13	15	10	11	7	7	8	35	7	6		129
	博士課程	13	27	14	6	25	10	6	12	26	4	6	12	161
	外国人研究生	3	3	8	4	3	1	5	1	3	3	1	2	37
	合計	26	43	37	20	39	18	18	21	64	14	13	14	327
2021	修士課程	8	18	21	8	11	4	12	8	40	9	8		147
	博士課程	17	27	15	8	29	13	7	8	25	4	6	12	171
	外国人研究生	1	4	8	3	1		4		2	4	1		28
	合計	26	49	44	19	41	17	23	16	67	17	15	12	346
2022	修士課程	11	18	17	7	10	7	9	9	40	12	6		146
	博士課程	19	26	16	6	27	15	7	5	32	7	5	10	175
	外国人研究生	1	6	6	3		2	1		3	4	3	4	33
	合計	31	50	39	16	37	24	17	14	75	23	14	14	354
2023	修士課程	14	16	12	4	11	14	5	7	35	12	9		139
	博士課程	19	29	22	8	26	18	5	7	36	8	5	12	195
	外国人研究生	1	5	4	4	1	3	1		3	1	3	5	31
	合計	34	50	38	16	38	35	11	14	74	21	17	17	365
2024	修士課程	18	17	9	6	15	15	4	2	35	5	11		137
	博士課程	19	26	21	10	27	16	6	10	41	10	6	15	207
	外国人研究生	1	2	4	2	2		1	1	4		5	5	27
	合計	38	45	34	18	44	31	11	13	80	15	22	20	371

※「外国人研究生」に特別研究学生、特別聴講学生は含まない。

大学院留学生在籍数（出身国・地域別）

地域	国または地域名	2020年度			2021年度			2022年度			2023年度			2024年度		
		43カ国・地域			39カ国・地域			46カ国・地域			44カ国・地域			40カ国・地域		
		国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計	国費	私費	合計
アジア	インド	2	1	3	1	1	2	3		3	4		4	3		3
	インドネシア	6	8	14	6	9	15	6	7	13	3	10	13	5	9	14
	カンボジア	1		1	1		1		1	1						
	シンガポール					1	1		2	2		1	1		1	1
	スリランカ	4	1	5	1	5	6	1	4	5	2	4	6	2	1	3
	タイ	3	4	7	2	3	5	3	1	4	5	1	6	7	2	9
	ネパール	2		2	1		1	1		1				1	1	2
	パキスタン	1		1				1		1	1		1	1		1
	バングラデシュ	5	1	6	3	3	6	3	3	6	3	5	8	1	6	7
	フィリピン	3		3	1	2	3	7	2	9	8	3	11	10	3	13
	ブルネイ													1		1
	ブータン		1	1		3	3		4	4		2	2			
	ベトナム	3	4	7	1	4	5		4	4		4	4	1	4	5
	マレーシア	3	1	4	2	1	3	3	1	4	3	1	4	4	1	5
	ミャンマー	3		3	2	1	3	4	2	6	5	2	7	4	2	6
	モンゴル	1	1	2	1	1	2									
	韓国	1	8	9	1	10	11	1	6	7	1	4	5	3	5	8
	台湾		15	15		13	13		7	7		10	10		11	11
	中国	17	198	215	16	217	233	12	220	232	13	225	238	8	240	248
	中国（香港）				1	2	3	1	1	2		1	1		1	1
	小 計	55	243	298	40	276	316	46	265	311	48	273	321	51	287	338
中近東	イラン		1	1		1	1		2	2		1	1		1	1
	シリア								1	1		1	1		1	1
	小 計		1	1		1	1	1	2	3	1	1	2	1	1	2
アフリカ	ウガンダ							1		1	1		1	1		1
	エジプト		1	1		2	2		2	2		2	2		2	2
	ガーナ		2	2	2	1	3	2		2	3	1	4	1	1	2
	ガーボベルデ	1		1	1		1	1		1		1	1			
	カメルーン							1	1	2	1	1	2			
	ガンビア		1	1										1		1
	ケニア							1	1			1	1			
	ザンビア													1	1	2
	ジンバブエ	1		1	1		1	1		1						
	タンザニア		1	1							1		1	1		1
	チュニジア	1		1	1		1		1	1		1	1			
	トーゴ											1	1		1	1
	ナイジェリア				1		1	1	1	2	1	1	2		1	1
	ブルキナファソ	1		1		1	1		2	2		2	2		2	2
	ベナン	1	1	2	1		1	1		1	2		2	1		1
	マダガスカル				1		1	1		1	1		1			
	マラウイ								2	2		3	3	1	1	2
	南アフリカ					1	1		1	1					1	1
	南スーダン											1	1		1	1
	モロッコ								1	1		1	1		1	1
	リベリア											1	1		1	1
	小 計	5	6	11	8	5	13	9	12	21	10	17	27	7	13	20
ニア オセア	ソロモン諸島											1	1		1	1
	小 計										0	1	1		1	1
北米	カナダ		1	1		1	1		1	1						
	アメリカ合衆国	1	3	4	1	3	4	2	6	8	2	4	6	2	1	3
	小 計	1	4	5	1	4	5	2	7	9	2	4	6	2	1	3
中南米	アルゼンチン		1	1		1	1		1	1						
	コスタリカ							1		1	1		1	1	1	2
	コロンビア		1	1	1	1	2	1		1	1		1			
	ブラジル	1	1	2	1	1	2	1	1	2	1	1	2	2	1	3
	ペリース	1		1	1		1	1		1	1		1			
	ペルー		1	1												
	ボリビア	1		1		1	1									
	メキシコ		1	1		2	2		1	1						
	小 計	3	5	8	3	6	9	4	3	7	4	1	5	3	2	5
ヨーロッパ	アルメニア								1	1		1	1			
	イギリス		1	1												
	イタリア	1		1	1		1		1	1						
	オーストリア										1		1	1		1
	フランス		1	1		1	1		1	1		1	1		1	1
	ポルトガル		1	1												
	小 計	1	3	4	1	1	2		3	3	1	2	3	1	1	2
	合 計	65	262	327	53	293	346	62	292	354	66	299	365	65	306	371

※特別研究学生、特別聴講学生は含まない。

(5) 国際交流室・国際学務支援チームの留学生への対応

本研究科・学部には、約400人の留学生が在籍しており、これらの留学生を支援することが国際交流室・国際学務支援チームの主要な役割である。国際交流室は、常勤教員1名、主事員1名と、5専攻から選出された教員（室長1名と室員4名）の計7名で構成され、留学生の日常生活や大学での様々な疑問や悩みごとをめぐり相談に応じている。一方、教務課国際学務支援チームでは、留学生のビザ申請、宿舍、奨学金などに関する支援を行っている。

国際交流室では、留学生向けの各種情報を日・英両言語でホームページに掲載している他、「Welcome Guide」の作成、オリエンテーションの実施、Xを通じた情報発信などもしている。更に、海外留学や国際キャリアを考えている学生や、留学生のチューター、入学希望者からの問い合わせにも対応している。

交流行事として、2023年度は、小田原（夏）や秩父（冬）への見学旅行を実施した他、留学生を中心に日本人学生や教職員も交えて文化を共有する弥生インターナショナルデーも開催した。留学生と日本人学生が昼食を取りながら交流するカンパセーション・テーブルも毎週開催している。



小田原



弥生インターナショナルデー

(6) 農学国際専攻での農学国際実地研究

農学国際専攻の大学院生には、カリキュラム「農学国際実地研究（海外実習）」の選択により単位を取得する機会が与えられている。この実習は、教員が引率する比較的短期間のスタディーツアーに参加する場合と、長期滞在型の調査研究を行う場合とがある。後者は、教員が参画している海外プロジェクト研究などでの協力関係をベースにして、海外の大学やFAOなどの国際機関に指導を依頼して行われることが多い。また、博士課程学生の場合は、フィールドワークに加えて行った国際学会等での研究成果発表も単位取得の一部としてカウントされる。

これらの多様な海外活動では、発展途上国の農山村地域の実態を把握する調査のみならず、食料・環境・エネルギー・貧困等の問題解決のためのプロジェクトに参加することもできる。そして、プロジェクトの批判的検討や、合理的に推進するためのスキームを構築したり、目的を達成するための科学的分析や政策提言の方法論について、国際協力の現場で実務に携わる人々と議論する機会もある。

（なお、大学院生は農学国際実地研究に要する経費の一部について、東京大学農学部創立百二十五周年記念事業によって創設された国際交流事業基金からの資金援助を申請できる。）



「農学国際実地研究：シベリアにおける植生調査（ロシア）」

教育研究活動の中でさまざまな実験や野外活動が行われる大学では、そこで生じがちな事故や災害を未然に防ぐ安全衛生管理が欠かせない。また、国立大学法人化によって労働安全衛生法他への対応が必要となった。そのため安全衛生管理にフォーカスした部署である環境安全管理室は次のような教育研究活動への支援を行い事故・災害の防止に努めている。多数の研究室が多彩な活動を行っている当研究科では、各研究室共通の安全衛生活動の仕組みである教育研究安全衛生マネジメントシステム（MS）を、全学に先駆け導入した。MSの主な目的は潜在的な危険有害性の評価（リスクアセスメント）と安全確保技術の伝承による事故災害の防止である。MSのベースは一般企業等で採用されている労働安全衛生マネジメントシステムだが、これを教育研究の現場に適応するよう修正を加えた。2006年度（平成18年度）の4研究室による試行を経て、2007年度から附属施設を含む全研究室で本格的に始動した。始動に際しては2006年度MS発表会（1回）、MS説明会（9回）、民間企業等見学会（4回）等の開催や、MSワーキンググループによる活動推進を行った。2023年度（令和5年度）は、87%の研究室でリスクアセスメントに着手し、73%の研究室がplan-do-check-actの1年間の活動サイクルを回した。

当研究科の野外活動は年間600～700件前後にも及ぶが、2023年度（令和5年度）もCOVID-19による活動制約を受けたものの、感染症対策を図った上で563件の活動が行われた。学生だけで行う活動も多いため、2005年度に発生した無免許潜水作業中のリサーチフェローの死亡事故を受けて、2006年度から野外活動安全衛生管理計画書の事前提出を義務づけ、野外活動計画書ワーキンググループによる検討を毎週行い、野外活動時の事故防止に努めている。

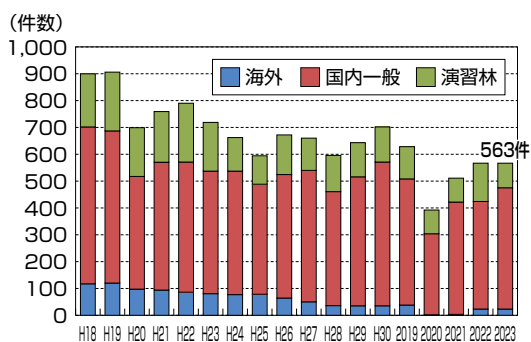
新しく着任した教職員や新入生に対する安全衛生健康ガイダンス、消火訓練や避難・安否確認を含む総合防災訓練等様々な活動を行っている。実験用化学物質・廃棄物の管理状況の把握と助言、不要な試薬や物品の早期排出の促進、化学物質や紫外線露出から身を守る保護具の着用に関する助言、地震など災害時の物品の転倒・落下防止対策提示、ゴミカートへの不適切な分別廃棄への注意喚起等も行っている。2008年秋に旧附属農場において、農薬としての登録が失効し使用できなくなっていた水銀剤が使われたことが判明して以来、旧農場において特別の管理体制を組むなど、農薬の管理に特に注意をしている。

2023年度は休業災害が7件発生し、内訳は通勤通学災害3件、屋外作業1件であり、前年度と比較して大幅に増加した。このことは教育研究活動の活性化に伴うものと考えられる。また、今年度の特徴として無人航空機による事故が2件発生しており、教育研究活動において無人航空機の使用が多い当研究科では、事故防止対策の策定が急務である。COVID-19により安全な実験操作の伝承が途切れないよう、リスクアセスメントを通じた危険源の洗い出しや安全対策の再確認、繰り返しの安全教育の徹底が求められる。

大学における教育・研究が先端的なものであればあるほど、それに対応した積極的な安全意識を身につけた若者の育成の支援も大学における環境安全管理室の責務である。



事故後の安全対策の確認（2023年度 研究科長パトロール）



野外活動安全衛生管理計画書の推移



部局災害対策本部（2023年度研究科総合防災訓練）



水消火器訓練の様子（2023年度研究科水消火器訓練）

(1) アグリコクーン

アグリコクーン（産学官民連携型農学生命科学研究インキュベータ機構）は、領域横断型教育プログラムとして2005年にスタートしました。アグリコクーン教育プログラムでは、農学ならではの6つの学際的なテーマが設定されていて、分野横断的な授業、セミナーやシンポジウム、現地実習などから構成されています。

6つのテーマとは、食の科学、バイオマス利用研究、国際農業と文化、生物多様性・生態系再生、情報利用研究、放射線影響です。テーマごとに「フォーラムグループ」が設置されていて、そこには専攻を超えた延べ約50名の教員が参加しています。フォーラムグループをベースにそれぞれが特徴ある活動を進めています。

6つのフォーラムグループ合計で9科目の授業が行われています。当初は大学院生向けの授業でしたが、2011年度からは一部の授業を学部学生が受講できるようにして、専門的な授業の早期履修制度に取り組んできました。毎年延べ約200名以上の学生が受講しています。授業では、国内外の研究者や開発者、ベンチャーやスタートアップを含めた実務家を招いた講演やゼミナールを開催することが多く、最新の学外の研究内容や社会実装、社会課題の解決といった奥深い話題に触れることができます。現地の協力を得て現地実習も行っています。

アグリコクーンで企画されたセミナー・シンポジウム等はこれまでの18年間に150回以上開催されました。アグリコクーンの活動は定型化されていないものが多く、常に新しい課題に挑戦しています。それらが円滑に進められるように専任のオフィスがサポートしており、研究科全体の教育・研究・広報活動にも広く関わっています。

(2) アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム

農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの重要性は、ますます高まっています。食、環境、生命に関わる今日の重要な社会問題に対応するため、その具体的な方法論として、また細分化された専門分野を統合する手段として、バイオインフォマティクスは必要不可欠となっています。「アグリバイオインフォマティクス教育研究プログラム」は、2004年に発足して以来、20年間にわたり、農学生命科学分野におけるバイオインフォマティクスの教育・研究活動に取り組んでいます。

本プログラムは、フィールド系も含めたバイオインフォマティクスの基礎、方法論、先端トピックスの15の科目を用意し、目的に応じ選択して受講することができるようにしています。基礎と方法論の科目は、すべて実習と一体化した講義で、実践的な技術を身につけることができます。本学の大学院生だけでなく、他大学の学生や社会人の方も受講することができ、これまでに、本研究科だけでなく他研究科、他大学や社会人を含め、3,087名（延べ8,374名）が受講してきました。所定の単位を取得した人には修了証を発行しており、これまで288名に授与しています。また、学部の展開科目も開講しています。

そのほか、一般社団法人バイオ産業情報化コンソーシアム（JBIC）会員企業向けの講習会など、様々な実践的教育も実施しています。また、データ解析に関する相談窓口としての役割やWeb連携テキストという特徴をもった次世代の教科書の刊行など、日本のバイオインフォマティクス教育拠点としての役割を担っています。

(3) One Earth Guardians育成プログラム

One Earth Guardians育成プログラムは、2018年度から受講生を迎えて活動を開始しました。SDGsに表されるように、私たちは今、すべての生物が暮らす地球環境の持続可能性と人類の生活をいかに両立させていくのかという大きな課題に直面しています。このプログラムは、生物資源の利用に根ざした実学たる農学の原点に立ち返り、100年後の地球のために、社会を巻き込みながら行動できる科学者の集団『One Earth Guardians (OEGs)』の育成を目指しています。2022年度からは全学に受講生の範囲を広げ、前期教養課程を含めた様々な所属の1期から7期までの受講生が活動しています。OEGsを目指す志のもと、専門分野や学年の異なる受講生どうしが集まり、交流がうまれる場にもなっています。

カリキュラムを構成する科目「ワン・アースロジー」では、受講生と企業等の方が共に社会の実課題に取り組み、解決方法を提案する「実学研修」を実施しています。また、受講生や社会人がフラットな立場でディスカッションを行う「One Earthology Seminar」をはじめ、産官学で取り組む多彩なOne Earthology協創の場を次々に企画、開催するなど、産官学の協働により、農学の知見や技術を活かしたSDGsの実現に資する人材の育成に向けた活動を積み重ねています。

活動の詳細についてはウェブサイトやFacebook、Instagram (one_earth_guardians) もご覧ください。

(One Earth Guardians, 地球医, OEGs, One Earthology, ワン・アースロジー は
東京大学の登録商標です)



(1) ハラスメント等相談窓口

近年、学生及び教職員の精神的な病やハラスメントに関わる事案が増加していることに鑑み、本学での対応とは別に研究科独自に以下のような複数の窓口を設けて対応している。

- 弥生ほっとライン（農学生命科学研究科・農学部倫理相談窓口）
- 農学生命科学研究科ハラスメント等対策室
- 学生相談窓口
- 留学生相談窓口

(2) ダイバーシティ推進室

農学生命科学研究科では、国籍・性別にとらわれず、すべての人が尊重され、その個性と能力を十分に発揮する環境を整える努力をしています。「大学に行くのが楽しい」とすべての人が感じることを目指して、日々改善に取り組んでいます。

東京大学において、男女の比率の不均衡は大きな課題です。現在、農学部的女子学生の割合は約25%、農学生命科学研究科的女子学生の割合は約35%です。これら女性比率の改善に向けた活動をサポートしています。



2000年に第1回の自己点検・評価を完了し、直ちに外部評価に着手した。外部評価委員会には国内の有識者（8名）のほか、国連大学のファンヒンケル学長も参加した。2001年3月の外部評価委員会では、教職員のみならず、学生との意見交換会を行い、研究教育の現状を詳細に報告し、各評価委員からの意見を集め、その結果を報告書にまとめた。評価結果は、研究科・学部活動を概ね支持する一方で、一部の施設や研究スペースの不足・老朽化、産業界との連携強化の必要性などの改善点も指摘された。

これらの意見に基づき、改善策を講じるとともに、2002年度には農学運営諮問会議を設置し、継続的に外部の有識者からの意見を求めている。2006年度には更なる活動強化を目指し、研究科内に再び自己点検評価委員会を設置し、広範な自己点検作業を開始した。

本研究科では、1991年から隔年で「研究者紹介」（当初は「年報」）を刊行していた。また、2003年度からは、ホームページ上で「研究者の紹介（研究者紹介データベース）」を公開していた。現在、東京大学では研究情報管理（RIM）システムを新たに構築中であり、このシステムを通じて、教員の氏名、学齢、職歴、研究活動、教育活動、社会活動などの情報に加え、研究業績データの閲覧可能となる予定である。本研究科では、日本の研究機関に所属する研究者の共通データベースであるresearchmapへのデータ入力も進めており、入力されたデータは構築中のRIMシステムに自動的に連携される予定である。また、2023年度より、研究活動を平易な言葉で説明した教員カタログ（<https://www.a.u-tokyo.ac.jp/profile/>）をホームページ上で公開している。これらのシステムを活用し、自己評価などに役立てるための作業を進めている。

なお、研究科の附属施設においても、自己点検活動は活発化しており、年報やニュースレターが刊行されている。



東京湾砂浜海岸での魚類相調査
（写真提供：生圏システム学専攻）



牧場実習の風景、ウマとの触れ合い第一歩
（写真提供：獣医学専攻）

17 予 算

(1) 収入・支出（科研費及び施設整備費を除く）

（2023年度決算期：含 附属施設）

収入

科 目	決算額（千円）
授業料	738,551
入学料及検定料	112,046
学校財産貸付料	87,224
寄附金受入	591,703
産学連携等研究収入	3,050,068
家畜治療収入	572,838
農場及演習林収入	128,312
刊行物売払代	257
その他収入（雑入等）	47,718
計	5,328,717

支出

区 分	決算額（千円）
人件費	1,619,541
物件費	4,133,644
計	5,753,185

※大学本部が管理する人件費（承継教職員）は含まない

※「収入」は、農学生命科学研究科・農学部に関する収入。

「支出」は、本部からの配分予算（運営費交付金等）にかかる執行実績を含むため、合計は一致しない。

(2) 外部資金等受入状況（含 附属施設）

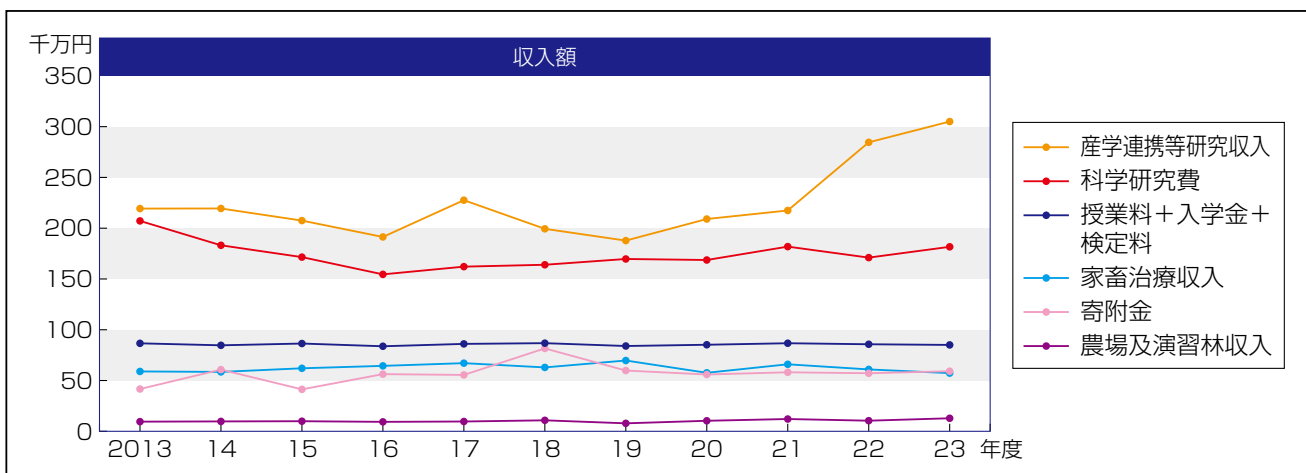
（2023年度）

寄附金受入		科学研究費		受託研究		預り補助金		民間等との共同研究	
件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）	件数	受入額（千円）
215	591,703	376	1,816,673	136	2,225,963	18	266,600	126	557,505

(3) 収入／受入合計額の推移（含 附属施設）

（単位：千円）

年度	授業料 ＋入学金 ＋検定料	寄附金	産学連携等 研究収入	家畜治療 収入	農場及 演習林 収入	科学研究費
2019	839,892	598,196	1,877,794	697,039	78,571	1,696,882
2020	852,306	559,448	2,090,478	576,070	103,580	1,777,956
2021	867,201	581,142	2,182,070	659,780	120,950	1,818,595
2022	857,150	571,730	2,845,665	609,400	104,461	1,710,379
2023	850,597	591,703	3,050,068	572,838	128,312	1,816,673



本研究科・学部では、学生及び教員・職員へ情報を提供する目的のほか、研究・教育内容の紹介など外部への広報活動のために、以下のような定期刊行物等を出版している。

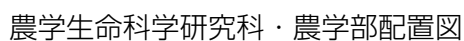
(1) 刊行物一覧

名 称	発行回数	発行部数	主な配布先
大学院農学生命科学研究科・農学部概要	年1回	1,000 (2020年度と2021年度は700)	教員・職員、来訪者
大学院農学生命科学研究科・農学部英文概要	不定期		外国人来訪者
農学部便覧	年1回	800	学生・教員、他学部
農学生命科学研究科便覧	年1回	1,800	学生・教員
農学部授業時間割	年1回	1,000	学生・教員、他学部
弥生（農学部広報誌）	年2回	6,000/回 (2020年度～2023年度は4,000程度/回)	教員・職員、他学部、他大学、来訪者
農学生命科学研究科技術職員研修会資料集	年1回	200	教員・職員、他学部、他大学
21世紀を担う農学（進学ガイダンスパンフレット）	年1回	2,600	学生・教員
学生によるガイダンスブック	不定期		学生・教員
演習林概要（全演版）	隔年	日本語版1,000 英語版 500	学生、教員、職員、来訪者、演習林Webサイトで公開
演習林概要（各地方演習林版）	隔年	日本語版 各700～1,000 英語版 各30～110	学生、教員、職員、来訪者、演習林Webサイトで公開
演習林年報	年1回	150	教員・職員、他学部、他大学、UTokyo Repositoryと演習林Webサイトで一般公開
演習林	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。教員、他学部、他大学に2号合本の印刷版を配布
東京大学農学部演習林報告	年2回	700 (印刷版年1回)	UTokyo Repositoryで一般公開。教員、他学部、他大学に2号合本の印刷版を配布
morikara	年2回	1,600/回	教員、職員、他大学、演習林Webサイトで公開
演習林への進学ガイド	年1回		PDF版を作成し、演習林Webサイトで公開
附属演習林技術職員等試験研究・研修会議報告	年1回	300	教員、職員、他大学
浜名湖を巡る研究者の会	年1回	100	教員・職員、他学部、他大学
農学部公開セミナー 講演要旨集	年2回	200程度/ (回による) (2020年度と2021年度はWeb掲載のみ)	セミナー参加者
農学生命科学研究科・農学部教員カタログ	随時更新		HPからの一般公開 https://www.a.u-tokyo.ac.jp/profile
生態調和農学機構年報	年1回		UTokyo Repositoryで一般公開
生態調和農学機構紹介パンフレット	不定期	6,000	教員、職員、他学部、他大学、来訪者
食の安全研究センター紹介パンフレット	不定期	1,000	教員・職員、来訪者
VMC News Letter	不定期	2,000	教員・職員・寄附者、他動物病院

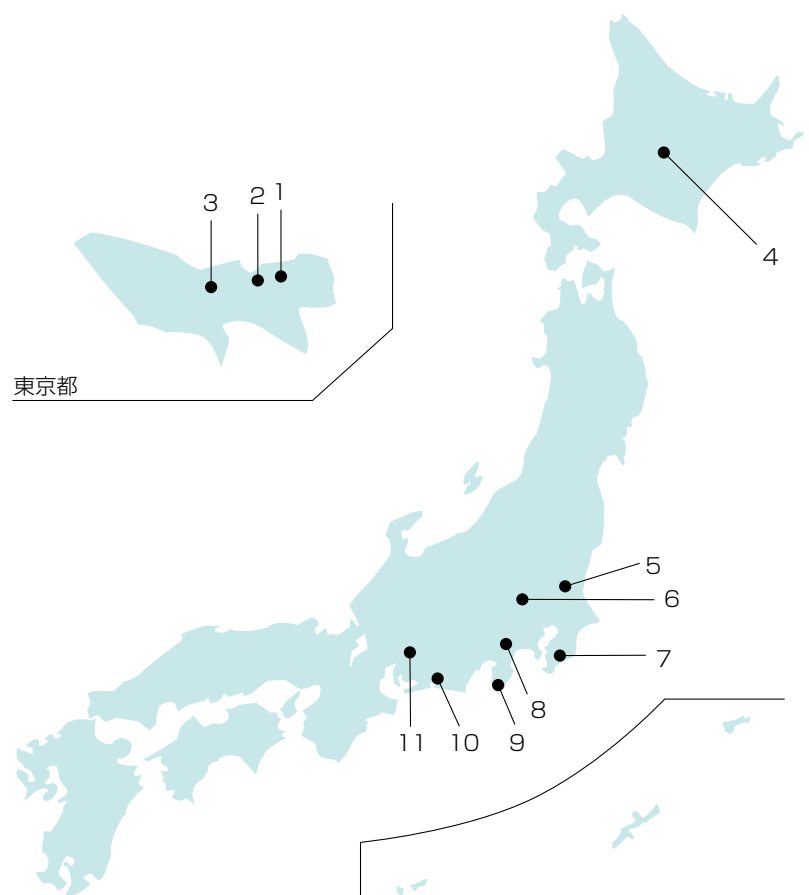
(2) 公式ホームページなど

・農学生命科学研究科・農学部

<https://www.a.u-tokyo.ac.jp/index.html>



1. 弥生地区
2. 小石川樹木園
3. 生態調和農学機構・田無演習林
4. 北海道演習林
5. 牧場
6. 秩父演習林
7. 千葉演習林
8. 富士癒しの森研究所
9. 樹芸研究所
10. 水産実験所
11. 生態水文学研究所





東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部

Graduate School of Agricultural and Life Sciences / Faculty of Agriculture, The University of Tokyo

【発行】 東京大学大学院農学生命科学研究科・農学部広報室
〒113-8657 東京都文京区弥生1-1-1
TEL.03-5841-5484
HP <https://www.a.u-tokyo.ac.jp/>